

ハリバドラ著『現観莊嚴論註』

第IV章「あらゆる形相についての完全な理解」和訳・解説

<0> 第IV章の目的

Am68,2
P285,2,4
D104,b,1
DA23,2,5
PP93,2,8

¹→三種の全知²について熟知した者は〔その三種の全知に〕自在になるために、←¹再び³→すべての形相と実践道と事物についての認識←³〔すなわち、三種の全知〕を拱合するという仕方、三種の全知を修習する。だから、あらゆる形相についての完全な理解 (sarvākārābhisambodha 一切相現等覚) を説く。

ハリバドラ Haribhadra によれば第IV章の目的は、『現観莊嚴論』Abhisamayālamkāraの第I-III章において、あらゆる形相についての智慧と、実践道についての智慧と、あらゆる事物についての智慧という三種の全知について熟知した者が、その対象である三種の全知にさらに自在になるために瞑想することにある。

第I-III章における実践方法である「熟知」と、第IV章における実践方法である「修習」の違いは、ダルマミトラ Dharmamitraの複註『語句の解明』Prasphuṭapadāによれば、前者が聴聞と思索より成る知恵を本質としているのに対して、後者は瞑想より成る知恵を本質としていることである (PP93, 3,2)。仏教では一般に実践過程を、聴聞、思索、瞑想という三段階に分ける。この三段階の実践は、方法が異なっているが、対象は同一であるから、前三章において聴聞と思索によって熟知した三種の全知という対象を、第

IV章において瞑想によって「再び」修習するのである。

また、『大註』においてハリバドラは、三種の全知とあらゆる形相についての完全な理解の差異を、アーリヤ・ヴィムクティセーナ Ārya Vimuktisena にならって⁴次のように説明する。

Wo763,12 | また、三種の全知とあらゆる形相についての完全な理解⁵の相違
Tu453,11 |
SN201,5,8 | は何か。

或者は「三種の全知は上述したとおりに形相が一定しているから、特定の形相を領域としている。一方、あらゆる形相についての完全な理解は、すべての形相を領域としている」と言う。

別の者は「指標的なもの (lākṣaṇika) として、三種の全知は確立される。一方、あらゆる形相についての完全な理解は実践的なもの (prāyogika) である」と言う。

他の者は「あらゆる形相についての完全な理解は、内なる敵 (vipakṣa 所対治) と対症療法を確立することによって顯示される。一方、三種の全知は本来静的な形相を持っているから、同様ではない」と言う。

<1> 三種の全知の形相

<1.1> 形相についての一般的説明 (第1偈)

Am68,4
P285,2,5
D104,b,2
DA93,4,7

事物認識の諸形態に諸形相がある、というのが
[形相の] 特質である。

三種の全知には三種類あるから、それら〔形相〕は三種類であると考えられる。(1)

〔無常なるものなどを〕常住であるなどと〔顛倒して〕把握する内なる敵にとっての対症療法であるものを自性とし、¹ 無常なるものなどを対象とする智慧の諸形態を、形相として確立することが〔形相の〕特質である。それら〔形相〕は、全知に三種の区別があるから、三種類のみであると考えられる。

形相 (ākāra) は主体が対象をどのように把握したかという、認識の内容である。「これは無常である」と命題化できるような認識が生ずる場合を考えてみよう。「これ」という語によって言及される対象 x を、主体が無常であると把握する。この場合の形相は、主体が対象に関して有している意識内容、すなわち「無常なるもの」あるいは「無常性」である。「無常なるもの」あるいは「無常性」という形相は、対象の側に存するのではなく、主体の側に存している。主体の側に、対象の持つ多くの側面を捨象して、「無常なるもの」あるいは「無常性」とのみ判断する認識の形式があり、その形式に従って x を判断するから、 x を無常であるとみなすのである。つまり、 x を無常であると認識するのは、 x という対象の側に存する無常性という属性のためではなく、認識主体の側に、或るものを「無常である」と判断する、認識の一定の形式が存するからである。²

さて『現観莊嚴論』は第1偈において形相を次のように定義し、形相が

認識の形式に属する内容であることを説いている。

vastu-jñāna-prakāraṇām ākāra itī lakṣaṇam/ (Wo445,18)

事物認識の諸形態に諸形相がある、というのが〔形相の〕特質である。

"vastu-jñāna-prakāra" (事物認識の形態) という語が先の説明における「認識の形式」に相当し、"ākāra" (形相) という語が「認識の内容」に相当している。"vastu-jñāna-prakāra" が属格 (genitive) 語尾を取り、"ākāra" が主格 (nominative) 語尾を取っているので、両者は斜格関係にある。つまり、認識の形式に内容があることを『現観莊嚴論』は述べている。

一方ハリバドラは註釈において、『現観莊嚴論』と若干異なる理解を示している。彼の『小註』は次のように形相を定義する。

anityādy-ālambana-jñāna-prakāraṇām ākāratvena vyavasthāpanam
lakṣaṇam/(Am68,6-7)

無常なるものなどという、対象認識の諸形態を、形相として確立することが〔形相の〕特質である。

"ākāratva" (形相であること) は "ākāra" に、抽象名詞を作る接尾辞 "-tva" の加わったものである。この『小註』には『現観莊嚴論』に現れない "vyavasthāpana" (確立すること) という概念が用いられているため、その語との関係において "ākāratva" は具格 (instrumental) によって示されている。しかし "ākāratva" と "anityādy-ālambana-jñāna-prakāra" (無常なるものなどという、対象認識の形態) の間の関係は、後者が属格

語尾を取っていることから、斜格関係であることが知られる。

サンスクリットでは、

X (属格) + Y -tva

という表現によって、Xの指し示すもの x と Yの示すもの y が同一対象であることを意味する。たとえば、

anityatvaṃ śabdasya.

声に無常性（無常であること）がある。

という表現と、

anityaḥ śabdaḥ.

声は無常である。

という表現は、同じ状況に対する二通りの叙述方法なのである。すなわち、声と無常なるものが同一対象である場合に、以上の二通りの表現が可能である。

『小註』に書かれた文の場合も構造は同じである。便宜上、“ākāratva”が主格語尾を取っているものとして考察を進めよう。

anityādy-ālabana-jñāna-prakāraṇām ākāratvam.

無常なるものなどという、対象認識の諸形態に、形相であることがある。

という表現は、anityādy-ālabana-jñāna-prakāra と ākāra が同一のものであることを示す。つまり、

anityādy-ālabana-jñāna-prakāra ākāraḥ.

無常なるものなどという対象認識の諸形態は、諸形相である。

という表現と情報を同じくしているのである。

"prakāra" と "ākāra" という語を含み、"prakāra" という語が属格語尾をとっている点で、『現観莊嚴論』と『小註』は等しい。しかし『現観莊嚴論』では「形態に形相がある」ことを意味していたのに対し、『小註』では「形態が形相である」ことを意味していた。『小註』は斜格によって形態と形相の同一関係を示したのである。

一方、形態と形相の同一関係を同格によって示す例が、他の文献において見られる。『俱舍論』 *Abhidharma-koṣa-bhāṣya* は次のように説く。

sarveṣām citta-caittānām ālambana-grahaṇa-prakāra ākāra iti/
(AKBh401,21)

すべての心と心作用の、対象把握の形態が形相である。

この場合、"prakāra" の性、数、格と、"ākāra" の性、数、格は、男性、単数、主格で一致しており、「形態」と「形相」が同格であることが知られる。すなわち『俱舍論』においても、対象把握の形態がそのまま形相であると説かれている。ハリバドラは『大註』においてしばしば『俱舍論』を引用しており、この形相の定義も当然知っていたものと思われる。

サンスクリット原文のみでなく、チベット訳についても見ていこう。『現観莊嚴論』の原文は形態と形相を所有関係にあるものと捉えていたが、チベット訳では両者は同一関係のものとして理解されている。第一偈の前半は次のように訳されている。

gzhi shes pa yi bye brag rnam/ rnam pa zhes bya mtshan nyid
de/ (P285,2,5)

事物を認識する諸区分が形相であるというのが〔形相の〕特質である。

「諸区分」(bye brag rnam)の後に、いかなる助辞も用いられずに、直接「形相」(rnam pa)が続いている。このことは「諸区分」と「形相」が同格であることを示す。一方、『小註』のチベット訳は次の通りである。

mi rtag pa la sogs pa la dmigs pa'i ye shes kyi bye brag
rnam rnam pa nyid du rnam par bzhag pa ni mtshan nyid de/
(P285,2,6)

無常なるものなどを対象とする智慧の諸区分を、形相として確立することが〔形相の〕特質である。³

"rnam pa" (形相)に続く"nyid"は、抽象名詞を作るためのサンスクリットの接尾辞 "-tva" あるいは "-tā" を、チベット語に翻訳するための語であるが、本来「自身」を意味する語であり、強意を示すサンスクリットの"eva" を訳す場合にも用いられ、そのチベット語自身には抽象名詞を作る機能がない。その語に続く"du"は、内容を示す於格助辞である。したがって「諸区分」(bye brag rnam)と、その内容である「形相」(rnam pa nyid)が同一であることが知られる。すなわち、『小註』のチベット訳においても、「諸形態が形相である」ことが説かれている。サンスクリットにおいて属格を用いた表現によって説かれた形態と形相の関係が、同一関係であることをチベットの翻訳者たちは理解していた。

以上のように、『現観莊嚴論』における「形態に形相がある」ことを説いた文を、ハリバドラやチベットの翻訳者たちは「形態が形相である」こ

とを述べた文と解釈した。この歴史的な解釈は、『俱舍論』などの伝統も継承しているにしても、『現觀莊嚴論』の説く「形態に形相がある」ことに「形態が形相である」と解釈する余地があったことを伺わせる。先に、『現觀莊嚴論』の第1偈の「事物認識の形態」が認識の形式であり、「形相」はその形式に属する内容であると理解した。しかし『現觀莊嚴論』において、形式と内容の区別はあまり明確でなかった可能性がある。ある形式が認識に適用されれば、その認識の内容は必然的に決定されるからである。『現觀莊嚴論』は、両者の間にほとんど区別がないような形式と内容に一応の区別をつけて、その上で後者が前者に属すると説いたと考えられる。そして『現觀莊嚴論』における形態と形相の関係が本来そのようなものであったから、ハリバドラやチベットの翻訳者たちは「形態が形相である」と解釈したのであると思われる。

<1, 2> 形相についての個別的説明

以後、伝統的な十六形相（行相）とのかかわりで、具体的な形相が説かれる。伝統的な十六形相は次に示すとおりである。

苦諦： 無常なるもの (anitya 無常)、苦なるもの (duḥkha 苦)、空なるもの (śūnya 空)、無我なるもの (anātman 無我)。

集諦： 苦の因 (hetu 因)、苦を集起するもの (samudaya 集)、苦を生起するもの (prabhava 生)、苦の縁 (pratyaḥya 縁)。

滅諦： 止滅した状態 (nirodha 滅)、寂靜なるもの (śānta 靜)、妙樂なるもの (pranīta 妙)、遠離した状態 (niḥsaraṇa 離)。

道諦：涅槃への道 (mārga 道)、涅槃への手段 (nyāya 如)、涅槃への行 (pratipatti 行)、涅槃への超出に導くもの (nairyānika 出)。

<1. 2. 1> あらゆる事物についての智慧の二十七形相 (第2偈)

Am68, 9
P285, 2, 7
D104, b, 4
DA23, 3, 4
PP94, 3, 4

形相を一般的に示し終えた。今や個別に述べる。

無なるものという形相より始まって、動揺しない
ことという形相までの
それら [あらゆる事物についての智慧の形相] は、
[苦、集、滅の] 各諦について四種であり、道 [諦]
について十五種であると説かれる。(2)

その [三種の全知の] うちで、あらゆる事物についての智慧に関しては [二十七形相が説かれる。苦諦について、]

- 1) 無なるもの (asat, Tib., med pa)
- 2) 生じないもの (anutpāda, Tib., mi skye ba)
- 3) 分離したもの (viveka, Tib., dben pa)¹
- 4) 屈しないもの (anavamardanīya, Tib., mi brdzi ba)
[という四形相がある。集諦について、]
- 5) 形跡がないもの (apada, Tib., gnas med pa)
- 6) 虚空 (ākāsa, Tib., nam mkha')
- 7) 表現できないもの (apavyāhāra, Tib., brjod du)

med pa)

8) 名のないもの (anāma, Tib., ming med pa)

[という四形相がある。滅諦について、]

9) 行くことがないもの (agamana, Tib., 'gro ba med pa)

10) 除去されないもの (asamhārya, Tib., mi 'phrogs pa)

11) 無尽なるもの (akṣaya, Tib., mi zad pa)

12) 生ずることがないもの (anutpatti, Tib., skye ba med pa)

という[四]形相がある。[これらの]十二種は順次に、苦[諦]などの三諦についての、無常なるもの[という形相]などを特質としている。

形相の分類は、四諦のうちのいずれに関係するかによって決定される。ここでは、あらゆる事物についての智慧の形相が、苦諦、集諦、滅諦についてそれぞれ四種、道諦について十五種、掲げられる。

ハリバドラが挙げる、無なるもの (asat) より生ずることがないもの (anutpatti) までの形相は、伝統的な十六形相のうち苦諦から滅諦までについての、無常なるもの (anitya) より、遠離した状態 (niḥsarana) までに対応している。

Am68, 15
P285, 3, 2
D104, b, 6
DA23, 4, 6

煩惱という障害 (kleśāvaraṇa 煩惱障) の対症療法として、漏出のない (anāsrava 無漏) 道が一種、また、あら

ゆる事物についての智慧は〔声聞のみならず〕独覚も包摂するので、それゆえに彼ら〔独覚〕の、認識対象に対する障害（jneyāvaraṇa 所知障）の対症療法として、漏出のある（sāsrava 有漏）修道と漏出のない〔見道（Wo448, 18）〕との二種がある。だから、道は三種類である。

障害は、修行者が全知者になる上での、内なる敵である。その障害には二種類ある。煩惱という障害と、認識対象に対する障害とである。前者をすべて取り去ったときに阿羅漢という全知者になり、後者をも完全に取除いたときに仏という全知者となる。声聞は、煩惱という障害をすべて断じて阿羅漢になる。独覚は、声聞よりも優れた聖者として規定されているので、阿羅漢になるためには、さらに認識対象に対する障害の一部も断じなければならない。あらゆる事物についての智慧は声聞の智慧であると同時に、独覚の智慧でもある。したがって、あらゆる事物についての智慧である実践道は、声聞と独覚に共通の、煩惱という障害に対する対症療法と、独覚のみの、認識対象に対する障害の対症療法という二種類に分けられる。そのうち、煩惱という障害にとっての対症療法のすべては煩惱を離れているから、漏出のない道である。一方、独覚にのみ属する、認識対象に対する障害への対症療法である実践道のうち、見道は必ず瞑想中であるので煩惱を離れているが、修道は瞑想から出定している状態も含んでいるので、煩惱を伴っているから、漏出のない見道のものと漏出のある修道のものとの二種に細分される。したがって、あらゆる事物についての智慧に属する道は三種類に分類される。

Am68,18
P285,3,3
D104,b,7
DA23,4,8

その〔3種類の道の〕うち最初〔の、煩悩という障害の対症療法である道〕について、

13) 行為者が不在のもの (akāraka, Tib., byed pa po med pa)

14) 認識者が不在のもの (ajānaka, Tib., shes pa po med pa)

15) 移動がないもの (asamkrānti, Tib., 'pho ba med pa)

16) 調伏されることがないもの (avinaya, Tib., 'dul ba med pa)

という形相がある。〔これらの〕四種は順次に、〔道諦についての、涅槃への〕道〔という形相〕などを特質としている。

第二〔の、認識対象に対する障害の対症療法である漏出のある修道〕について、

17) 夢 (svapna, Tib., rmi lam)

18) こだま (pratiśrutkā, Tib., sgra brnyan)

19) 映像 (pratibhāsa, Tib., mig yor)

20) 陽炎 (marīci, Tib., smig rgyu)

21) 幻 (māyā, Tib., sgyu ma)

という形相がある。〔これらの〕五種は順次に、

17') 自性の不在のもの (niḥsvabhāva, Tib., ngo bo nyid

med pa)

18') 生じていないもの (anutupanna, Tib., ma skyes pa)

19') 滅していないもの (aniruddha, Tib., ma 'gags pa)

20') 元来寂靜なるもの (ādi-śānta, Tib., gzod ma nas zhi ba)

21') 本来的に涅槃に入っているもの (prakṛti-parinirvṛti, Tib., rang bzhin gyis mya ngan las 'das pa)

を特質としており、総じて、認識対象に対する障害の対症療法である。

第三 [の、認識対象に対する障害の対症療法である漏出のない見道] について、

22) 汚染がないもの (asaṃkleśa, Tib., kun nas nyon mongs pa med pa)

23) 清淨がないもの (avyavadāna, Tib., rnam par byang ba med pa)

24) 汚濁がないもの (anupalepa, Tib., gos pa med pa)

25) 戲論がないもの (aprapañca, Tib., spros pa med pa)

26) 高慢がないもの (amanana, Tib., rlom pa med pa)

27) 動揺しないもの (acala, Tib., mi g'yo ba)

という形相がある。[これらの]六種は順次に、²→特定
な認識対象に対する障害であるところの

22') 汚染 (samkleśa, Tib., kun nas nyon mongs pa)

[についての概念知]

23') 清浄 (vyavadāna, Tib., rnam par byang ba) [につ

いての概念知]

24') 煩悩の影響 (kleśa-vāsanā, Tib., nyon mongs pa'i

bag chags) [についての概念知]

25') 色などの戯論 (rūpādi-prapañca, Tib., gzugs la

sogs pa'i spros pa) [についての概念知]

26') 自らの證得 (svādhigama, Tib., rang gi rtogs pa)

[についての概念知]

27') 墮落についての概念知 (parihāṇi-vikalpa, Tib.,

yongs su nyams par rnam par rtogs pa)

の対症療法である。←²

以上のように道諦について十五形相ある。

総計して、あらゆる事物についての智慧の形相は二十七種
である。

三種類の道のうちで最初のものについての形相である「行為者がいないもの」から「調伏されることがない」ものまでは、先の三諦の場合と同様に、伝統的な形相である涅槃への道 (mārga) から涅槃への超出に導くもの (nairyāṇika) までに対応している。

第二の道についての形相である夢から幻までを、ハリバドラは『大乘莊嚴經論』 Mahāyānasūtrālamkāra における「自性のないもの」などの五つの概念によって説明する。『大乘莊嚴經論』XI. 51によれば、自性のないものは生じていないものであり、生じていないものは滅してないものであり、滅してないものは元来寂靜なるものであり、元来寂靜なるものは本来的に涅槃に入っているものである。それぞれ、前者が後者の根拠となっている。³ ハリバドラはその事情について言及しないが、『大乘莊嚴經論』における順序のままに五種を挙げ、それらが夢などの形相の特質であると規定している。

さて、第二の道についての形相は「総じて、認識対象に対する障害の対症療法」である。しかし、第三の道についての形相は、たとえば汚染がないものという形相が汚染についての概念知にとっての対症療法であるように、いかなる障害にとっていかなる形相が対症療法として機能するかが決定している。

<1. 2. 2> 実践道についての智慧の三十六形相（第3偈）

Am68,38
P285,3,8
D105,a,4
DA24,1,2

その次に実践道についての智慧の形相を説く。

因と道と苦と滅に関して順次に、

それら〔実践道についての智慧の形相〕は八種、

七種、五種、十六種であるといわれる。（3）

汚染〔の側〕並びに〔汚染の側と〕異なる〔清浄の〕側
 〔という観点〕に依れば、集〔諦は汚染の側における因で
 あり〕また道諦は〔清浄の側における〕因であるが、苦
 〔諦は汚染の側における果であり〕また滅諦は〔清浄の側
 における〕果である。以上のように内容の点から〔四諦の
 順序が〕示された。集、道、苦、滅の諦に関して順次に、
 〔実践道についての智慧の〕形相は「八種」云々と〔第三
 偈に説かれた通りの種類があることを〕理解すべきである。

仏教実践論は世界を汚染の側 (sankleśa-pakṣa 雑染品) と清浄の側 (vyavadāna-pakṣa 清浄品) に二分する。前者を否定して後者を肯定することによって実践が進められる。四諦との関連で言えば、苦諦と集諦が汚染の側に属し、滅諦と道諦が清浄の側に含まれる。一般に四諦は、現実の輪廻の苦悩相である苦諦、その苦悩の原因である煩惱についての集諦、苦悩を離れた理想境地である涅槃についての滅諦、その涅槃に達する手段である実践についての道諦という順序で説かれる。しかしここでは、集諦、道諦、苦諦、滅諦という順序で四諦が示される。すなわち、汚染の側の因、清浄の側の因、汚染の側の果、清浄の側の果という「内容の点から」示されるのである。

<1. 2. 2. 1> 因についての十五形相

Am69,3
 P285,4,3
 D105,a,7
 DA24,1,5

その〔四諦の〕内で〔集諦について〕、

1) 貪欲を離れたもの (virāga, Tib., 'dod chags dang

bral ba)

- 2) 安住しないもの (asthāna, Tib., mi gnas pa)⁴
- 3) 寂靜なるもの (śānta, Tib., zhi ba)
- 4) 貪欲がないもの (arāga, Tib., 'dod chags med pa)
- 5) 憎悪がないもの (adveṣa, Tib., zhe sdang med pa)
- 6) 愚蒙がないもの (amoha, Tib., gti mug med pa)
- 7) 煩惱がないもの (niḥkleśa, Tib., nyon mongs pa med pa)
- 8) 衆生がないもの (niḥsattva, Tib., sems can med pa)

という形相がある。[これらにとっての内なる敵は]順次に、

[苦の]因であるものが

- 1') 欲 (chanda, Tib., 'dun pa)
- 2') 貪欲 (rāga, Tib., 'dod chags)
- 3') 快樂 (nandī, Tib., dga' ba)

であり、[苦を]集起するものが

- 4') 貪欲 (rāga, Tib., 'dod chags)
- 5') 憎悪 (dveṣa, Tib., zhe sdang)
- 6') 愚蒙 (moha, Tib., gti mug)

であり、[苦を]生起するものが

- 7') 妄想 (parikalpa, Tib., kun tu rtog pa)

であり、[苦の]縁であるものが

8') 衆生への執著 (sattvābhiniveśa, Tib., sems can tu mngon par zhen pa)

である。それら[四種類八項の内なる敵]にとっての対症療法であるものが、三種、三種、一種、一種である。

あらゆる事物についての智慧の形相の場合と同様に、実践道についての智慧の形相も伝統的な十六形相との対応によって説かれる。しかし、あらゆる事物についての智慧の場合はその形相をそのまま十六形相と同一視することができたが、実践道についての智慧の形相と十六形相の関係はそれよりも複雑である。集諦の場合、「苦の因」などによって言及されているのは智慧でなく、智慧によって否定される内なる敵である。形相はその、苦の因などとして同定された八種の内なる敵の対症療法である。

Am69,7
P285,4,6
D105,b,2
DA24,2,8

[道諦について、]

- 1) 無量なるもの (apramāṇa, Tib., tshad med pa)
- 2) 二極端に随順しないもの (anta-dvayānanugama, Tib., mtha' gnyis dang ma 'brel ba)
- 3) 区別されないもの (asambhinna, Tib., tha mi dad pa)
- 4) 最高であると把捉されないもの (aparāmrṣṭa, Tib., mchog tu 'dzin pa med pa)⁵
- 5) 非概念知 (avikalpa, Tib., rnam par mi rtog pa)
- 6) 測量され得ないもの (aprameya, Tib., gzhal du med

pa)

7) 愛著がないもの (asaṅga, Tib., chags pa med pa)

という形相がある。[これらは]順次に、

1') あらゆる衆生に[解脱の]機会を与える道 (mārga, Tib., lam)であるもの

2') あらゆる衆生に[解脱の]機会を与える[道]のあり方

3') 手段 (nyāya, Tib., rigs pa) であるもの

4') 手段のあり方

5') 行 (pratipatti, Tib., sgrub pa) であるもの

6') 行のあり方

7') 超出に導くもの (nairyāṇika, Tib., nges par 'byin pa) であるもの⁶

というそれらを自性としており、二種、二種、二種、一種である。

以上のように道諦には形相が七種ある。

<1. 2. 2. 2> 果についての二十一形相

Am69, 11
P285, 4, 8
D105, b, 4
DA24, 3, 6

[苦諦について、]

1) 無常なるもの (anitya, Tib., mi rtag pa)

2) 苦なるもの (duḥkha, Tib., sdug bsngal ba)

3) 空なるもの (śūnya, Tib., stong pa)

4) 無我なるもの (anātman, Tib., bdag med pa)

という形相および、第五の

5) 特質がないもの (alakṣaṇa, Tib., mtshan nyid med pa)

という形相を自性とするものがある。

以上のように苦諦には形相が五種ある。

苦諦の五形相のうち始めの四種は伝統的な形相と同一である。それらと、第五の「特質がないもの」との関係が何であるかが問題となろう。上に訳した『小註』の本文は次のように説いている。

anitya-duḥkha-śūnyānātmākārāḥ pañcamo 'lakṣaṇākāra-svabhāva
iti (Am69,11)

ここでは伝統的な四種の形相が複数で示されており、「第五の、特質がないものという形相を自性とするもの」が単数で示されている。この両者間の内的連関は、文面上見出されない。⁷

一方、『大註』は次のように説いている。

anitya-duḥkha-śūnyānātmākārāḥ pañcamālakṣaṇākāra-svabhāvā
iti (Wo451,14)

ここでは "anitya" (無常なるもの) 以下と、 "pañcamālakṣaṇa" (第五の特質がないもの) 以下の、二つの複合語によって五つの形相が説明されている。そのうち "alakṣaṇa" (特質がないもの) という語を含む後者は男性、複数、主格語尾を取っている。この複合語は所有複合語 (bahu-vrīhi) であると思われるから、「特質がないものという形相を自性とするもの」が

複数あることになる。文中にそれを表示するのは、同じく男性、複数、主格語尾によって示されている「無常なるもの」などの四形相以外にはない。したがって『大註』に従えば「特質がないもの」という形相は「無常なるもの」など四形相の自性である。

Am69,13
P285,5,1
D105,b,5
DA24,4,1

[滅諦について、]止滅した状態 (nirodha, Tib., 'gog pa) という形相を自性とするものは、

1') 内 [なる事物] (adhyātma-vastu, Tib., nang gi dngos po)

2') 外 [なる事物] (bahirdhā-vastu, Tib., phyi'i dngos po)

3') [内外] 両方の事物 (ubhaya-vastu, Tib., gnyis ka'i dngos po)

を止滅するから、

1) 内 [空] (adhyātma-śūnyatā, Tib., nang stong pa nyid)

2) 外 [空] (bahirdhā-śūnyatā, Tib., phyi stong pa nyid)

3) [内外] 両空 (ubhaya-śūnyatā, Tib., gnyis ka stong pa nyid)

という三形相である。

寂靜なるもの (śānta, Tib., zhi ba) という形相を自性とするものは、

- 4') 空性 (śūnyatā, Tib., stong pa nyid)
- 5') 自然環境 (bhājana-loka, Tib., snod kyi 'jig rten
器世間)
- 6') 最高真理 (paramārtha, Tib., don dam pa 勝義)
- 7') 生成されたもの (saṃskṛta, Tib., 'dus byas 有為)
- 8') 生成されないもの (asaṃskṛta, Tib., 'dus ma byas
無為)
- 9') 常住と虚無という [二] 極端 (śāsvatocchedānta,
Tib., rtag pa dang chad pa'i mtha')
- 10') 無始無終の輪廻 (anavarāgra-saṃsāra, Tib., 'khor
ba thog ma dang tha ma med pa)
- 11') 證得した法が散失しないこと (adhigata-dharma-
anavakāra, Tib., rtogs pa'i chos dor ba med pa)
- に対する、仮託を本質とする [八種の] 執著を止滅するか
ら、
- 4) 空 [空] (śūnyatā-śūnyatā, Tib., stong pa nyid
stong pa nyid)
- 5) 大 [空] (mahā-śūnyatā, Tib., chen po stong pa
nyid)
- 6) 勝義 [空] (paramārtha-śūnyatā, Tib., don dam pa
stong pa nyid)
- 7) 有為 [空] (saṃskṛta-śūnyatā, Tib., 'dus byas

stong pa nyid)

8) 無為 [空] (asaṃskṛta-śūnyatā, Tib., 'dus ma byas stong pa nyid)

9) 極端超越 [空] (atyanta-śūnyatā, Tib., mtha' las 'das pa stong pa nyid)^s

10) 無始無終 [空] (anavarāgra-śūnyatā, Tib., thog ma dang tha ma med pa stong pa nyid)

11) 無散空 (anavakāra-śūnyatā, Tib., dor ba med pa stong pa nyid)

という八形相である。

妙樂なるもの (praṇīta, Tib., gya nom pa) という形相 [を自性とするもの] は、

12') 他者に妄想された行為者 (para-parikalpita-kāraka, Tib., gzhan gyis kun brtags pa'i byed pa po) を止滅するから、

12) 本性空 (prakṛti-śūnyatā, Tib., rang bzhin stong pa nyid)

という [一] 形相である。

遠離した状態 (niḥsaraṇa, Tib., nges par 'byung ba) という形相 [を自性とするもの] は、境界についての錯誤を本質とする

13') 假託 (prajñapti, Tib., brtags pa) [についての錯

誤]

14') 特質 (lakṣaṇa, Tib., mtshan nyid) [についての錯

誤]

15') 時についての錯誤 (kāla-bhrānti, Tib., dus su
'khrul pa)

を止滅するから、

13) 一切法 [空] (sarva-dharma-śūnyatā, Tib., chos
thams cad stong pa nyid)

14) 自相 [空] (lakṣaṇa-śūnyatā, Tib., rang gi mtshan
nyid stong pa nyid)⁹

15) 不可得空 (anupalambha-śūnyatā, Tib., mi dmigs pa
stong pa nyid)

という三形相である。

遠離した状態という形相そのものが

16') 自性 (svabhāva, Tib., ngo bo nyid)

を止滅するから、

16) 無性自性空 (abhāva-svabhāva-śūnyatā, Tib., dngos
po med pa'i ngo bo nyid stong pa nyid)

という一形相である。

以上のように滅諦には形相が十六種ある。

総計、実践道についての智慧の形相は三十六種である。

滅諦についての四形相である「止滅した状態」などが、いかなる対象を

止滅するかを基準として、十六種に細分される。その十六形相はいわゆる「十六空」である。

大乘仏教における根本真理である空は、従来、種々の観点から分類されてきた。その代表的なものがこの十六空である。それは唯識派文献である『中辺分別論』Madhyānta-vibhāga やディグナーガ Dignāga 著『般若経の要約義』Prajñāpāramitā-piṇḍārtha-saṃgraha においても示され、中観派のチャンドラキールティ Candrakīrti 著『入中論』Madhyamakāvatāra においても示される。¹⁰ 十六空は本来、般若経で分類され説かれてきたものである。また十八空や二十空も同様に般若経に説かれている。これらは十六空にさらに若干の分類を付加したものである。ハリバドラはそのうちの二十空について、すでに第 I 章の智慧資糧という項目のもとで説明している。¹¹ そこでは二十種の空が並列的に説かれているのではなく、修行階梯と関連付けられた段階的なものとして解釈されている。智慧資糧の項目のもとでは智慧と空との関係は必ずしも明らかではなかった。¹² 一方、すでに述べたとおり、この第 IV 章の形相という項目のもとでの「形相」は智慧を指しているから、形相として説明されている十六空は智慧自体である。

<1. 2. 3 > あらゆる形相についての智慧の一〇形相（第4 - 5偈）

Am69, 23
P285, 5, 7
D106, a, 3
DA24, 5, 3

その次に、あらゆる形相についての智慧の形相を説く。

〔四種の〕留意〔という形相〕より始まって覚者
たることという形相¹³に終局する

それら〔あらゆる形相についての智慧の形相〕は、
弟子たちに属するもの、菩薩たちに属するもの、
仏たちに属するものの順に、（4）

三十七種、三十四種、三十九種であるとみなされ
る。

道諦に関して三種の全知の区別があるからである。

（5）

〔四種の〕留意（smṛty-upasthāna 念住）〔という形相〕
より始まって覚者たること（buddhatva）という形相¹³に
終局する〔一〇形相〕は、三種の全知に摂取される道で
ある〔。その観〕点からあらゆる形相についての智慧は、
一切の聖者を包摂する。だから、順次に、声聞における三
十七種の形相と、菩薩における三十四種〔の形相〕と、仏
における三十九種〔の形相に分類される〕とみなされると
〔偈中に〕言われる。

仏の智慧であるあらゆる形相についての智慧は、教化対象である声聞の

智慧と共通の側面、仏になる以前であった菩薩の智慧と共通の側面、さらに仏に独特の側面より成る。したがってその一〇形相も、あらゆる事物についての智慧と共通の道の三十七形相、実践道についての智慧と共通の道の三十四形相、あらゆる形相についての智慧に独特の道の三十九形相に分類される。

<1. 2. 3. 1> あらゆる事物についての智慧と共通の道の三十七形相
ハリバドラは、あらゆる事物についての智慧と共通の道を七種類に分類する。すなわち、

- 1) 事物を観察する道 (vastu-parīkṣā-mārga, Tib., dngos po la yongs su rtog pa'i lam 観察事道)
- 2) 勇猛な道 (vyāvasāyika-mārga, Tib., rtsol ba las byung ba'i lam 勤功用道)
- 3) 三昧を洗淨する道 (samādhi-parikarma-mārga, Tib., ting nge 'dzin yongs su sbyong ba'i lam 修治定道)
- 4) 現観を加行する道 (abhisamaya-prāyogika-mārga, Tib., mngon par rtogs par sbyor ba'i lam 現観方便道)
- 5) 現観に隣接する道 (abhisamaya-saṃśleṣa-mārga, Tib., mngon par rtogs pa dang 'brel ba'i lam 親近現観道)
- 6) 現観道 (abhisamaya-mārga, Tib., mngon par rtogs pa'i lam 現観道)
- 7) 清淨な出離道 (viśuddha-nairyāṇika-mārga, Tib., rnam par dag pa nges par 'byin pa'i lam 清淨出離道)

である。これらは順に、

- 1) 四種の留意 (smṛty-upasthāna, Tib., dran pa nye bar bzhag pa 念住)
- 2) 四種の精励 (samyag-prahāṇa, Tib., yang dag par spong ba 正断)
- 3) 四種の神通の土台 (ṛddhi-pāda, Tib., rdzu 'phrul gyi rkang pa 神足)
- 4) 五種の機根 (indriya, Tib., dbang po 根)
- 5) 五種の力 (bala, Tib., stobs 力)
- 6) 七種の菩提の補助 (saṃbodhy-aṅga, Tib., yang dag byang chub kyi yan lag 覺支)
- 7) 八項目より成る聖なる道 (āryaṣṭāṅga-mārga, Tib., 'phags pa'i lam yan lag brgyad 聖道)

として知られる実践に対応している。つまりここで説かれる三十七形相は、いわゆる三十七種の菩提の構成要素 (bodhi-pakṣa-dharma, Tib., byang chub kyi phyogs dang mthun pa'i chos 菩提分法) である。

三十七種の菩提の構成要素を、事物を観察する道などの七道として説く先例はアーリヤ・ヴィムクティセーナなどを別とすれば、アサンガ著『阿毘達磨集論』Abhidharma-samuccaya や、その註釈がある。¹⁴ そこでは道論の項目のもとに種々な道が挙げられており、その中、十一種類の道として一連して説かれる最初の七道が三十七種の菩提の構成要素である。¹⁵

Am70, 1
P286, 1, 3
D106, a, 6
DA25, 1, 2

その〔三種の全知の〕うちであらゆる事物についての智慧には最初に、〔身体、感受、心、現象という四種の〕事

物を観察する道がある。〔それ〕には、四諦に悟入するために独自〔の特質と〕一般的な特質によって観察した身体、感受、心、現象について留意する四種の形相がある。

仏教では四種の倒錯した謬見として、身体を清らかとみなすこと、感受について快樂と感ずること、心を常住のものとしてみなすこと、現象を独立的なものとしてみなすことを挙げる。これに対して、身体を不浄なものとして把握し、感受について苦痛と感ず、心を無常なるものとして捉え、現象を無我なるものとして把握することが必要とされる。これらのことを忘れずに留めておくことが「四種の留意」の実践である。四種の留意の瞑想法に「独自の特質」によるものと「一般的な特質」によるものの二通りがあるうち、以上に述べたのは独自の特質による留意である。一般的な特質による留意は、身体などの四種の事物すべてについて、無常なるもの、苦なるもの、空なるもの、無我なるものとして捉え、それを忘れずに留めておくことである。

四種の留意が「四諦に悟入するため」のものであるとハリバドラが言うのは、おそらく、『中辺分別論』や『大乘莊嚴經論』、『阿毘達磨集論』などにおいて、身体についての留意によって苦諦に悟入し、同様に、感受についての留意によって集諦に、心についての留意によって滅諦に、現象についての留意によって道諦に悟入すると説かれているのを継承している。¹⁶

Am70,3
P286,1,4
D106,a,7
DA25,1,5

その次に、〔四諦に〕悟入した者には精進が生ずるから、勇猛な道がある。〔それ〕には、すでに生じた〔悪〕、まだ生じていない悪、〔すでに生じた〕善、〔まだ生じていない善〕を、順に、正しく捨てる、生じさせない、増大さ

せる、生じさせることの因である精進、つまり〔四種の〕
精励という四種の形相がある。

すでに生じた悪を正しく捨てるなどの四種の行為自体が四種の精励なの
ではなく、それらの行為を実践するための精進が四種の精励である。

Am70,6
P286,1,5
D106,b,1
DA25,1,7

精進を具足した者は心を堪え得るものにするから、三昧を
洗淨する道がある。それ〔には〕、欲求 (chanda 欲)、
精進 (vīrya 勤)、心 (citta 心)、思惟 (mīmāṃsā 観)
〔の四種によって生起した〕三昧、つまり、〔怠惰などの
過失を〕捨てる〔八種の〕準備 (prahāṇa-saṃskāra 断行)
を伴った〔四種の〕神通の土台という四種の形相がある。

ダルマキールティシュリーによれば、「心を堪え得るものにする」こと
は心を一点に集中すること (cittaikāgratā 心一境性) である (DA25,1,7)。
仏教では、心を一点に集中することは、三昧あるいは禅定の特徴である。
その三昧を得るための技術が八種の「捨てる準備」である。それは『中辺
分別論』などによれば、1. 欲求 (chanda 欲)、2. 努力 (vyāyāma 正勤)、
3. 信念 (śraddhā 信)、4. 柔軟性 (prasrabdhi 軽安)、5. 想起 (smṛti
正念)、6. 内観 (saṃprajanya 正知)、7. 意志 (cetanā 思)、8. 平静
(upekṣā 捨) である。¹⁷ これらによって、三昧を得るうえでの五種の過
失¹⁸が捨てられる。すなわち①怠惰 (kausīdya 懈怠) が1から4までに
よって断たれ、②教説の忘失 (avavāda-saṃmoṣa 忘聖言) が5によって断
たれ、③沈鬱と輕躁 (layauddhatya 昏沈掉挙) が6によって断たれ、④
对症療法の不適用 (anabhisamskāra 不作行) が7によって、⑤对症療法

の過適用 (abhisamkāra 作行) が 8 によって断たれる。¹⁹

Am70,8
P286,1,7
D106,b,2
DA25,2,1

心を洗淨した者には暖かみ [という加行] と頂きという加行が生ずるから、現観を加行する道がある。[それ]には、暖かみと頂きを自性とする、信念 (śraddhā 信)、精進 (vīrya 勤)、想起 (smṛti 念)、三昧 (samādhi 定)、般若 (prajñā 慧) という [五種の] 機根の、五種の形相がある。

暖かみなどを證得した者には、認可と [世間的な] 最高法が生ずるから、現観に隣接する道がある。[それ]には、認可と [世間的な] 最高法を自性とする、信念、精進、想起、三昧、般若という [五種の] 力の、五種の形相がある。

第I章<3>に示したように、暖かみ、頂き、認可、²⁰ 世間的な最高法は、五段階より成る修行階梯の第二段階の、洞察へ導く段階の下位区分である。そしてその洞察へ導く段階は、第三段階である見道の準備的修行である。「現観」はしばしば、見道において真理を明瞭に見ること、あるいはその見られた真理の具体的な内容を意味し、見道と現観は密接な関係にある。見道の修行内容として規定される「七種の菩提の補助」が、「現観道」とみなされるのも、その伝統に従ったものである。そして見道である現観の準備段階であるから、五種の機根と五種の力を内容とする洞察へ導く段階は、「現観を加行する道」であり、「現観に隣接する道」なのである。

なお三十七種の菩提の構成要素と、五段階より成る修行階梯の関係につ

いて、ハリバドラがここで示している説は、唯識派の諸論書に従っている
ものと思われる。²¹

Am70,12
P286,2,1
D106,b,3
DA25,2,4

暖かみなどの四種〔の洞察へ導く段階〕を證得した者には
〔四〕諦〔を明瞭に見る〕見道が生ずるから、現觀道があ
る。〔それ〕には、想起 (smṛti 念)、現象の分析
(dharma-pravicaya 択法)、精進 (vīrya 精進)、喜悅
(prīti 喜)、柔軟性 (prasrabdhi 輕安)、三昧 (samādhi
定)、不偏 (upekṣā 捨) という〔七種の〕菩提の補助の、
七種の形相がある。

〔四〕諦を見ることを熟知した者には修道が生ずるから、
清淨な出離道がある。〔それ〕には、正しい見解 (samyag-
drṣṭi 正見)、〔正しい〕思惟 (samyak-saṃkalpa 正思
惟)、〔正しい〕言葉遣い (samyag-vāk 正語)、〔正しい〕
行為 (samyak-karmānta 正業)、〔正しい〕生活 (samyag-
ājīva 正命)、〔正しい〕想起 (samyak-smṛti 正念)、
〔正しい〕三昧 (samyak-samādhi 正定) という、八項目
より成る聖なる道の、八種の形相がある。

以上のように、弟子〔である声聞〕たちにおけるあらゆる
事物についての智慧の道を、所依として有する三十七種の
形相がある。

<1. 2. 3. 2> 実践道についての智慧と共通の道の三十四形相

実践道についての智慧と共通の道は六種類に分けて説明される。すなわち、

- 1) 対症療法という道 (pratipakṣa-mārga)
- 2) 変化の道 (nirmāṇa-mārga)
- 3) 現世において安楽に住する道 (dṛṣṭa-dharma-sukha-vihāra-mārga)
- 4) 出世間の道 (lokottara-mārga)
- 5) 捨断する道 (prahāṇa-mārga)
- 6) 仏位への道 (buddhatva-mārga)

である。これら六種の道はアーリヤ・ヴィムクティセーナによっても説かれているが、²² いかなる伝統に由来する区分であるか筆者未詳である。

Am70,17
P286,2,4
D106,b,6
DA25,2,8

実践道についての智慧には、対症療法という道がある。²³

[それは]

- 1') [我]見によって作り出された[煩惱]の対症療法、
 - 2') その[我見]を原因 (nimitta) とする [表象 (nimitta)を持つ] 分別の対症療法
 - 3') 三界に対する願望の対症療法
- であるという如きを自性としている。[それ]には順次に、
- 1) [苦諦についての四形相のうちの] 空なるものと無我なるものという形相を自性とする、第一の[空という]解脱への入口 (śūnyatā-vimokṣa-mukha 空解脱門)
 - 2) [無表象であるところの滅は、表象の分別を離れた道によって得られるから (Wo453,20-21)] 滅[諦]と道諦に

ついでに〔八〕形相を自性とする、第二〔の無表象という解脱への入口 (animitta-vimokṣa-mukha 無相解脱門)〕

3) 〔苦諦についての四形相のうちの〕無常なるものと苦なるもの〔という形相〕と集諦についての〔四〕形相とを自性とする、第三〔の願望しないものという解脱への入口 (apraṇihita-vimokṣa-mukha 無願解脱門)〕

という三種の形相がある。²⁴

Wo453,22
Tu293,23
SN152,5,1

〔『俱舍論』に〕「無表象は寂滅〔すなわち滅諦〕の諸形相による」と説かれているのは、²⁵ 事物の表象と結び付いた声聞道に関して〔説かれた〕のであり、その〔『俱舍論』の所説〕と、この〔無表象という解脱への入口が滅諦と道諦の両者の形相を自性とするという所説〕に矛盾はない。²⁶

Am70,22
P286,2,7
D107,a,2
DA25,3,4

変化の道がある。〔それ〕には

4') 色に対する想念をまだ破損していない者〔であるから〕

5') 〔色に対する想念を〕すでに破損した者であるから

順次に、

4) 内に色〔の想念〕のある者が〔外の諸色を見る〕

5) 〔内に〕色〔の想念〕のない者が外の諸色を見る

という、〔初禪と第二禪における〕変化の障害の対症療法

として、この二種の解脱がある。

6) 清浄な色と不浄な〔色〕を変化する際に、順次に〔前者を〕享受し〔後者を〕嫌うという汚染がある。それら〔二種の汚染〕の対症療法として、清浄な解脱の入口を体得して完成し、〔そこに〕止住するという一解脱がある。以上のように、〔八種の解脱 (aṣṭa-vimokṣa 八解脱) のうちの始めの三種の〕解脱という三種の形相がある。²⁷

八種の解脱として伝えられている一連の瞑想行法のうち、始めの三種は貪欲を起ささないための技術である。まず貪欲を有する修行者は、貪欲の対象に向かって不浄観を修して、その対象への貪欲を断ずる。次の段階では、すでに貪欲を断っていてもそれを堅固にするために、さらに不浄観を続ける。そして完全に貪欲を断じ終えるが、清浄なものを喜び、不浄なものを嫌うという汚染が残るから、第三段階においてその汚染を断ち切るために浄観を修する。

これらの三解脱は、或る特定の境地において修される。仏教の世界観によれば、世俗的な世界は、欲界と色界と無色界の、順に、より高度に精神的になる三種の世界に分けられる。そのうち色界と無色界は、それぞれ、四段階に細分される。すなわちそれらが四種の禅定と四種の無色定である。これはまた、世俗的な瞑想の境地の分類でもある。ハリバドラの挙げる三解脱は順次に、色界に属する四種の禅定のうち、初禅、第二禅、第四禅において修される。変化力は、色形のある欲界と色界のみで働き、色界の四禅定において得られるからである。²⁸

『阿毘達磨集論』は八種の解脱の説明の際に、この場合の「解脱」が、

変化の障害からの解脱であることを明記している。²⁹

Am70,27
P286,3,1
D107,a,4
DA25,4,3

現世において安楽に止住する（現法楽住）道がある。〔それ〕には、

7-10) 解脱に擬して止住する道を自性とする、〔四〕無色定の四種の形相と、

11) 寂靜に止住する道を自性とする、想念と感受の止滅（*saṃjñā-vedita-nirodha* 滅想受）という一形相がある。

以上のように、〔八解脱のうち残りの五解脱という〕五種の形相がある。

出世間の道がある。〔それ〕には、

12-15) 〔色界の〕四禪定と

16-19) 〔無色界の四〕無色〔定〕と

20) 滅尽定

という〔順次に修される九種の定（*navānupūrva-vihāra-samāpatti* 九次第定）である〕九種〔の形相〕がある。

捨断する道がある。〔それ〕には、

21-24) 四諦に集約され、煩惱と離れることを特質とする無間隙の道（*ānantarya-mārga* 無間道）という四種の形相がある。³⁰

仏位への道がある。〔それ〕には、

25-34) 布施などの〔十〕波羅蜜という十種の形相がある。

以上のように菩薩たちにおける実践道についての智慧の道

を、所依として有する三十四種の形相がある。

Am71,4
P286,3,4
D107,a,7
DA25,4,5
<1. 2. 3. 3> あらゆる形相についての智慧に独特の道の三十九形相

あらゆる形相についての智慧の形相は至高であるから、独特の道一種のみである。そのうちで、

1) 理と非理 [の区別を知る力] (sthānāsthāna-jñāna-bala, Tib., gnas dang gnas ma yin pa mkhyen pa'i stobs 処非処智力)

2) 行為の果報 [を知る力] (karma-vipāka-jñāna-bala, Tib., las kyi rnam par smin pa mkhyen pa'i stobs 業異熟智力)

3) 種々の信解 [の程度を知る力] (nānādhimukti-jñāna-bala, Tib., mos pa sna tshogs mkhyen pa'i stobs 種々勝解智力)

4) 多くの素質 [を知る力] (aneka-loka-dhātu-jñāna-bala, Tib., 'jig rten gyi khams du ma mkhyen pa'i stobs 種々界智力)

5) 機根の優劣 [を知る力] (indriya-parāpara-jñāna-bala, Tib., dbang po mchog dang mchog ma yin pa mkhyen pa'i stobs 根上下智力)

6) あらゆる所に行く道 [を知る力] (sarvatra-gāminī-pratipaj-jñāna-bala, Tib., thams cad du 'gro ba'i

lam mkhyen pa'i stobs 遍趣行智力)

7) [禪定や三昧などの] 汚染と清浄 [の区別を知る力]

(saṃkleśa-vyavadāna-jñāna-bala, Tib., kun nas nyon
monggs pa dang rnam par byang ba mkhyen pa'i stobs

[一切浄慮解脱三摩地三摩鉢底出離] 雜染清浄智力)³¹

8) 過去世の状態を想起 [して知る力] (pūrva-

nivāsānusmṛti-jñāna-bala, Tib., sngon gyi gnas rjes
su dran pa mkhyen pa'i stobs 宿住随念智力)

9) 死生 [を知る力] (cyuty-upapatti-jñāna-bala,

Tib., 'chi 'pho dang skye ba mkhyen pa'i stobs 死生
智力)

10) 漏出が尽きたと知る力 (āsrava-kṣaya-jñāna-bala,

Tib., zag pa zad pa mkhyen pa'i stobs 漏尽智力)

[という十種の力] の、十種の形相がある。³²

11) 「私は仏と成った」と自任することに対して、

12) 貪欲などが障碍であると語ることに對して、

13) あらゆる事物についての智慧などの道が出離 [の道]

であると説示することに対して、

14) 自分の漏出は尽きたと認めることに對して、

非難者がないから、[四種の] 自負 (vaiśāradya, Tib.,

mi 'jigs pa 無畏) の四種の形相がある。³³

15') [法] 門 [という領域] に対しての、

16') 法の特質 [という領域] に対しての、

17') 方言 [という領域] に対しての、

18') 法の区分という領域に対しての、

順次に [證得したものを享受し、認識対象についての障害の障碍がないので、すべての智慧に束縛がなく障碍がないことに依った (Wo455,26)]

15) 現象 [の名称に自在な理解力] (dharma-pratisamvid, Tib., chos so so yang dag par rig pa 法無碍解)

16) 意味 [に自在な理解力] (artha-pratisamvid, Tib., don so so yang dag par rig pa 義無碍解)

17) 言語 [に自在な理解力] (nirukti-pratisamvid, Tib., nges pa'i tshig so so yang dag par rig pa 詞無碍解)

18) 弁才に自在な理解力 (pratibhāna-pratisamvid, Tib., spobs pa so so yang dag par rig pa 弁無碍解)

[という四種の自在な理解力 (pratisamvid 無碍解)] の、
四種の形相がある。

19) [身の] 失策 [がない]

20) 暴言 [がない]

21) 忘失 [がない]

22) 精神集中していない心 [がない]

23) 別異であるとの想念 [がない]

24) 思弁しない沈黙がない

という六種の形相と、

25) 欲求から [退失することがない]

26) 精進から [退失することがない]

27) 想起から [退失することがない]

28) 三昧から [退失することがない]

29) 般若から [退失することがない]

30) 解脱から退失することがない

という六種の形相および、

31) 身 [の働きが]

32) 語 [の働きが]

33) 意の働きが

智慧を先行させつつ [智慧に] 随順するという三種の形相、

さらに、

34) 過去について、

35) 未来について、

36) 現在について

束縛がなく障碍のない智慧という三種の形相がある。

以上のように仏に独自の十八種の徳目 (āveṇika-buddha-

dharma, Tib., sangs rgyas kyi chos ma 'dres pa 不共

仏法) の [十八種の] 形相がある。³⁴

37) すべての仏によって説かれた〔法が、虚妄でないこと
という、法の〕真如 (sarva-buddha-bhāṣita-tathatā)

38) すべての法に自在になった自然者 (sarva-dharma-
vaśa-vartana-svayambhū)

39) あらゆる形相についての完全な覚者であること
(sarvākārābhisambodhi-buddhatva)

という三種の形相がある。

以上のように、諸仏のあらゆる形相についての智慧の道を
所依とする形相は三十九種である。

Wo456,17 [十種の] 力など [三十六形相] によって、諸形相の区分のあ
Tu296,4 り方があり、真如はその [三十六形相の] 自性であり、すべて
SN153,3,7 の法に自在になった自然者はその [三十六形相の] 所有者であ
り、すべての法のあらゆる形相についての完全な理解は [その
三十六形相の] 目的である。³⁵

PP95,1,2 以上のように、真如を対象にしてあらゆる形相についての智者
の智慧を得る。だから事物に自在になる能力の点から、自然者
として規定される。一方その同じ [智慧] を、様々なものを独
自に理解するという点から、あらゆる形相についての完全な覚
者であることという形相と呼ぶ。区別はこれのみに過ぎない。

<1. 3> 形相についてのまとめ

Am71,17
P286,17
D107,b,7
DA25,5,4
FP95,1,6

その〔一七三形相の〕うちで、あらゆる事物についての智慧の形相は、声聞と菩薩の別によって、順次に、漏出のないものと漏出のあるものがある。実践道についての智慧の形相は、菩薩は煩惱を完全に断ち切っていないから、漏出のあるもののみである。あらゆる形相についての智慧の道の形相は、正等覚者は潜在力も含めて煩惱〔という障害〕と認識対象についての障害とを全面的に断ち切っているから、あらゆる法に自在になっているがゆえに、漏出のないもののみである。¹

諸形相を総計したならば一七三種類ある。

FP95,1,6

「菩薩たちはすべての実践道を修習すべきである」と上述されたから、² あらゆる事物についての智慧を、菩薩が習熟するために修習した場合、〔菩薩のあらゆる事物についての智慧は〕漏出のあるものである。彼らは故意に煩惱を断ち切らず、抑制するのみだからである。声聞と独覚が修習するとき、〔声聞と独覚のあらゆる事物についての智慧は〕漏出のないものである。彼らは煩惱を毒矢の如くに断ち切るからである。

<2> 加行

<2. 1> 加行者（第6偈－第7偈）

Am71,22
P286,5,1
D108,a,3
DA25,5,5
PP95,2,6

優れた諸加行によって〔以上の一七三〕形相を修習しなければならぬ。ところでそれら〔諸加行〕も加行者なしには語り得ないので、聴聞などの器である加行者を説く。

諸仏に対して供養し、彼らに対して善根を植え、
宗教的善友（kalyāṇa-mitra 善知識）たちによつて保護者を持った者たちは、この〔般若波羅蜜〕の聴聞の器である。（6）

仏に近侍し、質問し、布施や持戒などを実践するから、
受理と憶持などの器であると正しき者たちは考える。（7）

¹→宗教的善友たちに加護された、

1) 過去と現在の諸仏に対して総じて善根を植えつつ浄化した者、

2) 諸如来を身などによる奉仕によって満足させた者、

3) 疑問のある内容について質問する者、

4) 布施などの十種の波羅蜜の行を備えた者←¹

が、その順に従って、〔一七三〕形相を〔叙述内容の〕特

質とするこの母〔なる般若波羅蜜〕の本文を²

- 1) 聴聞する〔器〕、
- 2) 受持する〔器〕、
- 3) 意味を失念しない〔器〕、
- 4) 如実に思惟する器

であると仏などはお考えになる。

上述した一七三形相を加行し得る修行者の資格が、その一七三形相を叙述内容とする般若経との関連において説かれる。一七三形相を加行するためには一七三形相が何であるかを知らねばならない。つまり一七三形相について叙述する般若経の聴聞などをしなければならぬ。そこで、聴聞など四種のための条件が示される。

<2. 2> 加行（第8偈－第11偈）

PP95,2,6 「優れた加行〔によって形相を修習する〕」と〔前節で〕言う場合の「加行」は、〔たとえば〕洞察へ導く段階の如きものである。「優れた」とは、声聞などよりも優れた因や支援などによって特別となること〔を意味するかも知れない。〕¹あるいは、以前に三種の全知の章で示された諸加行は、聴聞と思索の対象であるから最高ではなかったが、ここでは修習という実践をしたから最高であるということの意味するかも知れない。²

Am72,5
P286,5,6

以上のように加行者を示して〔次に〕加行を説く。

色などに止住しないゆえ、それらに対する加行を
否定するゆえ、

その真如が深遠であるゆえ、それらが奥深いゆ
え、(8)

それが無量であるゆえ、長期に渡って刻苦して後
に證得するゆえ、

[成仏の]保証のため、不退転のため、出離のた
め、無碍のためも含み、(9)

近々菩提[を得る]ため、迅速に[菩提を得るた
め]、

利他のため、増加がなく減少がないゆえ、

法と非法などを見ないため、色を不可思議なもの
などを見ないため、³(10)

色などとそれの表象とそれの本体を識別しないも
のとして、

貴重な⁴果を与えるものとして、清浄なるものとし
て、期限を伴うものとして、それ[加行]がある。

(11)

1') 色などに、無自性だから止住しない、

2') それら[色など]に対して加行しないことこそが加行

である、

3') それら色などは真如を自性とするから深遠なものである、

4') 奥深いものである、

5') 無量なものである

というように證得する者たちに、その順に従って、

1) 色などに止住しない〔加行〕、

2) 加行しない〔加行〕、

3) 深遠なもの〔の加行〕、

4) 奥深いもの〔の加行〕、

5) 無量なもの加行

があり、五種である。

6') 般若波羅蜜を恐れること、

7') 〔般若波羅蜜を〕恐れないこと、

8') 〔般若波羅蜜を〕正しく憶持すること、

9') 障碍のものを捨断すること、

10') 常に法を修習すること、⁵

11') 漏出のない新たな法の依り所であること、

12') 果である法身が成就すること、

13') 法輪を転ずること、

14') 増加と減少を見ないこと、⁶

15') 欲界として了得しないこと、

16') 色などを不可思議なものという形相として思念しないこと、

17') 色とその〔色の〕表象とその〔色の〕自性について識別しないこと、

18') 〔預流⁷という〕初果を見ること、

19') 色が清浄であること、

20') 年中努力を放棄しないこと

などという行を備えた者たちに、その順に従って、

6) 刻苦して長期を経てから、完全な理解を悟る (abhisambodha 現等覚) ための〔加行〕、

7) 〔成仏の〕保証を得るための〔加行〕、

8) 不退転のための〔加行〕、

9) 出離するための〔加行〕、

10) 無碍のための〔加行〕、

11) 真に完全な理解を悟るための〔加行〕、

12) 迅速に完全な理解を悟るための〔加行〕、

13) 利他のための〔加行〕、

14) 増加がなく減少がないための〔加行〕、

15) 法と非法などとして了得しないための〔加行〕、

16) 色などが不可思議なものであるという形相を止滅するための〔加行〕、

17) 色などの事物について識別しないための〔加行〕、

- 18) 貴重な宝を与えるための〔加行〕、
 - 19) 清浄であるための〔加行〕、
 - 20) 期限のための加行
- があり、十五種類である。〔総計〕加行は二十種である。

Wo481,12
Tu307,9
SN156,5,4

これら二十種の加行のこの順は理にかなっている。何故ならば、

- 1) 色などに対して無執著という仕方によって止住する者は、
- 2) 加行しない加行によって励む者であり、
- 3) それら色などの深遠さと
- 4) 奥深さと
- 5) 無量さを證得する。
- 6) そして、正しくない加行をなすがゆえに初学者は刻苦して、
- 7) それ以外の者は容易に、〔成仏の〕保証と
- 8) 不退転の境地を得て、
- 9) 出離より離れない者として
- 10) 無碍になり、⁸
- 11) 完全な理解を悟ることに近付き、
- 12) 迅速に完全な理解を悟る。
- 13) そして利他をなしつつ
- 14) 増加せず減少しない。
- 15) そして一般に法と非法などに対して、
- 16) また特に、色という不可思議なものなどに対して、あらゆる

る想念を断ち切るから、

17) 識別しない者となり、

18) 貴重な果を与えることによって

19) 最高にして窮極的な清浄さを得る者となる。

20) 以前に何年来、修行することによって心の連続体が洗浄された者である。

だから加行の順序は證得⁹によって顯示される。¹⁰

<3> 加行の功德（第12偈 a b）

Am72,26
P287,2,1
D109,a,2
DA26,5,6
PP95,3,1

〔加行を始める前にその〕功德を見知ることを先にすれば、諸加行がより良く習熟されるから、加行の次にその功德を説く。

諸魔の力を打ち負かすなど、功德は十四種類である。（12 a b）

- 1) 魔の力を打ち負かすこと、
- 2) 仏に顧慮され面識を持たれること、
- 3) 仏に現に見守られること、
- 4) 正等覚に近付いたこと、
- 5) 甚大な利益など、
- 6) 〔般若経を教示するための〕場所を判別すること、

7) 漏出のないあらゆる徳が完成すること、

8) 布教者であること、

9) 打ち砕かれないこと、

10) 独特の善根が生ずること、

11) 誓願を如実に実現すること、

12) 広大な果を取得すること、

13) 衆生の利益を行ずること、

14) 確実に〔般若波羅蜜を〕得ること

というのが〔果であるところの¹(DA27,1,6)〕功德である。

〔これらは〕順に、

1) 諸仏に加護されること、

2) 〔諸仏に〕顧慮されること、

3) 〔諸仏に、天眼と智慧の眼と法眼と仏眼という
(DA27,8)〕智慧によって見つめられること、

4) 〔諸仏に〕近付いたこと、

5) 〔称讃され讃嘆されるなどの(DA27,1,8)〕大福利、

6) 〔衆生を成熟させるなどの(DA27,2,1)、仏の〕働きを
なすこと、

7) 対症療法の法が完成すること、

8) 〔仏に〕あらゆる形相についての智慧についての講述
をしてもらうこと、

9) 〔仏が〕同朋となってくれること、

- 10) 広大な歡喜を生ずること、
 - 11) 彼の誓願の文句を〔仏が〕歡喜すること、
 - 12) 深遠な法を望むこと、
 - 13) 衆生の福利をなすこと、
 - 14) 般若波羅蜜を完全に會得すること
- という〔因であるところの功德¹(DA27,1,7)] それらを得ることによって、顛倒しない加行を歡喜する者に、現れる。²
- だから功德は十四種である。

<4> 加行の障壁 (第12偈c d)

Am73,5
P287,2,7
D109,b,1
DA27,2,5
PP95,3,2

捨てることによって諸加行を修習すべきであるところの、加行の障壁となる過失は何か。〔その問いに答えて〕その〔功德の〕次に、それら〔加行〕の障壁となる過失を説く。

過失は十種の四倍および六種であると確認すべきである。(12cd)

- 1) 刻苦して〔ようやく〕獲得すること、
- 2) 閃きがあまりに早いこと、
- 3) 〔欠伸などの(cf. Wo500,11)] 身体的無作法 (daṣṭhulya 粗重)、
- 4) 〔散漫などの(cf. Wo500,17)] 精神的無作法、

- 5) 正統でない仕方によってなされた読誦など、
- 6) [般若波羅蜜から] 背反する動機を取得すること、
- 7) [仏の] 因に固執 (abhiniveśa) することから退失すること、
- 8) 妙楽のものを享樂することから退失すること、
- 9) 完全に最高乗を受持することから退失すること、
- 10) 常に目標から退失すること

という最初の十種がある。

- 11) [仏の] 因と果の関係から退失すること、
- 12) 無上なるものから退失すること、
- 13) 他種類の境界を妄想する閃きが生ずること、
- 14) [般若波羅蜜の] 書写に執著すること、
- 15) [般若波羅蜜の] 無に執著すること、
- 16) [般若経の] 文字を [般若波羅蜜であると] 執著すること、
- 17) 文字のないものを [般若波羅蜜であると] 執著すること、
- 18) 国土などを思惟すること、
- 19) 利得と名誉と讚辭を享樂すること、
- 20) 非道によって方便の熟練を求めること

という第二の十種がある。

[第三の十種は] 順次に聴聞者と解説者のいずれかが前項

と後項と結び付いているから、¹

21) [一方が般若波羅蜜を] 欲求しており [他方が] 怠慢であることによる退失、

22) 欲求する土地が [互いに] 異なることによる退失、²

23) [一方が] 少欲であり [他方が] 少欲でないことによる退失、

24) [一方は十二種の] 清貧生活 (dhūta 頭陀) の徳を有しており [他方は] 有していないこと、

25) [一方は] 善 [法を有しており、他方は] 悪法を有していること、

26) [一方は] 喜捨を行ない [他方は] 吝嗇であること、

27) [聴聞者は] 布施をし [解説者はそれを] 受理しないこと、

28) [一方は] 簡略な説明によって [理解し、他方は] 広範な説明によって理解すること、

29) [一方は] 経典などの [十二種の] 法に通達 (abhiññā) しており [他方は] 通達していないこと、

30) [一方は] 六波羅蜜を具足し [他方は] 具足していないこと

という第三の十種がある。

その [第三の十種] と同様に、

31) [一方は] 方便 [に熟練しており、他方は] 方便に熟

練していないこと、

32) [一方は] 陀羅尼を得ており [他方は] 得ていないこと、

33) [一方は] 書写しようとしており [他方は] 書写しようとしていないこと、

34) [一方は] 愛欲などを離れており [他方は] 離れていないこと

という四種がある。

35) [衆生を救うために] 悪しき生まれ (apāya 悪趣) へ行くことに背反すること、

36) [自らの快適さのために] 良い生まれ (sugati 善趣) へ行くことを喜悅すること

の二種がある。

順次に説法者と聴聞者のいずれかが前項と後項と結び付いているから、

37) [一方は] 孤独を [他方は] 交際を歡喜すること、

38) [説法者は説法の] 機会を与えず [聴聞者は] 従順であること、

39) [説法者は] 財物をいささか望み [聴聞者は] それを布施したがないこと、

40) [一方は] 生命の危険のある [方角へ行き、他方は] 危険のない方角へ行くこと

の四種がある。以上が第四の十種である。

〔直前の四種と〕同様に、

41) 〔説法者は〕飢饉の起こる方角へ行き〔聴聞者は〕行かないこと、

42) 〔説法者は〕盜賊などに悩まされていない方角へ行き〔聴聞者は〕行かないこと、

43) 〔説法者は友人などの〕家庭に会い〔聴聞者は〕憂えること³

という三種があり、

44) 魔が〔大乘からの〕離脱を試みること、

45) 〔魔が般若経の〕模造をもたらすこと、

46) 〔魔が〕如実でない境界を喜ばすこと

という別の三種もあって、六種ある。

以上のように過失は四十六種である。

<5> 加行の特質

<5. 1> 特質についての一般的説明（第13偈）

Am73,31
P287,4,5
D110,a,5
DA27,4,8
FP96,8,4

功德と過失をその順に〔前者は〕受け入れ〔後者は〕拒絶することによって修習されるべき〔二十種の〕加行は、特質を知るところを先行させて〔修習されるべきである〕。だから過失の次に、それら〔加行〕の特質を説く。

それによって〔加行が〕特徴づけられるところのもの、それが特質であると知るべきである。そしてその〔特質〕は三種類である。

〔すなわち〕認識と優秀性と作用である。また、特徴づけられるもの〔である加行自身も加行の特質であり、それ〕は自性である。（13）

〔「特徴づける」（√lakṣ）という動詞によって示される働き〕の〕 作具（karaṇa）として成立する¹から、〔すなわち〕これによって〔二十種の〕加行が特徴づけられるから、認識と優秀性と作用〔という特質がある。「特徴づける」という動詞によって示される働き〕の〕 対象（karma）として成立する¹から、〔すなわち〕それらが特徴づけられるから、² 自性という特質がある。従って特質は四種類と知るべきである。

"lakṣaṇa" (特質) という語は、「特徴づける」を意味する動詞語根
[lakṣ に接尾辞 "-ana" (=lyuṭ) が付加された名詞である。³ パーニニの
『アシュターディーヤーイー』 *Aṣṭādhyāyī* III .3, 115-117 によれば、lyuṭ は
主として行為 (bhāva)、作具 (karaṇa)、基体 (adhikaraṇa) を示す。⁴ し
たがって "lakṣaṇa" には「表示」「記号」「目標」などの意味がある。

ところで『現観莊嚴論』は "lakṣaṇa" を二種に分ける。或る p を或る q
によって特徴づける場合の q も「特質」であり、さらに特徴づけられる p
自身も「特質」である。この場合、 q は「特徴づける」という行為の作具
であり、古典サンスクリットの用法と合致する。しかしながら p は「特徴
づける」という行為の対象であり、古典サンスクリットの規定には適応し
ない。

"lakṣaṇa" という語はしばしば「特質」と訳される。この訳語が示すよ
うに、lakṣaṇa は、或る r をそれ自身と知らせるような属性 s である。或
る r に属性 s があることによって、人は r を非 r から区別して認識する。
しかしながら r は必ずしも属性 s と別個のものではない。一般に仏教徒に
とって、属性の基体となるような、属性を離れて成立する実体は想定され
ない。つまり、実体と属性という異なる範疇の二契機が要請されて、それ
の結合によって現象があると仏教徒は考えない。むしろ属性の有機的集合
体としてのみ現象を捉えるのが、仏教的な思惟方法と言えるだろう。属性
 s によって特徴づけられる r もまた属性の集合体に過ぎず、 r 自体によっ
て r を特徴づけることが可能となる。⁵

『現観莊嚴論』が、「特徴づけられる」対象をもまた「特質」と名付け

るものは、以上のような考え方に基づくものと思われる。そして『現観莊嚴論』は、「自性」(svabhāva)がそのような「特質」であると定めている。「特質」あるいは「自性」が、或るもの r の属性全体、つまり、その r そのものを指すような用例として、ほかに、唯識派の「三性」(tri-svabhāva)あるいは「三相」(tri-lakṣaṇa)を挙げることができよう。⁶

一方ハリバドラの註釈は、『現観莊嚴論』を文法的な観点から理解しようとしていると思われる。「作具として成立する」(karaṇa-sādhana)、「対象として成立する」(karma-sādhana)という表現は、『マハーバーシュヤ』*Mahābhāṣya*において説明される、或る種の接尾辞を示す "karma-sādhana" (対象としての接尾辞)、 "kartr̥-sādhana" (行為者としての接尾辞)、 "bhāva-sādhana" (作用としての接尾辞)などの術語を想起させる。しかしその中に "karaṇa-sādhana" という術語は見出されない。⁷

<5. 2> 特質についての個別的説明

以下、しばらく特質についての個別的説明が続く。この項目においてはしばしば「あらゆる形相についての智慧」などの三種の全知についての言及がある。これを理解する際に注意しなければならないのは、この項目が「あらゆる形相についての完全な理解」のもとに説かれていることである。ここでの実践の目的は「三種の全知に自在になるために、再びすべての形相と実践道と事物についての認識を摂合するという仕方、三種の全知を修習する」(cf. <0> 第IV章の目的)ことにある。そして実際の実践は、三種の全知の三種の形相を加行することである。三種の全知という対

象の相違があるゆえに、加行にも三種の区分のあることが想定される。この<5. 2>で説かれる「三種の全知」の区分は、実際の三種の全知間における区分でなく、三種の全知という異なった対象を有する三種の加行間における区分である。

第IV章において対象の三種の区分による並列的な加行を説くのが<1>と<5>であるのに対して、<6>以降では境地の五段階の区分による段階的な加行を記述している。

<5. 2. 1> 認識

<5. 2. 1. 1> あらゆる事物についての智慧の加行の認識（第14偈—第17偈）

Am74,5
P287,4,8
D110,a,7
DA27,4,8
PP97,1,5

その〔四種の特質の〕うち、まず認識という特質は三種の全知の別によって区分される。その認識という特質を〕あらゆる事物についての智慧の点から説く。

如来の出現についての、不滅を本質とする世間についての、

衆生の心の諸の働きについての、その集中についての、逸脱についての、（14）

無尽なるものという形相を取るものであることについての、貪欲を伴うものなどについての、広大なものについての、

巨大なるものについての、無量なるものについての、示し得ない識についての（15）

見えない心についての認識、その能動²などと名付けられるもの、

さらに、これより他の、それらを真如という形相として認識すること、（16）

牟尼が真如について證得するときそれを他者に宣説すること。以上のこれが

あらゆる事物についての智慧の課程としての認識という特質の要約である。（17）

1) [般若波羅蜜のお蔭で (cf. DA27,5,1)] 如来が出現すること、

2) [真実には (cf. DA27,5,2)] 不滅である世間、

3) 衆生の心の [無数の (cf. DA27,5,2)] 働き、

4) 心の集中、

5) 心の散乱、

6) 心が無尽なるものという形相、

7) 貪欲などを伴った心、

8) [第15偈では] 「など」という語によって包摂された、貪欲などを離れた心、

9) 広大なる心、

- 10) 巨大なる心、
- 11) 無量なる心、
- 12) 示し得ない心、
- 13) 見えない心、
- 14) 能動的などの心、
- 15) [「縁起こそが空性であると汝は考える」³というから (Wo557,19)] 能動的なものなどの真如という形相、
- 16) 如来が真如を證得し、それを他者に宣説し知らせること。

以上のこれらをありのままに認識する形相の十六の区分によって、あらゆる事物についての智慧の加行が如実に特徴づけられた。だから[以上の十六種が、]あらゆる事物についての智慧に摂合される認識という特質である。

<5. 2. 1. 2> 実践道についての智慧の加行の認識 (第18偈 - 第19偈)

その次に、実践道についての智慧の点から説く。

空であることについて、無表象なるものについて
 を含み、願を捨断することについて、
 生じないことと滅しないことなどについて、法性
 を取り払うことがないものについて、(18)

Am74,20
 P287,5,7
 D110,b,7
 Da28,1,1

形成しないことについて、非概念知について、区分 [について]、特質がないことについて [の認識が]

実践道についての智慧の課程としての認識という特質であると考えられる。(19)

1) 空なるもの、

2) 無表象なるもの、

3) 願望しないもの、

4) 生じないこと、

5) 滅しないこと、

[第18偈では] 「など」という語に包摂された、

6) 汚染でないこと、

7) 清浄でないこと、

8) 非存在、

9) 自性、

10) 依り所がないもの、

11) 虚空の特質

という六種、

12) 法性を取り払うことがないこと、

13) 形成されないこと、

14) 非概念知、

15) 区分、

16) 特質がないもの。

以上のこれらについて認識する形相の十六種の区分によって、ありのままに実践道についての智慧の加行が特徴づけられた。だから〔以上の十六種が、〕実践道についての智慧に摂合される認識という特質である。

<5. 2. 1. 3> あらゆる形相についての智慧の加行の認識（第20偈
—第22偈）

Am74,29
P288,1,4
D111,a,3
DA28,1,5

その次に、あらゆる形相についての智慧の点から説く。

かの〔仏〕が自分の法に依って生活することについての、恭敬することについての、

尊重することについての、崇拜することについての、それを供養すること〔について〕と作られていないことについての〔認識〕、（20）

あらゆる所で働く認識、見えないものを示すもの、世間の空性という形相と〔それを〕叙述し知らせ現前させるもの、（21）

不可思議なる〔ことを示し〕寂靜なることを示すもの、世間〔を消滅させ〕想念を止滅させるものが、

あらゆる形相についての智慧の道理において、認識という特質と呼ばれる。(22)

- 1) かの如来が自分の法に依って生活すること、
- 2) [如来が自分の法を] 恭敬すること、
- 3) [如来が自分の法を] 尊重すること、
- 4) [如来が自分の法を] 崇拝すること、
- 5) [如来が自分の法を] 供養すること、
- 6) [如来にとって] 作られないものであること、
- 7) [如来にとって] 遍在していること、⁴
- 8) [如来が] 見えない対象を示すこと、
- 9) [如来にとって] 世間が空であるという形相、
- 10) [如来が] 世間を空であると叙述すること、
- 11) [如来が] 世間を空であると知らせること、
- 12) [如来が] 世間を空であると示すこと、
- 13) [如来が世間を] 不可思議であると示すこと、
- 14) [如来が世間を] 寂靜であると示すこと、
- 15) [如来にとって] 世間が止滅していること、
- 16) [如来にとって] 想念が止滅していること。

以上のこれらについて認識する形相の十六区分によって、ありのままにあらゆる形相についての智慧の加行が特徴づけられた。だから [以上の十六種が、] あらゆる形相につ

いての智慧に摂合される認識という特質である。

<5. 2. 2 > 優秀性

<5. 2. 2. 1 > 優秀性についての一般的説明（第23偈）

Am75,8
P288,2,2
D111,b,1
DA28,2,2

以上のように補足の九偈によって、認識という特質を一般的なものとして述べた。そして、認識の形相によって限定された諸〔加行〕の優秀性を知るべきである。だから認識という特質の次に、補足の偈によって優秀性という特質を説く。

不可思議などの優秀性によって優秀であり、〔四〕

諦を対境とする

十六刹那によって優秀性という特質が説かれた。

（23）

不可思議や無比などの優秀性によって優秀であり、苦〔諦〕などの〔四〕諦を対境とし、法〔についての認可と法についての知識〕と後続的な認可と〔後続的な〕知識より成る十六刹那⁵によって、実践道についての智慧〔と、あらゆる形相についての智慧〕などの諸加行が特徴づけられる。だから〔不可思議なるものなどの十六種が〕優秀性という特質である。

Am75,14
P288,2,5
D111,b,4
DA28,2,2

<5. 2. 2. 2> 優秀性についての個別的説明（第24偈－第26偈）

また、不可思議などの優秀性は何かという[問いに対して]、補足の三偈を説く。

不可思議[であること]と無比であること、測量し得るものと計量し得るものとを超越していること、

一切の聖者を包摂すること、智者によって受領されるものと独特なものを知っていること、(24) 迅速に知る[こと]と欠けても満ちてもないこと、行と実践、

対象、所依を含み、円満、支援、(25)

無味とが、十六種類の優秀性であると知るべきである。

優秀道は、⁶ それによって他の諸道よりも優秀なのである。(26)

1) 正等覚者などに支援された般若の力によって不可思議であること、

2) 無比であること、

3) 測量し得るものを超越していること、

- 4) 計量し得るものを超越していること
[が、苦諦についての四刹那の優秀性である。]
- 5) 一切の聖者を包摂していること、
- 6) 智者によって受領され得ること、
- 7) 声聞などの対境でない事物を熟知すること、
- 8) 自分の道理[である大乘]に依拠して迅速に了解すること
[が、集諦についての四刹那の優秀性である。]
- 9) 世俗[諦]と勝義諦⁷に依ったあらゆる現象が、欠けてもいず満ちてもないことを自性としていること、
- 10) 三輪の清浄によって、布施などの六⁸波羅蜜を行ずること、
- 11) 正しい加行によって多劫にわたって成就した福德と智慧を実践すること、
- 12) 非概念的にあらゆる現象を対象とすること
[が、滅諦についての四刹那の優秀性である。]
- 13) 法界を自性とする、菩薩の依り所、⁹
- 14) [十波羅蜜のうち、]願などの[四]波羅蜜を完成する因が具足すること、¹⁰
- 15) 宗教的善友の方便によって支援されていること、¹¹
- 16) 執著を味わわないこと
[が、道諦についての四刹那の優秀性である。以上の]十

六種類というのが、順次に、苦諦などの〔十六〕刹那の優秀性である。

その〔優秀性という特質〕によって、声聞などの諸道よりも、菩薩などの実践道についての智慧〔と、あらゆる形相についての智慧〕などの二つにおける優秀道⁶が優れている。だから彼ら〔声聞など〕は、上述した優秀性を欠き、執著などを起こすことを¹²特質とするものとして理解し易いので、説明しない。

<5. 2. 3> 作用（第27偈－第28偈）

Am76,1
P288,3,7
D112,a,5
DA28,4,8

優秀性という特質によって限定された諸〔加行〕の作用は何かという〔問いに対して〕、補足の二偈によって、作用という特質を説く。

利益、安楽、守護、人々の帰依対象、休息所、
最終的なよるべ、島、引率者と呼ばれるもの、(27)
自然なこと(anābhoga 無功用)、三乗によって果
を直證しないことを本質とするもの、
最後の、依り所という作用。以上が作用という特質である。(28)

1) 未来の利益、¹³

- 2) 現世の安楽、
 - 3) 苦がなく、果報でない法性
- をもたらすために、あらゆる事物についての智慧の智慧には、利益などの三種の作用がある。
- 4) 畢竟の利益、
 - 5) 苦の因の止滅、
 - 6) 輪廻と涅槃の同一性を¹⁴證得すること、
 - 7) 自〔利〕と利他を證得する所依という自体、
 - 8) 利他行、
 - 9) 自然に展開した衆生の福利、
 - 10) 三乗によって出離という果を直證しないこと
- というこれらを適時にありのままに、もたらすために、実践道についての智慧には帰依対象などの七種の作用がある。
- 11) あらゆる形相についての智慧のすべての法を示すこと
- をもたらすために、あらゆる形相についての智慧には、依り所という一つの作用がある。
- 以上のように作用の形相によって、ありのままに三種の全知の諸加行が特徴づけられる。だから〔以上の十一種が〕作用という特質である。

<5. 2. 4> 自性（第29偈－第31偈）

Am76,15
P288,4,5

作用という特質によって知られた諸〔加行〕の自性は何か

という〔問いに対して〕、補足の三偈によって自性という特質を説く。

煩惱と標識と表象と、内なる敵と対症療法との
離脱、難行と絶対的なもの、目標、了得できない
もの、(29)

執著を否定したもの、対象と呼ばれるもの、
不順なるもの、無碍なるもの、足場でなく、行く
ことなく、生ずることないもの、(30)

真如を了得しないことが、十六種類の自性であり、
当体(laksma)の如くに特徴づけられる。だから、
第四の特質とみなされる。(31)

- 1) 貪欲などの煩惱が〔空であり〕、
 - 2) その〔煩惱〕の標識である身体的無作法が¹⁵〔空であり〕、
 - 3) その〔煩惱〕の表象である如実でない思惟などが¹⁶〔空であり〕、
 - 4) 貪欲と貪欲がないものという、内なる敵と対症療法が空であるから、
- あらゆる事物についての智慧には、四種の離脱という自性がある。

5) 勝義においては存在しないところの衆生を涅槃させる難行、

6) 他の乗に墮落しないことを特質とする絶対的なもの、

7) 長期にわたって成就されるべき、最高者たることなどの〔三種の〕目標、¹⁷

8) 修習対象と修習主体と修習が¹⁸了得できないこと、

9) 事物に対するすべての執著が否定されているものという如くに呼ばれる五種の自性が、実践道についての智慧にはある。

10) あらゆる事物についての智慧と実践道についての智慧に包摂された特別な事物を対象とすること、

11) 世間において成立する把握する〔仕方〕などとは逆に示されているから不順であること、

12) 色などを無碍に知ること、

13) 認識対象と認識が了得されないから足場でないこと、

14) 真如ゆえに行かないこと、

15) 無自性なる色などは生じないこと、

16) 有と無〔と有にして無〕などの三つを本体とする真如が了得できないこと

という如くに名付けられる七種の自性が、あらゆる形相についての智慧にはある。

以上のように十六種の自性によって、ありのままに三種の

全知の加行が、特質を持つが如くに特徴づけられる。だから、以上の〔十六種が〕自性という第四の特質であるとみなされる。

以上のように、一括したならば特質は九十一種となる。

<6> 解脱へ導く段階

<6. 1> 解脱へ導く段階についての一般的説明（第32偈）

Am77,4
P288,5,7
D113,a,5
DA29,3,1
PP97,2,3

解脱へ導く段階という善根を備えた者のみに、上述した加
行の熟知が起こる。だから解脱へ導く段階を説く。

表象のない布施などをもたらすことに熟練してい
ることが、

このあらゆる形相についての〔完全な〕理解にお
ける解脱へ導く段階であると認められる。（32）

表象がないと対象を認識する形相によって、布施などの
〔六〕波羅蜜からあらゆる形相についての智慧までを自分
の個体に起こすことに熟練していることが、このあらゆる
形相についての完全な理解における解脱へ導く段階である
と認められる。

No647,25
Tu396,8
SN183,5,1

この〔「解脱へ導く段階」という〕場合の「解脱」は特別な解
放 (visamyoga 離繫) [すなわち、八難に陥らせるなどのたい
そう粗雑な業と煩惱から離脱した、洞察へ導く段階 (cf.
PP95,2,3-4)] である。その構成に役立つから「解脱へ導く段
階」である。〔それは〕前もってあらゆる形相についての完全
な理解についての教説に入る因であり、聴聞と思索より成る。

『大註』におけるハリバドラのこの所説はアーリヤ・ヴィムクティセーナに範を取っている。¹ ここで注目すべきは、解脱へ導く段階が「あらゆる形相についての完全な理解についての教説に入る因である (sarvākārābhisambodhātmake śāsane 'vatāra-hetu-bhūtam)」と規定されていることである。

『現観莊嚴論』は独自の実践体系として、いわゆる八現観を説くのみでなく、伝統的な五段階による実践体系も採用している。後世の註釈家たちにとってその両者の関係がどのようなものであるかが問題となってきた。ハリバドラがここで、伝統的な五段階のうちの第一段階である「解脱へ導く段階」を上述したように規定したことは、八現観のうちの第四段階である「あらゆる形相についての完全な理解」の実践が、解脱へ導く段階の実践を含まないと彼が理解したことを意味する。

またダルマミトラも、解脱へ導く段階を、聴聞と思索より成るものと理解している (PP97, 2, 8-3, 3)。彼は「あらゆる形相についての完全な理解」を瞑想より成るものと解釈しており、² ダルマミトラにとっても、伝統的な五段階のうちの第一段階は、いまだ八現観の第四段階に達していないことが知られる。

< 6. 2 > 解脱へ導く段階についての個別的説明 (第33偈-第34偈)

Am77, 9
P289, 1, 2
D113, a, 7
DA29, 3, 7
PP97, 5, 1

【般若波羅蜜と方便を特質とする (Wo647, 24)】その熟練は何か。それを示すために補足の [二] 偈を説く。

仏などを対象とした信念。布施などを領域とした精進。

意志を円満にする注意。非概念的な三昧。(33)
諸現象についてあらゆる形相によって認識する般若。以上の五種類がある。

菩提は鋭い〔五種類〕によって證得し易く、鈍い〔五種類〕によって證得し難いと認められる。(34)

特別〔ではあるが、まだ〕機根を自性としていない、〔方便である(Wo648,19)〕

- 1) 信念、
- 2) 精進、
- 3) 注意、
- 4) 三昧と、
- 5) 〔般若波羅蜜である(Wo648,18)〕般若が、
順次に、
 - 1') 仏〔など〕、
 - 2') 布施〔など〕、
 - 3') 〔善を望むことという(Wo648,20)〕意志の円満、
 - 4') 〔行為対象と行為者と行為を了得しないことという(Wo648,20)〕非概念知、
 - 5') あらゆる現象についてのあらゆる形相を熟知すること

などの

五種類の領域に対する熟練である。

信念などの五徳目は「五種の機根」や「五種の力」の徳目と同一である。五種の機根と五種の力は<1. 2. 3. 1>で説かれたように「洞察へ導く段階」に属する実践項目である。ここで説かれる信念などは「解脱へ導く段階」のものであるから、まだ「機根を自性としていない」。

Am77,17
P289,1,5
D113,b,3
D429,4,3
FP97,5,3

そうであるけれども、すべての〔信念などの五種〕によって無上菩提が得られるのではない。すなわち、上級のものである鋭い信念など〔五種〕によって無上¹正等覚は證得し易いが、その同じ〔信念などの五種であっても〕鈍いもの(=下級のもの mr̥du)によっては證得し難いのである。以上のこのことは法性である。だから間接的に、中級のものによって独覚の菩提が證得され、下級のものによって声聞の菩提が證得されるというこのことが、含意されるのである。

<7> 洞察へ導く段階

<7. 1> 洞察へ導く段階についての個別的説明(第35偈-第37偈)

Am77,20
P289,1,7
D113,b,5
D429,5,3
FP97,5,6

解脱へ導く段階が生じて喜ぶ者に、洞察へ導く段階が生ずるから、洞察へ導く段階を¹説く。

ここでは暖かみの対象は一切衆生であると讃えら

れる。

形相はその彼らに対する平等心などの十種類であると説かれる。(35)

自ら罪より退いて布施などに止住する者が他の者たちをその両者に据え、[彼らに]讃辞を語り、親切にすることが(36)

頂きである。また認可は、自分と他者を所依として諦を認識することである。

また最高法は、衆生たちを成熟させることなどによって知られるべきである。(37)

このあらゆる形相についての完全な理解においては、平等[心]、慈愛[心]、利益[心]、憤怒のない[心]、無害な心という五種の形相と、父母への心、兄弟姉妹への心、子女への心、友人隣人への心、親類縁者への心という他の五種の形相によって衆生を対象とする場合に暖かみであるとみなされる。

要するに悪と善を、その順に[前者を]捨て[後者を]取るという点から、[前者より]退き[後者に]止住した自分が、² その[悪を捨て善を取るという]点から、他の者たちを罪より退き善に止住することに結び付けるという二種の形相と、自分自身そのように向かった他の者たちに讃

辞を語り、親切にすることという二種の形相がある。しかし「個々の」法の区分によって無限の形相と云われるそれら「四種に集約される形相」によって、衆生を対象とする場合に、頂きなのである。

DA29,5

「要するに」というのは、「個々の法の」区分に基づくことがないのである。

Am78,2

P289,2,5

D114,a,3

DA30,1,2

PP98,1,2

頂きにおける、自分と他者という所依の区分によった対象と形相と同様に、結び付け、讃辞を語り、親切にするという形相によって、自分と他者を所依として苦〔諦〕などの〔四〕諦を対象とする場合に、認可なのである。

先の如く、自分と他者のみを所依とする、成熟させ解脱させることなどの形相によって、衆生を対象とする場合に、〔世間的な〕最高法なのである。

以上が、洞察へ導く段階である。

<7.2> 洞察へ導く段階などが重複して説明される理由

Wo664,2

Tu403,21

SN186,2,8

〔八現観のうち前六〕現観各々に、どうして洞察へ導く段階などの説明が〔重複して〕あるのか。

Am78,6

P289,2,7

D114,a,5

DA30,2,5

すべての形相と実践道と事物を修習する〔対象の〕区別によって、順次に、あらゆる形相についての智慧などの三種

類の現観において、世間的な洞察へ導く段階をまず證得してから出世間の見〔道〕と修道を證得する。

一方、あらゆる形相についての完全な理解などの三種類の現観において、¹ 修習が漸次向上する状況の相違によって、全面的に向上道 (viśeṣa-mārga 勝進道) に摂合された漏出のない智慧が、初級、中級、上級の順に生ずる。だから、一時に生ずることを否定するために「洞察へ導く段階」などの表現が説かれたと知るべきである。

ハリバドラは『現観莊嚴論』に説かれる「洞察へ導く段階」、「見道」、「修道」を、第I章から第III章までに説明されるものと、第IV章から第VI章までにおいて示されるものの二種に区分する。

「洞察へ導く段階」などの三つは、有部以来の伝統的な五段階より成る修行階梯の第二から第四段階に相当する。『現観莊嚴論』第I章から第III章において言及される三つは、この伝統的な階位法を受けている。『現観莊嚴論』に説かれる実践を五段階に区分した場合の第二ないし第四段階が、『あらゆる形相についての智慧』などの三章で示されているとハリバドラは解釈するのである。すなわち「洞察へ導く段階」はいまだ世間的なものであり、凡夫の実践であるが、一方、「見道」と「修道」は出世間のものであり、聖者の実践である。「洞察へ導く段階」に関しては、I .27-36; II .3-5, 9-10に解説があり、「見道」に関しては、II .11-16; III .11-15 に説明があり、「修道」に関しては、II .17-31 に記述がある。註釈によれば、それ以外にも、言及がなされていることになっている。

一方、第IV章以下で説かれる「洞察へ導く段階」などの三つは、ハリバ
ドラーによれば「向上道」に属する智慧である。仏教実践論には、煩惱など
を否定する過程の観点から、実践を四種の道に分類する伝統がある。四種
の道とは、1. 加行道 (prayoga-mārga 加行道)、2. 無間隙の道
(ānantarya-mārga 無間道)、3. 解脱の道 (vimukti-mārga 解脱道)、4.
向上道 (viśeṣa-mārga 勝進道) である。加行道は煩惱などを断つための準
備的实践である。次いで無間隙の道によって煩惱を捨断する。そして次の
瞬間、主体がその煩惱から解脱するのが、解脱の道である。ところで煩惱
は一種に限らず、また、そのすべての煩惱が一時に断たれるわけでもない。
従って或る煩惱に関して、加行と捨断と解脱が起こり得ても、他の煩惱に
関しては、いまだそれらが起こり得ない。だから修行者は、或る煩惱より
解脱しても、他の煩惱を除くために加行などを再び実践しなければならない。
他の煩惱を除くための道が「向上道」である。² すなわち向上道は、最
後一つの煩惱を断ち切って以後にしかあり得ない。五段階よりなる実践階
段との関連においていえば、いまだ煩惱を断じたことのない、解脱へ導く
段階と洞察へ導く段階の前二段階に向上道はない。また、見道も無間隙の
道と解脱の道のみから成ると規定されるので、そこにも向上道はない。要
するに向上道は、修道においてのみ立てられるのである。

ハリバドラーの用例は、直接には以上に述べた用法と異なっているが、向
上道が見道や修道の後にしばしば説かれており、³ このことは彼が向上道を
修道の中でも修行の進んだ段階とみなしていたことを示唆していると思わ
れる。⁴ したがって、ハリバドラーが『あらゆる形相についての完全な理解』

を始めとする三章において説かれる「洞察へ導く段階」などを「向上道」に属するものとみなしたことは、「洞察へ導く段階」などの名称で呼ばれる三つが五段階の修行階梯の第二ないし第四に相当するのではないと、彼が解釈していたことを意味する。ハリバドラにとって第IV章などにおいて言及される三つは、それらの名によって示される実践が、その順に行じられることを意味するにすぎないのである。⁵

ハリバドラに帰せられる『宝徳蔵偈細疏』 *Ratna-guṇa-samcaya-gāthā-pañjikā* は、あらゆる形相についての完全な理解という第四現観が向上道であるから、この第IV章で洞察へ導く段階の説かれるのは理に合わないという疑問を想定する。その解答として、第八地の中の細分が次第を踏んで実践されるのであって、同時に生ずるのではないことを示すために「洞察へ導く段階」などと仮に名付けた (btags) 旨が説かれている (RP258, 4, 5-8)。第八地は、菩薩の修道における、かなり上位の段階である。したがって、『宝徳蔵偈細疏』のこの所説は、以上見てきたハリバドラの文と軌を一にしている。

<8> 不退転の衆徒

<8. 1> 不退転の衆徒についての一般的説明 (第38偈)

Am78, 12
P289, 3, 2
D114, b, 1
DA30, 4, 1

不退転の菩薩の僧団に、上述した洞察へ導く段階が生ずる。
だから不退転の菩薩の僧団の特質を説く。

洞察へ導く段階より始まって見[道]と修道に

止住する菩薩たち、それがここでは不退転の衆徒である。(38)

後述される、¹[暖かみなど]四種の洞察へ導く段階と見道と修道に、それぞれを證得するという仕方によって、止住する勇者たち、彼らが修学の残っている (śaikṣa 有学) 不退転の菩薩の僧団なのである。

<8.2> 不退転の衆徒についての個別的説明

<8.2.1> 洞察へ導く段階

<8.2.1.1> 洞察へ導く段階における不退転の特質についての一般的説明 (第39偈)

Am78,18
P289,3,5
D114,b,3
DA30,4,2

彼ら [三種類の僧団] の独自の¹特質は何か。 [この間に答えるために] まず補足の一偈によって、洞察へ導く段階に止住する者たちの特質を説く。

色などより退くことなど二十種類と云われる標識
によって
洞察へ導く要素に止住する者には、次の不退転の
特質がある。(39)

色などより退くこと、疑惑のないことなどの二十種類の形

相によって、洞察へ導く段階に止住する者たちの不退転の特質が知られるべきである。

＜8. 2. 1. 2＞ 洞察へ導く段階における不退転の特質についての個別的説明（第40偈－第45偈）

Am78,24
P289,3,8
D114,b,5

また、退くことを始めとする特質、それらは何か。それらを示すために補足の六偈を説く。

色などから退くこと、疑惑と難の消失、

自ら善に止住する者が他者たちをそれに結び付けること、（40）

他者を所依とする布施など、深遠なる意味に対してすら不審のないこと、

慈愛に満ちた身体など、五種類の障害を伴わないこと、（41）

一切の悪癖（anusaya 随眠）を断つこと、注意と内観、清らかな

衣など、肉体に蟲が生じないこと、（42）

心に欺瞞のないこと、清貧生活を受けること、吝嗇でないことなど、

法性を具足して行くこと、世間のために地獄を求めること、（43）

他者に導かれないこと、異なる道を教示する魔を
魔であると覚知すること、仏に歡喜される行為。

(44)

暖かみと頂き、認可も含み、最高法に止住する者
は

これら二十の標識によって等覺より退転しない。

(45)

- 1) 自性が感受されないゆえに色などの現象より退くこと、
- 2) 理性的な淨信 (avetya-prasāda 證淨) を得たから疑
惑が消失すること、
- 3) 誓願が成就したから、[以下の] 八難が消失すること。
すなわち、邪見、地獄 [として誕生すること]、餓鬼 [と
して誕生すること]、畜生として誕生すること、仏教を聽
聞できないこと、辺地に誕生すること、器官が不完全で愚
鈍であり唾者というあり方、長寿の天人として誕生するこ
と [が消失すること]、
- 4) 悲愍によって、自他を善法に結び付けること、
- 5) 自他を交換するから、他の衆生という領域に廻向され
た布施など、
- 6) 法を正しく覚知するから、深遠な意味に対してすら²
不審を起ささないこと、

- 7) 他者の利益になるように従事しているから、慈愛に満ちた身体〔的行為〕と言語〔的行為〕と精神的行為、
- 8) 加行が円満になるから、〔以下の〕五種の障害 (pañca-nivarāṇa 五蓋) を伴わないこと。すなわち、愛欲、悪意、弛緩と睡眠、興奮と後悔、疑惑〔を伴わないこと〕、
- 9) 対症療法を修習したから、無明などのあらゆる悪癖を断つこと、
- 10) 常に精神集中しているから、注意し内観していること、
- 11) 清浄行を実践するから、衣などの使用が清らかなこと。
以上の十一形相〔は暖かみに止住する菩薩に属する〕。
- 12) 善根が世間以上に増進しているから、身体に八万種類の蟲が生じないこと、
- 13) 善根が清浄だから、心に欺瞞のないこと、
- 14) 利得や名聞などに無関心だから、糞掃衣を着けるなどの〔十二種の〕清貧生活の徳を受け入れること、
- 15) 特別な布施などを行わずから、それらと相違する音響や破戒などが無いこと、
- 16) 一切の現象を摂合するから、法性と相違せずに般若波羅蜜を具足して行くこと、
- 17) 世人を自らの所有とみなしているから、利他のために地獄を望むこと。

以上の六形相〔は頂きに止住する菩薩に属する。〕

18) 證得した〔法〕に対する確信という徳目があるから、
他者に導かれ得ないこと、

19) 仏たることへの方便の熟練を理解しているから、似非
道を教示する魔を魔であると覚知すること。

以上の二形相〔は認可に止住する菩薩に属する。〕

20) 三輪が清浄 (tri-maṇḍala-viśuddhi 三輪清浄) だか
ら、あらゆる場合の行為を仏がお喜びになること。

この一形相〔は世間的な最高法に止住する菩薩に属する。

それら二十形相〕ゆえに、順次に、暖かみ、頂き、認可、
最高法に止住する菩薩が無上菩提より退転しないと、これ
ら二十の標識によって特徴づけられるべきである。³

< 8. 2. 2 > 見道

< 8. 2. 2. 1 > 見道における不退転の特質の一般的説明（第46偈）

Am79,31
P289,5,7
D115,b,5
DA30,4,4
PP98,1,7

洞察へ導く段階の不退転の特質の次に、見道の不退転の特質を補足の一偈によって説く。

認可と知見の、六と五と五の刹那が、見道における

菩薩の不退転の特質であると知るべきである。(46)

苦などの〔四〕諦の点から、法〔についての認可と法についての知見〕と後続的な認可と〔後続的な〕知見〔より成る〕十六刹那が、見道に止住する菩薩たちの不退転の特質である。

見道 (darśana-mārga) は伝統的に、初めて真理を證得して、漏出のなくなる段階であると規定される。有部の教義に従えば、認識は一刹那に二つ以上の対象を認識することができない。従って複数の対象を認識するためには、最低でもその複数分の刹那が要請される。見道における実践者の認識対象である四諦は、苦諦などの四種の対象の複合体であるとみなされる。つまり有部の立場からは、見道は四諦という対象を認識するために四刹那以上必要とする。

ところで、四諦という真理を證得することは、その真理を證得するための障害である無知から自由になることである。この観点から、見道におけ

る認識は二種に区分される。つまり、その無知をまさに断ちつつある段階と、断ち切ってしまった段階である。これは、四諦という対象に即して言えば、対象を認めた瞬間と、対象について確信を得た瞬間である。前者の段階にあるのが認可 (kṣānti 忍) であり、後者の段階にあるのが知識 (jñāna 智) と呼ばれる。

以上のように見道の過程は、四諦の区分と、それにおける認可と知識の区分によって、八段階に分かたれる。しかし各々はさらに、認識対象たる四諦の属する領域の区分に対応して、二種類に細分される。有部によれば、見道の認識は欲界におけるものと色界と無色界におけるものがある。法についての認可 (dharma-jñāna-kṣānti 法智忍) と知識 (dharma-jñāna 法智) が欲界におけるものであり、後続的な認可 (anvaya-jñāna-kṣānti 類智忍) と知識 (anvaya-jñāna 類智) は色界と無色界におけるものである。従って見道の過程は、苦、集、滅、道の四諦と、法についての認可と知識、後続的な認可と知識という四種の認識の型との組み合わせにより、十六刹那より成る。⁴

一方、『阿毘達磨集論』に従えば、法についての認可と知識、後続的な認可と知識の差異は、界の区別によるのではなく、前者が認識対象である真理自体を證得するのに対し、後者は認識主体である智慧を證得することにある。⁵

<8. 2. 2. 2> 見道における不退転の特質の個別的説明 (第47偈
- 第51偈)

Am80,5
P290,1,2
D115,b,7
DA30,4,6

[十六]刹那という特質は、どのような形相なのか。⁶[その疑問に答えるために]形相を補足の五偈によって説く。

色などの想念より退くこと、心の堅固性、両小乗より退くこと、禪定などの構成要素の消失、
(47)

心身の軽快さ、欲望を享樂することの熟練、常に禁欲者 (brahma-cārin 梵行者) たること、生計が清浄なること、(48)

蘊などについて、障碍について、資糧について、感覚器官などを伴う

対戦について、吝嗇などについて、「否なり」と言って固着と定着の(49)

持続を否定すること、微塵の法も了得しないこと、自らの境地に確固とし、三つの境地に止住すること、(50)

法のために命を投げ捨てること。これらの十六刹那が、

見道に止住する賢者の不退転の標識である。(51)

1) 独自の特徴が空だから、色などの現象として覚知することより退くこと、

2) 仏などに加護されているから、無上なる菩提心が堅固なること、

3) 特別な大乘法を行じているから、声聞〔乗〕と独覺乗より心が退くこと、

4) 現象を分析する結果、〔四〕禪定と〔四〕無色定など⁷の生ずる構成要素が消失すること。

以上の四つが苦〔諦〕についての形相である。

5) 悪を離れているから、⁸心身が軽快であること、

6) 衆生を教化するための方便に熟練した結果、執著せずに欲望を享樂すること、

7) 〔肉欲の〕対象の過失を見るから、常に禁欲すること、

8) 立派な人の法のゆえに、生計の手段が清浄であること。

以上の四つが集〔諦〕についての形相である。

9) 空性に止住するから、〔五〕蘊と〔十二〕處と〔十八〕界に対して、「固着と定着をすべきでない」と、そのように固着と定着の持続を否定すること、

10) 内なる敵を除去しているから、證得を遮るものに対して、先の如く固着と定着の持続を否定すること、

11) 概念の過失を熟知しているから、菩提の資糧である布施などに対して、先の如く固着と定着の談話の持続を否定すること、

12) 客観と主観が断ち切られるべきだから、感覺器官〔で

ある村 (Wo686,6)] と [その] 所依である町などの⁹対戦
に対して、先の如く固着と定着の持続を否定すること。

以上の四つが滅 [諦] についての形相である。

13) 特別な布施などを覚知するから、吝嗇や破戒などに対
して固着と定着の持続を否定すること、

14) 一切の現象は三種の解脱への入口を自性とするから、
微塵ほどの證得法も了得しないこと、

15) 深い信解を得ているから、三種の全知より成る自らの
三つの地位に、ありのままに確固として止住すること、

16) 一辺倒に専注しているから、あらゆる形相についての
智慧などの法のために命を投げ捨てること。

以上の四つが道 [諦] についての形相である。

< 8. 2. 2. 3 > 十六刹那の見道における位置

Am81,10
P290,3,1
D116,b,5
DA31,2,2
PP98,1,7

以上のように十六形相によって摂合された、認可と知見の
これら [十六] 刹那が正しく證得されたときには、[十六
刹那各々が、] 自身と対応する果、すなわち「色などの想
念より退くこと」(IV.47a)などを生み出す。[それらの果
は、] 客観と主観に執著していない形相を取り、清浄で世
間的な [出定] 後の心に摂合される。だから [以上の十六
刹那が、] 見道に止住する菩薩の不退転の特質なのである。
「ヨーガ行者たちの言語活動は、衆生を教化する必要がな

ければ、いかなる場合にも〔自らの〕證得と対応したもののみである」と知らせるために、仮設によって〔特質を〕説明したのである。そうでなければ、どうしてヨーガ行者の個体内において自内證された〔十六〕刹那が、他者に、〔彼が見道に止住していると〕信じさせるための特質たり得ようか。

有部の修行体系の用語である「見道」などは、大乘仏教においても使用される。大乘仏教独自の修行体系に、有部の修行体系で用いられる術語が付けられる場合、菩薩の十地の内の「初地」が「見道」に配当される。¹⁰ 有部の「見道」は、洞察へ導く段階から修道への橋渡しとして作用し、凡夫から聖者に転換する、瞬間的な閃きと捉えることができよう。しかし大乘の「見道」は、時間的に長期に及ぶと規定されている。¹¹ したがって、見道が十六刹那であると言っても、必ずしも時間の最短単位が十六集合したものであるのではない。また「刹那」自身、純粹に時間的な概念であるとも思われない。なお<7. 2>で見たように、この第IV章における「見道」は、実際には初地よりもさらに優れた境地に相当する。しかしその刹那の概念は、有部のものよりも、上述した初地としての見道に等しい。

さてここで問題となるのは、<8. 2. 2. 2>で説かれた「色などの想念より退くこと」などが、認可と知見より成る「十六刹那」とどのような関係にあるかということである。というのは、本来十六刹那は実践者の内面的な悟りであって、他者によって知り得ないことがらだからである。ハリパドラによれば、「色などの想念より退くこと」などは、三昧中にあ

る「十六刹那」の形相なのではない。十六刹那の各々の結果であって、十六刹那の三昧より出定して後の形相である。以上のような論議は、「不退転の衆徒」の項で説かれる「特質」ないし「標識」が、実践者の自覚的な特徴であるより、むしろ他者が行者を「不退転の衆徒」であると判断する場合の、客観的な特徴であることを示している。

<8.2.3> 修道

<8.2.3.1> 修道の一般的説明（第52偈－第53偈）

Am81,16
P290,3,5
D117,a,1
DA31,3,8
PP98,4,1

その次に、修道に止住する〔菩薩〕の不退転の特質を〔説くべきである〕。しかし道理には、

限定者 (viśeṣaṇa) が把握されない限り、被限定者 (viśeṣya) についての理解が生じない。

とあるから、¹² まず修道〔という被限定者〕にとっての限定者を説く。

修道は深遠である。深遠性は空性などである。

その深遠性は、肯定的誤謬 (samāropa 増益) と否定的誤謬 (apavāda 損減) の極端より解脱していることである。(52)

空性などに色はないし、空性などは色より他のものでもない。だから順に、空性などは肯定的誤謬〔の極端より解脱

しており]、否定的誤謬の極端より解脱している。そのことが深遠性であり、空性などである。以上のように深遠性を備えているから、修道は深遠なのである。

以上のように「深遠性という」限定者を示し終えたので、「次に修道という」被限定者を説く。

洞察へ導く要素について、見道について、修道について
何度も思索し、思量し、熟慮することが修道である。(53)

聴聞「より生ずる知恵」と思索「より生ずる知恵」と修習より生ずる知恵、あるいは、三昧中の加行「より生ずる般若」と正行「より生ずる般若」と「出定」後に生ずる般若によって、順次に、洞察へ導く要素などの三つにおいて熟視した対象を何度も思索し、思量し、熟慮することが不断の修道なのである。

ダルマキールティシュリーによれば、思索し、思量し、熟慮される対象である「洞察へ導く要素などの三つ」は、『あらゆる形相についての智慧』などの前三章で説かれた「暖かみなど」を指している(DA31,5,3-6)。

<8.2.3.2> 修道の細分(第54偈)

Am82,1
P290,4,3
D117,a,6
DA32,1,3
PP98,4,5

その〔修道〕は何種類か。答える。

この〔修道〕は不断のものだから種別は九種類であると考えられる。

初級、中級、上級にさらに初級などの区分があるからである。¹³(54)

「菩薩にとっての煩惱は概念知である」と説かれるから¹⁴ [ここでは概念知が内なる敵である。そして]「極めて濃い闇は弱い光明によって除かれるが、薄い〔闇〕は強い〔光明〕によって除かれる」という譬喩によって、¹⁵ 強、中、弱の概念知が各々に強、中、弱の区分によって〔九種に〕分類されるから、それらの対症療法も、初級、中級、上級が各々に初級、中級、上級の区分によって分類される。だから以上のように、勝義においては空性を特質とする [から分類し得ないけれども、世俗の] 種別の点では概念知と対症療法の区分ゆえに、¹⁶ 順次に欲界などの九地に、九種類が不断に生ずる。したがって修道は〔九種類〕である。

修道が九段階に分類されることについては、『現観莊嚴論』II.30 にすでに説かれている。¹⁷ それに対するハリバドラの註によれば、「欲界などの九地」は、欲界と、色界における四禪定と、無色界における四無色定と

を指す。¹⁸

また『大註』は、強度の概念知の対症療法が初初級の修道である譬喩として、闇と光の関係のほかに、布についての汚れは強度のものが先に洗い取られるという例を挙げる(Wo701,22-702,5)。¹⁹ この譬喩は『小註』でも、II.31の註釈において示されている。²⁰

<8.2.3.3> 修道の細分についての論議1 (第55偈)

Am82,11
P290,4,6
D117,b,2
DA32,1,6

反論： [『八千頌般若経』や『二万五千頌般若経』などの] 種々の勝者母に、 [九種に分類された修道の] 各々の区分に関して「無数にして計り知れない、無量の福德が生ずる」と説かれている。²¹ だから分類は多種類ではないのか。どうして九種類 [のみ] と言われるのか。

答える。

「無数である」などと言う説示は勝義においては許容されない。

世俗においてはそれら [「無数である」などと言う説示] は、悲愍より流出したものであると牟尼はお考えになる。(55)

常に²²言語表現を自性とする「 [福德が] 無数にして計り知れず、無量である」という説示は、上述した [深遠であ

るという] 特質を有する修道という唯一の対象に²³結び付く。勝義においては[その説示が修道]を、差異(vyāvṛtti)に基づいて付加された種々性を持つものとして区分することは許容されない。²⁴

他方、世俗においては、教説の法を自性とする上述した説示は、子供じみた[愚]者たちに対して偉大な果が生ずるものであると示すゆえに、対象のない大悲の自性である法界より流出したものであると、如来はお考えになる。だから[九種類より]多種にならないのである。

般若経中に「無数にして計り知れない、無量の福德が生ずる」と説かれているから、修道の分類はわずか九種に限らない。このような反論に対して、勝義の立場からと、世俗の立場からの二通りの解答が用意される。

「無数」云々と説示することは、言語表現することである。しかし勝義においては、いかなるものも言語表現することができない(cf. DA32, 2, 4-5)。したがって、勝義においては「無数」等の説示は成立しないから、それに基づいて修道の区分を批判することは、不合理である。

他方、世俗の立場では、その説示は或る種の意図をもってなされたと考えられる。修道の福德が無数であると説けば、その福德のためにその因である修道を獲得しようと励む者も現れよう。すなわち、凡夫たちを実践に従事するように導くために、大悲心より説いたのである。したがって世俗においても実際に修道が無数あるのではない。

<8. 2. 3. 4> 修道の細分についての論議2 (第56偈-第57偈)

Am82,21
P290,5,3
D117,b,6
DA32,4,5

「[修道は]空性を特質としているから、習熟を優れたものになし得ないではないか。それゆえに[修道は]何もできないのである」と考える、知恵の劣った者の立場から想定して説く。

表現を離れた事象には減少も増加もあり得ない。

修習と云われる道によって何が減じられ、何が得られようか。(56)

法界を自体とし、²⁵望ましい[修]道という事象は、無自性であるから、真実においては「それである」、「他である」、「両方である」、「どちらでもない」と述べることができない。[そのような修道]の修習は優れたものになり得ないから、内なる敵と対症療法が、順次に、[前者が]退失し[後者が]生ずることは、あり得ない。それゆえ、修習と云われる道によって、内なる敵を自性とする何が捨てられ、清浄[を自性とする]何が得られようか。つまり[修道は]何もできない。だから[修道について]陳述すべきではない。

[答える。] そうではない。何故ならば

菩提の如くこの〔修道〕も望ましい効果を成就する。

菩提は真如を特質とする。その〔修道〕もその〔真如〕を特質とすると考えられる。(57)

それ以上優れたものとなし得ず、真如を特質とする²⁶菩提は、戯論のない智慧を本質とする法身などを自性とする仏である〔。それ〕は増上〔縁〕のみによって、弟子たる人々の福德と智慧に応じて、特別な対象の顕現する心を起こすことによって、²⁷望ましい効果をなす。それと同様に、修習によって外来的な垢を離れることによって直證される、真如を特質とするこの〔修〕道も、世俗においては、望ましい効果的作用をなすのである。

しかし勝義においては減少と増加を否定したあり方のものと考えられるから、その時、加行しないことこそが加行である。²⁸ ²⁹だから過失はないのである。

勝義においては減少と増加がないから、修道が内なる敵を減少させ、対症療法を増加させることはない。しかし世俗においては、そのような望ましい効果的作用をなす。

<8. 2. 3. 5> 修道の細分についての論議3 (第58偈)

Am83,7
P291,1,3

「そうであっても、世俗においても効果的作用は正しくな

D118,a,5
DA33,1,8

い」という疑いを想定して説く。

先の意によっても、後の〔意〕によっても、菩提
は理に合わない。(58ab)

ダルマキールティシュリーによれば、前主張において次の三つの可能性
が想定されている。菩提が修道によって生ずるとするならば、

- 1) 相前後する心の各々によってか、
- 2) 多くの同時に起こる心によってか、
- 3) 多くの次第して生ずる心によって生ずるかである(DA33,2,2)。

Am83,9
P291,1,4
D118,a,6
DA33,2,1

1) 〔修道における〕相前後する心の各々に、仏の菩提を
成就する、あらゆる形相についての智慧などのすべての対
象は現れていない。だから、各々〔の心〕によっても菩提
は理に合わない。

2) 望ましい効果〔である仏の菩提〕を成就する〔あらゆる
形相についての智慧など〕が顕現する、同時に起こった
多くの心によっても、³⁰〔菩提は理に合わ〕ない。〔何故
ならば〕「衆生は一々の識の連続体である」と説かれてい
るから、³¹〔多くの心が同時に起こること自体が〕あり得
ないからである。

3) 無上なる仏の菩提を成就する、〔四種の〕留意から十
八種の仏の独自の徳目までを證得するようになる自性の、
次第して起こる、相前後する多くの生じた心によっても、

〔菩提は理に合わ〕ない。〔何故ならば〕その〔後の心〕が生じた瞬間、継続することなしに〔前の心が〕消滅してしまうから、〔前後の心は〕互いに³²関係がないからである。

それゆえにどうして、特別な対象の顕現する心を起こすことによって効果的作用があるのか。

1: 菩提は、仏が有する種々の徳目の総体である。そしてその徳目には、修行の初段階からあるものと、成仏して初めて得られるものがある。菩提がもし相前後する心の各々によって生ずるならば、一つの心に修行の初段階から最終段階までに得られるすべての対象が現れているべきである。しかしながら有部以来の伝統のもとでは、一つの心は一つの対象しか持ち得ない。したがって1の可能性はあり得ない。

2: 菩提がもし多くの一時に起こる心によって生ずると仮定すれば、一つの心が一つの対象しか持たないとしても問題はなくなる。しかし、やはり有部や経量部以来の伝統として、一刹那には一つの心しか存在しないことが前提となっている。³³ したがって2の可能性もあり得ない。

3: 一刹那に一つの心のみ存在し、一つの心が一つの対象しか持たないとしても、多くの次第して起こる心によって菩提が生ずるという可能性が残る。しかしこの場合、一刹那しか存在し得ない心は、後の心が生じたときには消滅しており、関係を持ち得ない。したがって3の可能性もない。

これに対してハリバドラは、3が成り立つことを証明しようとする。

AmB3, 16
P291, 1, 8

それは正しくないから〔次のように〕答える。

燈明の譬喩の道理によって深遠なる法性は八種類である。(58cd)

火炎と燈芯が接触する第一の刹那には、第二の刹那がなければ、[火炎と燈芯が]自らの因から継続して³⁴同時に接触が起こるから、[その両者のどちらが焼き、どちらが焼かれるかが]限定されない。だから因と果を特質とする焼くものと焼かれるものの関係は³⁵ない。

同様に、[焼くものと焼かれるものとして]限定される火炎と燈芯が生ずる第二刹那にも、第一刹那がなければ、[火炎が]常に存在し[燈芯が常に存在しない]などのこととなってしまふから、世俗においても起こり得ない。だから因と果を特質とする、焼くものと焼かれるものの関係は³⁵ない。

そのようであるから、これに縁ること (idam-pratyayata) のみを本質とする縁起の法性によって、吟味されない限りは結構なもの (avicāraika-rāmya) として、³⁶ 因果関係の力によって、[火炎と燈芯の]両者が接触する特別な第一の刹那に依拠して、その[第一刹那]によって能力が優れたものとなった、特別な第二以下の刹那があるだろう。その時、[第一刹那が]因なしに消滅しても、因と果が、そ

の順に、同一時に〔前者が〕生じ〔後者が〕滅すると観察されるから、焼くものと焼かれるものの関係が³⁵ある。

それゆえに、第一刹那も火炎の第二刹那に依拠しなければ燈芯を焼かないし、第二刹那も火炎の第一刹那に依拠しなければ燈芯を焼かない。

前後の二刹那が同一の対象を必要とするということを示すことを目的とする、以上の燈明の譬喩の道理によって、菩提を成就するいくばくかの事象が顕現した前の識に依って、その〔前の識〕に顕現した対象とは別の、より優れた特別な対象が顕現する後の識が、³⁷ 前刹那の如くに³⁶生ずる。

それによって菩提を得ることが理に合っているのである。

世俗において前刹那と後刹那が相互に依拠し合って効果的作用をなすことが、譬喩によって語られる。ここで、焼くものであり因であると規定される火炎に例えられるものは、対症療法であり、焼かれるものであり果であると規定される燈芯に例えられるのは、内なる敵である。

< 8. 2. 3. 6 > 修道の対象としての八種の法性（第59偈）

Am84,6
P291,3,1
D119,a,2
DA34,3,3

上述した喩例によってのみ、八種類の深遠な法性も證得すべきである。だから、修道に住する不退転の菩薩たちの特質を述べるために、八種類の深遠性がいかなる領域にあるかを説く。

生起において、止滅において、真如において、深遠性がある。

認識対象において、認識において、行為において、不二と方便の熟練においてもある。(59)

1) 前後の両刹那によってでもなく、無自性なることによってでもなく、修習によって證得されるべき優れた対象を生起する、ということが縁起である。

2) [縁起によって] 生起したあらゆる事象は本来無自性であり、世俗において再び消滅する、というのが止滅である。

3) あらゆる状況において真如を修習しても、それを直證しない、というのが真如である。

4) 真如を自性とするあらゆる現象において布施などの多種類を実行する、というのが認識対象である。

5) 真如を本体とするから、見ないことを見ることである、というのが認識である。

6) 法性によって、あらゆる事柄に対して行為しないことが行為することである、というのが行為である。

7) 不二を本体とするものとして、あらゆる事柄を行ずる、というのが不二である。

8) すべての資糧を完成しても、その果である仏たるこ

とを證得しない、というのが方便の熟練である。

[以上の八種において、] 不可思議な解脱への入口に達するので、互いに相違した対象を實踐するから、深遠性がある。

< 8. 3 > 不退転の衆徒の結語

Am84, 22
P291, 3, 8
D119, a, 7

修学が残っている不退転の衆徒を、特質とともに説明し終えた。³⁹

<9> 輪廻と涅槃の同一性（第60偈）

Am84,23
P291,3,8
D119,a,7
DA34,5,3
PP98,4,7

修学の残っている衆徒の法を得た者は、仏たることを得んがために努力する。だから、仏たることを得るための因である、輪廻と涅槃の同一性を説く。

諸現象は夢の如くであるから〔輪廻的〕生存と寂滅とが識別されない。

行為がないなどという諸批判への解答は、〔経中に〕説かれている通りである。（60）

輪廻に属するものと清浄なるもの、すなわち内なる敵と対症療法は、映像のみを自性とするから、夢の如くであると證得する。だから、輪廻と涅槃を別異なるものとして識別しない。したがって、同一である。

反論：夢の如くであるならば、睡眠の状態におけると同様に、覚醒の状態においても、十種の悪や布施などがなくともとなろう。

〔解答：〕以上の諸批判への解答は〔次の通りである。〕たとえば外界実在論〔である有部と経量部（DA34,5,8）〕の立場では、〔形成されたものは〕刹那的存在であるから、因なしに消滅する。¹ また、決定説〔である『俱舍論』〕に「世界の種々性は行為より生じた」と説かれている。²

だから勝義においては、誰かが誰かに殺されたのでもなく、殺されていないのでもなく、誰かが誰かの財産を〔与えられないのに〕取ったのでもなく、取っていないのでもない、等々と主張される。その場合〔にも、世俗においては、生命の(LN299,a,4)〕連続体が引き続くのと反対の事象を起こしたならば、殺害などであると判断されるという観点から、〔ちょうど〕正しくない思惟などを持った者にとっての悪などの如く、殺生などであると規定される。

一切の現象が夢の如くであるならば、世俗における善悪の行為がなくなってしまう、と、外界実在論の立場に立つ者からの批判が起こる。これに対して、外界実在論者の立場、中観論者の立場の両方から、その批判に答える。

外界実在論の立場でも刹那滅を認めるから、生命は刀などによって切られなくても、自ずと消滅することになる。また『俱舍論』に説くように、世界の種々性の原因を行為(karman)に求めるから、或る人が殺し、或る人が殺されるのは、その人の過去の行為の結果として現れるに過ぎない。したがって、以上のような「勝義」においては、殺生や偷盗などの行為はない。しかし、世俗においては、生命の連続体を断ち切るような行為をしたならば、それを殺生などと規定する。それはあたかも、生きている限り禁欲行(brahma-caryā 梵行)を守ると誓った比丘が、或るとき女性を見て、硬くて豊満な乳房を撫でたいなどという正しくない思惟を持ちつつ会おうと、抱きついてしまうなどの破戒の悪に及んでしまうようなものである

(cf. DA34,5,8-35,2,3)。

Am85,6
P291,5,7
D119,b,5
DA35,2,3

同様に〔中観派の立場でも (Wo731,4)〕、夢の如き事象であっても、すべての顛倒の束縛がまだ切られていない者たちは、その〔夢の如き事象〕に対応した対象を実体などとして執著するから、〔布施などが善などであると規定される (Wo731,6)〕、等々の解答が、種々の〔経典の (DA35,2,6)〕他の箇所に説かれていると、理解すべきである。

また〔『唯識二十頌』に〕「夢の中では心が睡眠〔という心作用〕によって損なわれている。それゆえ〔覚醒中と〕果は同じでない」と言うから、³ 喩例が成立しない。

同様に〔外界実在論の立場でも、(Wo731,3)〕夢の中でも善や悪を行じた者は、目覚めた状態において「おお、やった。良くやった」と歓喜する。その場合、〔覚醒〕後の状態の心が〔夢の中の善などに〕執著して助長することによって、〔行為の果が〕助長される。だから喩例が成立しない。

ゆえに輪廻と涅槃の同一性がある。

<10> 仏国土の浄化 (第61偈)

Am85,14
P291,5,2
D120,a,1
DA35,4,1

両者の同一性を修習した者は、自分の仏国土において仏となる。だからその次に仏国土の浄化を説く。

社会環境 (sattva-loka 衆生世間) は不浄であり、
同様に自然環境 (bhājana-loka 器世間) も [不
浄] であるが、
その [不浄] に清浄をもたらすから、仏国土の浄
化である。(61)

社会 [環境] と自然環境の区別によって二種類の仏国土
[がある。それ] には、その順に、[前者には] 飢えや渴
き [などがあるから不浄であり、後者には] 石や刺などが
あるから不浄である。その [不浄] の対症療法として、
[前者には] 神々しい食事と [後者には] 金の地面などと
いう清浄を起こす [。この] 観点から浄化するのが仏国土
の浄化である。

<11> 方便の熟練 (第62偈 - 第63偈)

Am85,21
P291,5,5
D120,a,4
DA35,4,2
PP99,1,5

自分の仏国土の浄化を成就した者は方便の熟練によって、
[各々の弟子の] 天分に応じて仏の働きをなさねばならな
い。だから方便の熟練を説く。

この [方便の熟練] には領域と加行がある。敵た
ちの超越、
安住していないもの、勢力に応じていること、独

特であるものを特質とするもの、(62)

愛著しないもの、了得しないもの、表象と願求の
終息したもの、

それを標識とするもの、無量なるものであり、方
便の熟練は十種類である。(63)

- 1) 障害であるものを越えるから、天魔などを超越すること。
- 2) あらゆる現象の¹同一性を修習したから、安住せずに止住すること。
- 3) 誓願が成就したので、宿[願]の勢力によって導き出された利他の行為を²なすこと。
- 4) 一切の難行をよく修習したから、独特であるもの。
- 5) 白法が清浄であることによって、あらゆる現象を取得しないこと。
- 6) 空性という、解脱への入口によって、了得しないこと。
- 7) 表象がないという、解脱への入口によって、表象がないこと。
- 8) 願求しないという、解脱への入口によって、願求がないこと。
- 9) 質疑を先んじて不退転の法を語るから、不退転の標識。
- 10) あらゆる対象を知るから、無量であること。

〔以上の十種類に〕において、般若波羅蜜の十種類の対象を直證するための時期と非時期を知る加行が、方便の熟練である。

般若波羅蜜を教示する現觀莊嚴と名付けられる論に対する第IV章の註〔を終えた〕。

第IV章 訳注

<0>

1 Am68,1: *parijñāta-tri-sarvajñatā-vaśitārtham*; P285,2,4; D104,b,1: *thams cad mkhyen pa nyid gsum yongs su shes pa ni/ dbang du bya ba'i phyir*; Wo445,11: *parijñāta-tri-sarvajñatā-vaśitvārtham*; Tu285,16: *parijñāta-tri-sarvajñato vaśitvārtham*; SN150,2,7: *yongs su shes par gyur pa'i thams cad mkhyen pa nyid gsum po/ dbang du bya ba'i phyir*. 今、『小註』チベット語訳とTuによる。Am、Wo、SNに従うならば「熟知したところの三種の全知に自在になるために」と訳される。これは、主語が明らかでない点を除いて、意味は同じである。

2 三種の全知 (*tri-sarvajñatā*, Tib., *thams cad mkhyen pa nyid gsum*) は、あらゆる形相についての智慧 (*sarvākārajñatā*, Tib., *rnam pa thams cad mkhyen pa nyid*, 一切相智)、実践道についての智慧 (*mārgajñatā*, Tib., *lam shes pa nyid*, 道智)、あらゆる事物についての智慧 (*sarvajñatā*, Tib., *thams cad shes pa nyid*, 一切智) の三つを指す。三種の全知を表示するこれらの複合語の後分は、“*jñatā*” (知る者であること、智慧) という語である。それがチベット語では、“*mkhyen pa nyid*” と “*shes pa nyid*” の二通りに訳されている。前者は後者の敬語形である。つまりチベットの翻訳者たちは、仏の智慧を表す「あらゆる形相についての智慧」を敬語形で翻訳し、菩薩の智慧を表示する「実践道につ

いての智慧」や、声聞と独覚の智慧を意味する「あらゆる事物についての智慧」を普通形で訳すことによって、前者が上位のものであることを明らかにしている。一方、「三種の全知」という場合の「全知」と「あらゆる事物についての智慧」は、原語をともに "sarvajñatā" としている。しかしチベットの翻訳者は両者を訳し分けている。すなわち、仏の智慧をも含む全知を敬語形によって "thams cad mkhyen pa nyid" と訳出し、声聞や独覚の智慧に過ぎないものを普通形によって "thams cad shes pa nyid" と訳している。本訳では、仏の智慧をも含むものに「全知」という日本語を当て、声聞と独覚の智慧であるものに「あらゆる事物についての智慧」という訳語を与えた。

3 Am68,1: sarvākāra-mārgga-vastu-jñāna-; P285,2,4; D104,b,1: rnam pa thams cad dang lam dang gzhi shes pa; Wo445,11; Tu285,16: sarvākāra-mārga-vastu-jñāna-; SN150;,2,8: rnam pa dang lam dang gzhi shes pa thams cad. "sarva" (すべての) という語の修飾が及ぶ範囲について、『大註』と『小註』の翻訳者では、解釈が異なっている。『大註』では "thams cad" は "shes pa" (jñāna) を修飾し、『小註』では "rnam pa" (ākāra) のみを修飾するものとして訳されている。本訳では、結局は『大註』の訳と同じ意味になろうが、"sarva" は "ākāra"、"mārga"、"vastu" の三つを修飾するものとした。

4 [AAV(T) 79,2,3-7]

5 ハリバドラは「三種の全知」(sarvajñatā) という語を、多義に用いる。まず第一義は、仏、菩薩、声聞と独覚の智慧そのものである。第二義的な

ものは、『現観莊嚴論』の実践体系である八現観にかかわっている。八現観のうちで第三のものまでは、仏などの三種の智慧と同じ名称が与えられている。しかしそれら三現観は修行の最初期のものであって、実際に仏などの智慧であるわけではない。例えば、「あらゆる形相についての智慧」と名付けられた第一現観は、同じ名称を持つ仏の智慧ではなくて、その仏の智慧について聴聞と思索を繰り返すことによって得られる、低次の智慧である。同様のことは、第二現観と第三現観にも当てはまる。したがって、総称である「三種の全知」も、一義的な三種の全知について聴聞と思索を繰り返すことによって得られる、低次の智慧を指す。次に、『現観莊嚴論』の構成はその実践体系である八現観に基づいているため、全八章の第Ⅰ章から第Ⅲ章までを意味する場合がある。さらに『現観莊嚴論』は、すべての章において各現観を直接に説明しているわけではない。間接表現によって現観について説明している箇所も少なくない。だから、或る章の直接の叙述内容は、対応する現観と完全に一致するわけではない。したがって、「三種の全知」は第Ⅰ章から第Ⅲ章までの叙述内容をも表示する。要するにハリバドラは「三種の全知」という語を次の四通りの意味に用いている。

- 1) 修行の目的である、三種類の智慧
 - 2) その目的について聴聞し思索するという実践
 - 3) その実践を対象とする、『現観莊嚴論』の第Ⅰ章から第Ⅲ章までの叙述
 - 4) その第Ⅰ章から第Ⅲ章までの直接の叙述内容
- 「三種の全知」はこれらの意味を、時にはいずれか一つだけ、時には二

つ以上を含んで、あいまいに用いられる。また、「あらゆる形相についての完全な理解」(sarvākārābhisambodha)も「三種の全知」の場合と似た問題を抱えている。但しこの場合、一義的なあらゆる形相についての完全な理解は、そのまま八現觀の第四のものであるので、「三種の全知」における1)と2)の区別に相当する区別はない。先の「三種の全知」という語の四通りの意味に対応させて「あらゆる形相についての完全な理解」の意味をまとめると、次の通りである。

1')& 2') 三種の全知という目的について瞑想する実践

3') その実践を対象とする、『現觀莊嚴論』の第IV章の叙述

4') その第IV章の直接の叙述内容

<1. 1>

1 Am68,6: pratipakṣa-dharmatā-svabhāvānām; P285,2,6; D104,b,3: gnyen po'i chos nyid kyi ngo bo nyid; Wo445,13: pratipakṣa-dharma-svabhāvānām; Tu285,18: pratipakṣa-dharmatā svabhāvānām; SN150,3,1: gnyen po'i chos kyi ngo bo nyid. 今、WoとSNによる。

2 チベットの学僧ジェツン・チョーキギエルツェン rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan (1478-1546)によれば、ここで説かれる項目は「対症療法である認識の形相」(gnyen po phyogs kyi shes rnam)であり、その定義は「自分〔に特定〕の内なる敵を打破し得る認識」(rang gi mi mthun phyogs 'joms nus pa'i mkhyen pa)である([Onoda 1983: 40])。彼のこの理解は、この場合の形相が主体の側に属するものであり、さらには形相

が特別な主体そのものであるという解釈がチベットの伝統にあったことを示している。

3 『大註』のチベット語訳においては「無常なるものなどを対象とする認識の諸形態を形相として確立することが、一般的な特質であると知るべきである」(SN150,3,1: mi rtag pa la sogs pa la dmigs pa'i shes pa'i bye brag rnams rnam pa nyid du rnam par bzhag pa ni spyi'i mtshan nyid yin par shes par bya ste) と説かれている。この訳文中の "shes pa" (認識) は、『小註』における "ye shes" (智慧) と同様に、サンスクリット "jñāna" という語を訳すときに用いられる語である。『大註』の翻訳者と『小註』の翻訳者の間に、この場合の "jñāna" という語を一般的に「認識」と捉えるか、あるいは認識の中でも優れたものである「智慧」と捉えるかについて、解釈の違いのあったことが知られる。

<1. 2>

1 "viveka" という語の意味は「分離」である。そしてこの第3形相は、空なるものという伝統的な形相に相当すると規定されている。しかし「空なるものは分離である」という叙述は意味をなさない。むしろこの場合ハリバドラは、"viveka" という語を「分離したもの」の意味で用いたと考えられる。事実、ハリバドラが viveke という形相についての叙述であると註釈する『八千頌般若経』の本文には、"vivikta" (分離したもの) という語が用いられている ([ASP 445,8])。

2 Am68,24:-parihāṇi-vikalpānām pratiniyata-jñeyāvaraṇānām

pratipakṣa-bhūta iti; P285,3,6; D105,a,3: shes bya'i sgrib pa
 yongs su nyams par rnam par rtog pa rnams kyi so sor nges
 pa'i gnyen por gyur pa dag yin no; Wo448,16; Tu288,15:
 parihāṇi-vikalpānāṃ śaṅṅāṃ pratiniyata-jñeyāvaraṇānāṃ pratipakṣa-
 bhūtaḥ; SN151,2,1: shes bya'i sgrib payongs su nyams par
 rnam par rtog pa ste/ drug gi so sor nges pa'i gnyen por gyur pa.
 サンスクリットとチベット訳とでは「特定の」(pratiniyata, Tib., so
 sor nges pa) の修飾関係が異なっている。まずチベット訳では、"so
 sor nges pa" (特定の) は "rnam par rtog pa" (概念知) によって限
 定され、"gnyen po" (対症療法) を修飾している。一方サンスクリット
 においては、"pratiniyata" (特定の) は複合語 "pratiniyata-
 jñeyāvaraṇa" の前分であり、"jñeyāvaraṇa" (認識対象に対する障害) を
 修飾している。この複合語は中性、複数、属格の語尾を取っており、男性、
 複数、属格語尾の "vikalpa" (概念知) と同格である。したがって
 "pratiniyata" は結局、"jñeyāvaraṇa" と同格の "vikalpa" を修飾し
 ていると考えることができる。そして文面には現れないが、「6種の形相
 のそれぞれに特定な」というように、"ākāra" (形相) によって
 "pratiniyata" が限定されていることが予想される。この場合、形相はす
 なわち対症療法であるから、"pratipakṣa" に "pratiniyata" が限定さ
 れていると考えることができる。それゆえ、チベット訳では「"rnam par
 rtog pa" → "so sor nges pa" → "gnyen po"」という方向のものとみなされ
 る修飾関係が、サンスクリットでは逆に、「"pratipakṣa" →

"pratiniyata"→"vikalpa"という方向のものと解し得るのである。

3 MSABh68,1: yo hi niḥsvabhāvaḥ so 'nutpanno yo 'nutpannaḥ so 'niruddho yo 'niruddhaḥ sa ādi-sānto ya ādi-sāntaḥ sa prakṛti-parinirvṛta ity evam uttarottara-niśrayair ebhir niḥsvabhāvatādi-bhir niḥsvabhāvatāyā 'nutpādādayaḥ siddhā bhavanti/

4 『大註』によれば「起立のないもの」(Wo449,11: asamutthāna; SN151,3,2: ldang ba med pa)である。

5 "aparāmrṣṭa" は「無取著」とも訳される([二会 202,c,24])。つまり接頭辞 "parā" を伴った動詞語根√mrś の過去分詞に、否定の接頭辞 "a-" の付いたものと解される。しかしチベット訳は、「最高の」を意味する "para" と、接頭辞 "ā" を伴った動詞語根√mrś の過去分詞との複合語に、否定の接頭辞 "a-" の付いたものと解する。

6 Am69,9: niryāṇam; P285,4,8; D105,b,4: nges par 'byin pa; Wo450,27; Tu290,23: niryāṇa; SN151,5,5: nges par 'byung ba. "niryāṇa"はむしろ「超出すること」を意味し、十六形相の一つとして数えられることは一般にはない。従ってここでは採用せず、『小註』チベット訳からの還梵を用いた。

7 P285,4,8; D105,b,4: mi rtag pa dang/ sdug bsngal ba dang/ stong pa dang bdag med pa'i rnam pa dang/ lnga pa mtshan nyid med pa'i rnam pa'i ngo bo ni rnams te. ここでは四種の形相の最後のものを表示する "bdag med pa'i rnam pa" (無我なるものという形相)の直後に、結合接続辞 "dang" が続いている。そして "lnga pa mtshan nyid med

pa'i rnam pa'i ngo bo nyid" (第五の、特質がないものという形相を自性とするもの) に続いて、複数を示す辞 "rnams" が置かれている。したがって『小註』チベット訳も、「無常なるもの」などの伝統的な四形相と、「特質がないもの」という形相の間には内的連関がないものと解釈していると思われる。

8 "atyanta-sūnyatā" はしばしば「畢竟空」と訳される ([Nagao 1964: 82])。しかしここでは特別な意味が付せられているので、伝統的な訳に従わなかった。

9 Am69,20: -lakṣaṇa-; P285,5,6; D106,a,2: rang gi mtshan nyid dang; Wo452,2; Tu291,23: -lakṣaṇa-; SN152,1,8: rang gi mtshan nyid dang. サンスクリットは "sva-" を欠くが、チベット訳に従った。

10 [MAV 24-26] [山口 1966a: 83-94]. [Frauwallner 1959: 141] [服部 1961: 124-127]. 但し、個々の空の解釈はもとより、その順序もハリバドラの挙げる十六空と一致しない。一方、チャンドラキールティの十六空の順はハリバドラのものと一致し、内容も近い ([MAV 302-338] [小川 1976: 326-351])。

11 第I章<7. 2. 3. 2>参照。

12 ハリバドラにおいては原則として空性は智慧の対象であるが、空空の説明に見られるように、智慧を指すこともある (第I章<7. 2>参照)。

13 ここで「覚者たることという形相」と訳した "buddhatvākāra" を、ダルマキールティシュリーは同格限定複合語 (karma-dhāraya) ではなく、「覚者たることの形相」というように格限定複合語 (tat-puruṣa) と捉え、<1.

2. 3. 3 > で説かれる三十九形相すべてを指すものと理解する (DA24,5,6)。
- 14 [AAV(T) 60,5,3] [AS 71-76] [集論 684a-685b] [ASBh 83-92] [雑集論 738b-742a]
- 15 残る四道は、8 依根差別道 (niśrayendriya-bhinna-mārga)、9 淨修三学道 (śikṣā-traya-pariśodhana-mārga)、10 発諸功德道 (sarva-guṇa-nirhāraka-mārga)、11 遍摂諸道道 (mārga-saṃgraha-mārga) である。
- 16 [MAVBh 50,8-16] [MSABh 140,25-141,1] [AS 72,15-16]
- 17 『中辺分別論』、『大乘莊嚴經論』、『阿毘達磨集論』ともに、八種の捨てる準備への言及は、四種の神通の土台の説明において行なう。[MAVBh 51-52] [MSABh 142-143] [AS 76]
- 18 ハリバドラは『大註』の他の箇所において、過失を六種と数える (Wo928,25: sarvasyaiva samādheḥ kausīdyam ālambana-saṃpramoṣo layauddhatye tathānābhogaḥ punar ābhoga iti ṣaḍ doṣanam)。このように過失の数を六とする例は、カマラシーラの『修習次第』初篇にも見られる (BhK(1)208,3: saṃkṣepena sarvasyaiva samādheḥ ṣaḍ doṣā bhavanti/ kausīdyam ālambana-saṃpramoṣo layauddhatyam anābhoga ābhogateti)。
- しかし『中辺分別論』に、わざわざ「沈鬱と軽躁は一つの過失とみなされる」 (layauddhatyam eko doṣaḥ kriyate) と明記してあるように ([MAVBh 51])、過失数を五とみなすのが一般的である。例えば十世期末に活躍し、アティージャ Atisa の師の一人として有名なボーディバドラ Bodhibhadra も『三昧資糧章』 Samādhi-sambhāra-parivarta の中で、「以上のように三

昧に入ったその者は、五種の過失を断つために八種の捨てる準備に基づくべきである」(de ltar sems mnyam par 'jog pa des/ nyes pa lnga spang ba'i phyir spong ba'i 'du byed brgyad bsten par bya ste [TTP No.5319: Vol.102 51,4,6-8])と述べて、『中辺分別論』から引用している。

19 MAV51,11: kausidyam avavādasya saṃmoṣo layauddhataḥ/ asamskaro 'tha saṃskāraḥ pañca doṣā ime matāḥ//IV. 4

20 [佐々木 1958: 580-593]によれば「認可」を意味する "kṣānti" という語は、「意志」を意味するパーリ語 "khanti" からの誤った梵語化であるが、その意見は [桜部 1975: 54-59]によって否定された。

21 五種の機根から八項目より成る聖なる道までを、洞察に導く段階から修道までと関連付ける考え方は『中辺分別論』に見られる ([MAVBh 52-54])。『阿毘達磨集論』には八項目より成る聖なる道についての言及はないが、同様な見解が見られる ([AS 74])。またカマラシーラの『般若心経註』にも同種の説があり、そこではさらに、四種の留意から四種の神通の土台までを解脱へ導く段階と関連付けている ([TTP No.5221: Vol.94 296,4,2-4])。なおアーリヤ・ヴィムクティセーナも五種の機根と力を洞察へ導く段階と結び付けている ([AAV(T) 60,4,4-5,1])。他方『俱舍論』は以上の所説と異なって、四種の留意を解脱へ導く段階、四種の精励から五種のカまでを洞察へ導く段階、七種の菩提の補助を修道、八項目より成る聖なる道を見道と結合させる ([AKBh 384] [俱舍 第25卷 24])。

22 [AAV(T) 61,3,4-5]

- 23 Am70,17: *drṣṭi-pratipakṣa-mārga*; P286,2,4; D106,b,7: *gnyen po'i lam*. 今、チベット訳に従う。
- 24 解脱への三種の入口と十六形相の結び付きはアーリヤ・ヴィムクティセーナにも見られる ([AAV(T) 61,1,1-3])し、『阿毘達磨雜集論』にも見出せる ([ASBh 98])。
- 25 AK449,9: *ānimittāḥ śamākāraih/VIII. 24a*
- 26 アーリヤ・ヴィムクティセーナに同文が見られる (AAV(T)61,1,3-4)。
- 27 Am70,25: *vimokṣākārās trayāḥ*; P286,3,1; D107,a,1: *rnam par thar pa'i sgo rnam pa gsum mo*. 今、サンスクリットに従った。
- 28 AK426,13: *prathama-dhyāna-phalam dve kāma-dhātu-prathama-dhyāna-bhūmike nirmāṇa-citte/ dvitīya-dhyāna-phalaṃ trīṇi kāmādhātu-prathama-dvitīya-dhyāna-bhūmikāni/ evaṃ tṛtīya-caturthadhyāna-bhūmikāni catvāri pañca ca yojyāni/ sva-bhūmikādhāra-bhūmikaṃ nirmāṇa-cittaṃ dhyāna-phalaṃ veditavyam*. [俱舍 第27卷 15]
- 29 AS95,7: *nirmāṇāvaraṇād vimuktiḥ*; ASBh124,22: *kathaṃ vimokṣa ity ucyate/ vimucyate 'nena nirmāṇāvaraṇād iti kṛtvā*.
- 30 見道の十六刹那のうちの無間隙の道を指すかとも思われるが、筆者未詳。
- 31 『俱舍論』や『阿毘達磨雜集論』などで「禅定と解脱と三昧と精神集中を知る力 (*dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-jñāna-bala*, Tib., *bsam gtan dang rnam par thar pa dang ting nge 'dzin dang snyoms*

par 'jug pa mkhyen pa'i stobs 静慮解脱等持等至智力)」と名付けられるものに相当する。『翻訳名義大集』は「禅定と解脱と三昧と精神集中と汚染と清浄と出定すべてを知る力 (sarva-dhyāna-vimokṣa-samādhi-samāpatti-saṃkleśa-vyavadāna-vyutthāna-jñāna-bala, Tib., bsam gtan dang rnam par thar pa dang ting nge 'dzin dang snyoms par 'jug pa dang kun nas nyon mongs pa dang rnam par byang ba dang ldang pa thams cad mkhyen pa'i stob)」としており、ハリバドラと『俱舍論』、『阿毘達磨雜集論』との中間体を示している。

32 十種の力の順が他の諸論書と異なる。『俱舍論』や『阿毘達磨雜集論』での順は1、2、7、5、3、4、6、8、9、10となっている([俱舍 第27卷 1裏-2表] [AKBh 411-412] [雜集論 760b] [ASBh 129])。一方、『翻訳名義大集』に挙げられる順はハリバドラのものと同じ([榊 1981: 9-10])。

33 四種の自負の順序が『俱舍論』、『阿毘達磨集論』において紹介される順と異なる。両書では11、14、12、13という次第で説かれる([俱舍 第27卷 3表] [AKBh 414] [集論 691c] [AS 98])。

34 仏に独自の十八種の徳目の内容が『俱舍論』では異なる。そこでは1から14までと、三種の留意と大悲とで十八種と数える([俱舍 第27卷 1] [AKBh 411])。これに対し大乘の多くの経典や論書はハリバドラの説く十八種と同じ数え方をする(cf. [Lamotte 1970: 1625-1661])。

35 Cf. [AAV(T) 62,2,4-5]

<1. 3 >

1 Cf. [AAV(T) 62,3,2-5]

2 第I章<0. 2. 2. 4. 3 >参照。

<2. 1 >

1 P286,5,5: sgrub pa dang ldan pa/ dge ba'i bshes gnyen dag gis ...; D108,a,6: sgrub pa dang ldan pa dang/ dge ba'i bshes gnyen dag gis 今、前者に従う。なお「宗教的善友たちに加護された」はサンスクリットとチベット訳ともに「行を備えた者」の後に置かれるが、1)から4)までのすべてを修飾していることを明らかにするために、訳では冒頭に置いた。

2 Am72,3: ākāra-lakṣaṇāyā mātur asyāḥ śravaṇa-grantha-grahaṇa-; P286,5,5; D108,a,6: rnam pa'i mtshan nyid can gyi yum 'di'i gzhung nyan pa dang/ 'dzin pa dang. 今、チベット訳に従う。

<2. 2 >

1 第I章<3 >参照。

2 第IV章<0 >解説参照。

3 Wo481,9: rūpācintyādy-adarśane; P286,5,8; D108,b,2: gzugs sogs bsam mi khyab mi mthong. チベット訳によれば「色などを不思議なもの
と見ないため」を意味する。

4 第I章<0. 2 >注2参照。

- 5 Am72,18: satata-bhāvanām; P287,1,3; D108,b,4: rtag tu chos sgom pa dang. 今、チベット訳に従い「法」を補う。
- 6 Am72,19 hāṇi-vṛddhy-adarśanam; P287,1,4; D108,b,5: 'phel ba dang 'grib pa mi mthong ba dang. 今、チベット訳の順に従う。
- 7 第I章<2. 4>解説、参照。
- 8 『大註』およびアーリヤ・ヴィムクティセーナは10)を欠く。しかしダルマキールティシュリーによって補った。DA26,5,3: phyir mi ldog pa'i sa bde blag tu thob nas nges par 'byung ba dang mi 'bral bar 'gyur zhing bar chad med par 'gyur ba dang.
- 9 チベット訳は「現観」(mngon par rtogs pa) とある(SN157,1,2)。またダルマキールティシュリーも同様である(DA26,4,8-5,6)。
- 10 以上の所説は、すでにアーリヤ・ヴィムクティセーナに見られる(AAV(T)63,5,5-64,1,2)。また、ダルマキールティシュリーにも引き継がれている(DA26,4,8-5,6)。

<3>

- 1 [Amano 1975: 151]は最初の十四項を "rgyur gyur pa'i yon tan" (因であるところの功德)、後の十四項を "'bras bur gyur pa'i yon tan" (果であるところの功德) とする。しかしその典拠であるプトン自身は前者を「果」とみなし、後者を「因」とみなしている。LN262b1: 'og ma rgyur gyur pa'i yon tan bcu bzhi dang/ gong ma 'bras bur gyur pa'i yon[sic.] bcu bzhi grangs bzhin du sbyar te bshad pa ni.

2 Am73,4: esām lābhenāvīparīta-prayogābhinandasyotpadyanta iti;
P287,2,7; D109,a,7: de dag phyin ci ma log pa'i sbyor ba la mngon
par dga' ba la 'byung zhing 'thob pas. チベット訳に従えば「それら
は、顛倒しない加行を歎喜する者に現れ、得られる」と訳し得る。

<4>

1 聴聞者と前項が結び付き、解説者と後項が結び付くことを意味すると思われるが、『二万五千頌般若経』のTに基づく限り、それのみでなく、聴聞者が後項と結び付き、解説者と前項が結び付く場合も説かれている。その場合には経に従った。

2 Am73,17: chanda-viṣaya-bheda-vaidhūryam; P287,3,6; D109,b,6:
'dun pa'i yul tha dad pas nyams pa; Wo515,12; Tu320,16: chanda-
viṣaya-bheda-vaidhūryārtham; SN160,4,3: 'dun pa'i yul tha dad pas
bral ba'i don. 今、チベット訳に従った。しかし該当する般若経の本文
([T Vol.89 141,5,4-7] [ASP 515])を参照する限り、「[一方が般若波羅
蜜を] 欲求しており、[他方の居る] 場所が異なることによる過失」を意
味している可能性が高い。

3 Am73,27: kulāvalokana-saumanasyam daurmanasyam; P287,4,4;
D110,a,4: khyim lta bas yid mi bde ba. サンスクリットに従えば「[説
法者は友人などの] 家庭に会うのを喜び [聴聞者は] 憂えること」と訳し
得る。

<5. 1 >

- 1 「作具として成立する」「対象として成立する」という表現は、第I章<7. 2. 2>に対する『大註』の中にも見られる (Wo85,25: yāna-śabdasya karma-karaṇa-sādhanatvād.)。
- 2 Am74,3: karma-sādhanena ca lakṣyata iti; P287,4,7; D110,a,7: las su bsgrub pas de rnam mtshon par bya ba yin pas. 今、チベット訳に従った。
- 3 [Apte 1965: 808]
- 4 [Vasu 1962: 524-526]
- 5 仏教的な実体と属性の関係については、[Katsura 1987]を参照。なお、第I章<3. 2. 3. 1-2>参照。
- 6 [長尾 1982: 272-274]
- 7 [Abhyankar 1961]

<5. 2 >

- 1 チベット訳に従えば「まず」の位置が異なる。P287,4,8; D110,a,7: de la shes pa'i mtshan nyid thams cad mkhyen pa gsum gyi dbye bas tha dad pa la/ re zhig thams cad shes pa nyid kyi sgo nas ...gsungs te. (その[四種の特質の]うち、認識という特質は三種の全知の別によって区分される。[その三種の区分された認識という特質]のうち、まず、あらゆる事物についての智慧の点から説く。)
- 2 "unmiñja" という語を [Edgerton 1953: 133] は "opening, starting,

initial developement, initiation" の意に取るが、[Conze 1967: 127] が "affirmation" と解するのに従った。

3 『大註』には他にも同一引用が見られる ([Wo 173,12; 297,19; 414,12; 698,5; 916,17] [真野 1975: 402])。この引用句は、ナーガールジュナに帰せられる『出世間讃』 *Lokātīta-stava* 20 に見出される (rten cing 'brel bar gang byung ba// de nyid khyod ni stong par bzhed// dngos po rang dbang yod min zhes// mnyam med khyod kyi seng ge'i sgra// [de la Vallee Poussin 1913/1914: 9])。これはプラジュニャーカラマティ *Prajñākaramati* の『入菩提行論註』に引用されていることから、サンスクリットが知られる (yaḥ pratītya-samutpādaḥ śūnyatā saiva te matā/ bhāvaḥ svatanthro nāstīti siṃha-nādas tavātulaḥ// [Vaidya 1960b: 198])。しかし [Wo 297,19] の引用は後半部分が異なっており、ハリバドラの直接の典拠は別書にあると思われる。

4 Am75,4: sarvatraga-jñānam; P288,1,7; D111,a,6: thams cad du 'gro ba dang. 今、チベット訳に従った。

5 Am75,12: dharmānvaya-jñāna-kṣānti-jñāna-kṣaṇair; P288,2,4; D111,b,3: chos dang rjes su shes pa'i bzod pa dang shes pa'i mtshan nyid. 今、サンスクリットに従った。

6 "viśeṣa-mārga" を他の箇所では「向上道」と訳したが、ここでは意味が異なるので「優秀道」と訳す。

7 チベット訳に従って「諦」を補った。

8 チベット訳に従って「六」を補った。

9 第I章<4. 1>参照。

10 Am75,28: pranidhānādi-paripūrṇa-kāraṇa-samāgrī; P288,3,4: smon lam la sogs pa'i pha rol tu phyin pa yongs su tshogs pa dang; D112,a,3: smon lam la sogs pa'i pha rol tu phyin pa yongs su rdzogs pa'i rgyu'i tshogs pa dang. 今、Dに従う。

11 第I章<3. 4>参照。

12 Am75,32: abhijñādy-utpādana-; P288,3,6; D112,a,4: mngon par zhen pa la sogs pa skye ba'i. 今、チベット訳による。第I章<3. 1>参照。

13 Am76,7: anāgata-sukham; P288,4,1; D112,a,7: ma 'ongs pa'i phan pa dang. 今、チベット訳に従う。

14 第IV章<9>参照。

15 Am76,23: tat-kāya-daṣṭhulya-liṅgasya; P288,4,8; D112,b,6: de'i rtags lus kyi gnas ngan lan dang. 今、チベット訳に従う。

16 Am76,23: tad-yoniśo-manaskārādi-nimittasya; P288,4,8; D112,b,6: de'i mtshan ma tshul bzhin ma yin pa yid la byed pa la sogs pa dang. 今、チベット訳に従う。

17 第I章<6>参照。

18 Am76,26: bhāvya-bhāvaka-bhāvanā-; P288,5,2; D133,a,1: bsgom par bya ba dang bsgom pa po'i chos; Wo609,25: bhāvya-bhāvaka-bhāvanā-; SN173,2,5: bsgom par bya ba dang bsgom pa. 今、サンスクリットに従った。

<6. 1 >

- 1 [AAV(T) 71,2,3-4]
- 2 [PP 93,3,2], 第IV章<0>参照。

<6. 2 >

- 1 チベット訳により「無上」を補う。

<7. 1 >

- 1 チベット訳は「洞察へ導く段階」を欠く。
- 2 Am77,30: *nivṛtti-sthitasatyātmanas*; P289,2,3; D114,a,2: *ldog pa dang zhugs pa'i bdag nyid can*. 今、サンスクリットに従う。

<7. 2 >

- 1 チベット訳は「現観」を欠く。
- 2 [俱舍 第25卷 11] [AKBh 381-382]や [雑集論 684a] [AS 70]に従った。
- 3 第I章<7. 2>注3参照。他にも [Wo617,23]。
- 4 Cf. Wo613,11: *vināśo bhāvanā-mārgaḥ kleśa-prahāṇopāyaḥ prayoga-mārgaḥ ...nirodhaḥ pariśiṣṭa-kleśa-prakārasya prayogānantarya-vimukti-mārgātmako viśeṣa-mārga ity eke. vaiśeṣika-guṇābhinirhāraḥ viśeṣa-mārgo nirodha ity anye.* (「消滅」とは、修

道における煩惱の捨断の方便であり、加行道である。「止滅」とは、残った煩惱の類にとっての加行、無間隙、解脱の道である向上道である、と或る者は言う。別の者は、特殊な功德を導き出す向上道が「止滅」である、と言う。)

5 Cf. Wo610,3: tām eva bhāvanām sarvākārajñatādi-bhedenāha sarva-dharmābhāvenety-ādinā. tatra sarvākārajñatayā sarvābhisamayānutpāda-saṃgrahāt sarva-dharmābhāvanā mārgajñatayānabhiniveśena sarva-mārga-śikṣaṇād asaṅga-bhāvanā sarvajñatayāśeṣa-vastu-saṃgrahād ananta-bhāvanā sarvākārābhisambodhena viśeṣa-mārga-rūpatvād asad-bhāvanā mūrdhābhisamayena niṣṭhā-mārga-lakṣaṇatvād aparigraha-bhāvanā. (その修習をあらゆる形相についての智慧などの区分によって、「あらゆる現象を修習しない」云々と説く。そのうちあらゆる形相についての智慧によってあらゆる現観の生じないことが摂合されるから「あらゆる現象を修習しない」のである。実践道についての智慧によって執著なしにあらゆる実践道を修学するから「愛著のないことを修習する」のである。あらゆる事物についての智慧によって残らない事物が摂合されるから「無限のものを修習する」のである。あらゆる形相についての完全な理解は向上道を自体とするから「無なるものを修習する」のである。頂点に達した現観は究竟道を特質とするから、「支援なきことを修習する」のである。)

<8. 1>

1 Am78,16: nirvedha-bhāgīya-catustāye vakṣyamāna-darśana-mārgē bhāvanā-mārgē ca; P289,3,4; D114,b,2: nges par 'byed pa'i cha dang mthun pa bzhi dang/ mthong ba'i lam dang bsgom pa'i lam 'chad par 'gyur ba la. サンスクリットに従えば、「後述される」は「見道」のみを修飾する。

< 8. 2 >

1 チベット訳に従って「独自の」(ma 'dres pa)を補う。

2 チベット訳に従って「すら」を補う。

3 Am79,30: lakṣaṇīyaḥ; P289,5,7; D115,b,5: shes par bya'o. 今、サンスクリットに従った。

4 厳密にいえば第十六刹那は修道とみなされる。[俱舍 第23卷 9裏 -13裏] [AKBh 350-353]

5 AS67,1: tatra avasthāyāṃ dharma-kṣānti-jñānaiḥ grāhyāvabodhaḥ/ anvaya-kṣānti-jñānair grāhakāvabodhaḥ; ASBh77,12: tatra dharma-jñāna-pakṣasya mārgasya tathatā viśayaḥ/ anvaya-jñāna-pakṣasya samyag-jñānam.

6 Am80,5: kim-ākāraḥ kṣaṇa-lakṣaṇam; P290,1,2; D115,b,7: skad cig ma'i rnam pa ci 'dra ba zhig mtshan nyid yin. サンスクリット、チベット訳ともに混乱があるが、「kim-ākāraḥ」を「kim-ākāram」に変えて読んだ。

7 Am80,20: dhyāna-rūpya-samāpatty-ādi; P290,1,7; D116,a,5: bsam gtan dang/ gzugs med pa'i snyoms par 'jug pa la sogs par. 今、チベ

ット訳に従う。

8 Am80,22: apagata-kuśalatvena; P290,1,8; D116,a,5: mi dge ba dang bral ba nyid kyis. 今、チベット訳に従う。

9 Am81,1: -rāgādi-; P290,2,5; D116,b,2: grong khyer la sogs pa'i. 今、チベット訳に従う。

10 例えば『撰大乘論』は唯識性を悟入し、歡喜地に入ることを菩薩の見道とみなす。

11 [集論 683a] [AS 67] [雜集論 735b] [ASBh 77]は、一つの認識対象に対して智慧が生じて究竟するまでを一刹那と規定している。

12 出典未詳。チベットの註釈家のうちプトンは、学者一般の道理 (LN290b1: mkhas pa'i gzhung lugs las) とみなすが、タルマリンチェンはダルマキールティの道理と考える (NNG256a4: grub pa brnyes pa'i mal 'byor pa shing rta chen po slob dpon chos kyi grags pa'i lugs las)。しかしダルマキールティは限定者と被限定者が同時に把握されると主張しており、限定者をまず把握してから被限定者を理解するという説を退けている (cf. [戸崎 1974: 165-167; 1979: 320-327, 401-410; 1984: 172-174])。またハリバドラ自身は第I章<3. 2. 5. 2>においてダルマキールティの教義に基づいて論を展開しているが、その所論とこの考え方は矛盾すると思われる。第I章<3. 2. 5. 2>における「法」と「有法」が、それぞれ「限定者」と「被限定者」に対応していると考えられるからである。すなわち法と有法の区別は概念的なものに過ぎず、対象の違いはないから、一方が知られれば他方は必然的に認識される。

従って法（＝限定者）の把握は必ずしも有法（＝被限定者）の理解の前提条件ではない。

13 『現観莊嚴論』 IV .54cd は『俱舍論』 VI .33cd と同文である。

AK355,11: mṛdu-madhyādhimātrāṇām punar mṛdv-ādi-bhedataḥ//VI .33cd

14 Cf. MSABh5,6: yo mahāyāne bodhisattvānām kleśa uktāḥ/ vikalpa-kleśa hi bodhisattvaḥ.

15 Cf. Ak355,18: audarīkaṃ ca tamaḥ sūkṣmenālokena hanyate sūkṣmaṃ cādhimātreṇety eṣa drṣṭānta-yogaḥ. [俱舍 第23卷 16裏]

16 Am82,8: vikalpa-pratipakṣayor bhedāt; P290,4,5; D117,b,1: rnam par rtog pai gnyen po'i dbye ba las. チベット訳によれば「概念知の対症療法の区分ゆえに」であるが、サンスクリットは両数語尾を取っているので、従わなかった。

17 Cf. Wo410,9: mṛdu-mṛdv-ādiko mārgaḥ śuddhir navasu bhūmiṣu/ adhimātrādhimātrāder malasya pratipakṣataḥ//III .30

18 Wo409,25: kāma-dhātv-ādi-nava-bhūmiko bhāvanā-mārgo grāhyaḥ; P283,4,5: 'dod pa'i khams dang/ bsam gtan dang/ gzugs med pa'i snyoms par 'jug pa dag ste. [天野 1987: 47]

19 『大註』はヴァスバンドゥよりの引用であることを明示する (cf. [AKBh 355,12-22] [俱舍 第23卷 16])。

20 vastrānulagna-sūkṣma-malāpakarṣaṇe rajaka-mahā-yatnodāharaṇena ([天野 1987: 47]) cf. Wo411,14: sūkṣma-malāpakarṣaṇe rajaka-mahā-yatnodāharaṇena.

- 21 ASP709,24: *adhilāpā ete subhūte tathāgatenākhyātā abhilapitā aprameyam[sic.] iti vā asaṃkhyeyam[sic.] iti vā akṣayam[sic.] iti vā.....* なお『二万五千頌般若経』については本論文付録・対照表を参照。
- 22 チベット訳は「常に」を欠く。
- 23 ダルマキールティシュリーは "ekasminn arthe" を「同一の対象」と解釈し、具体的には第53偈で示されたような「洞察へ導く段階」などを指示しているものとみなす。DA32,2,7: *don gcig tu ste don gyis dbye ba gzhan la bltos pa med pas nges par 'byed pa'i yan lag la soggs pa'i yul gcig pa ni don gcig pa yin la.* (「同一の対象に」である。すなわち、内容による区別は、他のことがらに依存しないから、洞察へ導く段階など、同一の対境が「同一の対象」である。
- 24 『小註』サンスクリットは混乱が多いので、ここでは『大註』を参照しつつチベット訳に従った。
- 25 Am82,25: *dharmā-dhātu-rūpasya*; P290,5,4; D117,b,7: *chos nyid kyi rang gi ngo bor.* 今、サンスクリットに従う。
- 26 チベット訳は「特質」の語を欠く。
- 27 発心 (*cittotpāda*) の定義である。[谷口 1986c]、第I章<1. 1>参照。
- 28 Am83,5: *ayoga eva khyāṇa iti*; P291,1,3; D118,a,5: *sbyor ba med pa nyid sbyor ba yin pa'i phyir.* 今、チベット訳に従う。
- 29 第IV章<2. 2>で提示された2)に相当すると思われる。
- 30 Am83,11: *citta-bahutvena.* 字義通りには「心の多さによって」とな

る。同様な表現については第 I 章 < 7 . 2 . 3 . 2 > 解説を参照。

- 31 出典未詳。プトンは "rgyan 'grel" (『大乘莊嚴經論』ヴァスバンドウ註?) よりの引用というが (LN254b5)、タルマリンチェンは経 (mdo) よりの引用とみなす (NNG260b1)。なおこの一節はシャーンタラクシタの『中觀莊嚴論自註』*Madhyamakālamkāra-vṛtti* にも、聖典 (lung) からのものとして引用されている ([一郷 1985: 146] [MA 132,11-12])。
- 32 Am83,15: paramparam asaṃbandhād; P291,1,7; D118,b,1: phan tshun 'brel pa med pa'i phyir. 今、チベット訳に従った。
- 33 ダルマキールティ、瑜伽行派、大衆部は一刹那に複数の心が起こり得ることを認めていた ([一郷 1985: 198 注(22)])。
- 34 Am83,18: sva-kāraṇa-paramparā-dvāreṇa; P291,2,1; D118,b,2: rang gi rgyus phan tshun gyi sgo nas. 今、サンスクリットに従った。
- 35 チベット訳は「関係」(bhava) の語を欠く。
- 36 シャーンタラクシタによる世俗の定義の一つである。MA202: ma brtags gcig pu nyams dga' zhing// skye dang 'jig pa'i chos can pa// don byed pa dag nus rnams kyi// rang bzhin kun rdzob pa yin rtogs//64
- 37 発心 (cittotpāda) の定義である。[谷口 1986c]、第 I 章 < 1 . 1 > 参照。
- 38 サンスクリットは「刹那」の語を欠く。
- 39 サンスクリットは「特質とともに説明し終えた」の語を欠く。

< 9 >

1 刹那滅論には、消滅性に基づく論証を行なう古刹那滅論と、存在性に基づく論証を行なう新刹那滅論の二種類が知られており（〔御牧 1973; 1984: 224-225〕〔Mimaki 1976: 31-35〕）、ここでは前者の立場が取られている。

2 AK192,5: karma-jaṃ loka-vaicitryam/IV. 1a

3 VMS(V)9,26: middhenopahataṃ cittaṃ svapne tenāsamaṃ phalam//18cd

< 11 >

1 チベット訳に従って「現象」を補った。

2 Am85,29: -para-kārya-; P291,5,8; D120,a,6: gzhan gyi don. 今、チベット訳に従った。

付録 文献

『現觀莊嚴論』『二万五千頌般若經』対照表

凡例

- 1、本対照表は、本論文第二部の和訳と対応する部分、すなわち『現觀莊嚴論』第I章と第IV章に対して施される。
- 2、< 1 . 2 >等の番号は、和訳の番号と一致する。
- 3、項目名は、第I章の場合は PVP、第IV章の場合は T に挙げられる名目に基づいて、別出した。
- 4、---は、対応する内容がその経典に欠けていることを示す。空欄は、その経典の内容が『現觀莊嚴論』の項目に従って分類できないことを示す。

第 I 章 項目名

〈1.2〉 発心の対象

- 1 菩提略説
- 2 菩提詳説
- 3 利他略説
- 4 利他詳説

〈1.3〉 発心の区分

- 1 大地
- 2 純金
- 3 新月
- 4 火
- 5 大蔵
- 6 宝山
- 7 大海
- 8 金剛
- 9 山
- 10 薬草
- 11 友人
- 12 如意珠
- 13 日
- 14 歌謡
- 15 王
- 16 宝庫
- 17 大道
- 18 乗物
- 19 泉水
- 20 美声
- 21 河流

22 大雲

〈2.2.1〉 行についての教説

〈2.2.2〉 四諦についての教説

1 苦諦

2 集諦

3 滅諦

4 道諦

〈2.2.3〉 三宝についての教説

1 仏宝

2 法宝

3 僧宝

〈2.4〉 僧宝についての補足的説明

1 第八聖者

2 隨信

3 隨法

(預流)

4 信解

5 見至

6 一來

7 不還

8 人家家

9 天家家

10 一間

11 中般

12 生般

13 有行般

14 無行般

15 往色究竟天

16 全超

17 半超

18 遍没

19 色無貪

20 現法般

21 身證

22 阿羅漢向

23 独覺

24 果

〈2.2.4〉 無執著についての教説

〈2.2.5〉 倦怠しないことについての教説

〈2.2.6〉 道の撰取についての教説

〈2.2.7〉 五種の眼についての教説

〈2.2.8〉 六種の神通についての教説

〈2.2.9〉 見道についての教説

0 概観

1 苦法智忍

2 苦法智

3 苦類智忍

4 苦類智

5 集法智忍

6 集法智

7 集類智忍

8 集類智

9 滅法智忍

10 滅法智

11 滅類智忍

12 滅類智

13 道法智忍

14 道法智

15 道類智忍

16 道類智

〈2.2.10〉 修道についての教説

〈3.2.1〉 暖かみの対象と形相

1 苦諦

2 集諦

3 滅諦

4 道諦

5 因

6 中級

7 上級

〈3.2.2〉 頂きの対象と形相

1 初級

2 中級

3 上級

〈3.2.3〉 認可の対象と形相

1 初級

2 中級

3 上級

〈3.2.4〉 世間的な最高法の対象と形相

1 初級

2 中級

3 上級

〈3.3.1〉 分別の対象

1 分別総説

2 第一客體分別

3 第二客體分別

4 第一主体分別

5 第二主体分別

〈3.4〉 支援

- 1 方便の熟練
- 2 宗教的善友

〈4〉 種姓

〈4.1〉 種姓の区分

- 1 暖かみ
- 2 頂き
- 3 認可
- 4 最高法
- 5 見道
- 6 修道
- 7 対症療法
- 8 内なる敵
- 9 対症療法と内なる敵の分別の放棄

- 10 般若と悲愍
- 11 独特の功德
- 12 利他の次第
- 13 自然な知恵

〈5〉 行の対象

- 1 対象総説
- 2 世間的な善
- 3 世間的な悪
- 4 中性
- 5 世間的な善
- 6 出世間の善
- 7 有漏出
- 8 無漏出
- 9 有為
- 10 無為

- 11 共通
- 12 独特
- 13 対象のまとめ
- 〈6〉 行の目標
 - 1 一切衆生最高
 - 2 放棄
 - 3 證得
- 〈7.1〉 行の総説
 - 〈7.2.1〉 鎧行
 - 1 布施波羅蜜
 - 2 持戒波羅蜜
 - 3 忍辱波羅蜜
 - 4 精進波羅蜜
 - 5 禪定波羅蜜
 - 6 般若波羅蜜
 - 7 方便の熟練中の般若波羅蜜
 - 8 方便の熟練
 - 9 補助
 - 〈7.2.2〉 前進行
 - 1 四禪四無色定
 - 2 六波羅蜜
 - 3 聖道
 - 4 四無量
 - 5 不可得
 - 6 三輪清淨
 - 7 目標
 - 8 神通
 - 9 あらゆる形相についての智慧
 - 10 悲愍

- 11 布施
- 12 持戒
- 13 忍辱
- 14 精進
- 15 禪定
- 16 般若
- 17 止心
- 18 觀察知
- 19 兼修
- 20 方便の熟練
- 21 智慧
- 22 福德
- 23 道
- 24 陀羅尼
- 25 地

〈7.2.3.4〉 対症療法資糧

- 1 見道第一客體分別
- 2 見道第二客體分別
- 3 見道第一主體分別
- 4 見道第二主體分別
- 5 修道第一客體分別
- 6 修道第二客體分別
- 7 修道第一主體分別
- 8 修道第二主體分別

〈7.2.4〉 出陣行

- 1 最高性
- 2 放棄
- 3 證得
- 4 同一性

- 5 衆生利益
- 6 自然
- 7 無限
- 8 得
- 9 所得の否定
- 10 能得の否定
- 11 所得と能得の関係の否定
- 12 あらゆる形相についての智慧
- 13 世間的布施¹
- 14 出世間の布施
- 15 世間的な般若
- 16 世間的な般若
- 17 出世間の般若¹
- 18 道

注1 13.世間的布施から17.出世間の般若までは、PVPの編者である Dutt が本文の一部を項目名として誤読したことによるもので、本来『現観莊嚴論』と無関係である。

第IV章項目名

- 〈1.2.1〉 あらゆる事物についての智慧の形相
- 〈1.2.2〉 実践道の形相についての智慧の形相
- 〈1.2.3.1〉 あらゆる事物についての智慧の道に基づく形相
- 〈1.2.3.2〉 実践道の形相についての智慧に基づく形相
- 〈1.2.3.3〉 あらゆる形相についての智慧に基づく形相
- 〈2.1〉 四種の加行者
- 〈2.2〉 加行
 - 1 色などに止住しない加行
 - 2 加行しない加行
 - 3 深遠なものの加行
 - 4 奥深いものの加行
 - 5 無量なものの加行
 - 3' 深遠なものの加行の別のあり方・小
 - 4' 奥深いものの加行の別のあり方・中
 - 5' 無量なものの加行の別のあり方・大
 - 6 刻苦して長期を経てから、完全な理解を悟るための加行
 - 7 成仏の保証を得るための加行
 - 8 不退転のための加行
 - 9 出離するための加行
 - 10 無碍のための加行
 - 11 真に完全な理解を悟るための加行
 - 12 迅速に完全な理解を悟るための加行
 - 13 利他のための加行
 - 14 増加がなく減少がないための加行
 - 15 法と非法などとして了得しないための加行
 - 16 不可思議なものであるという形相の想念を止滅するための加行
 - 17 識別しないための加行

18 貴重な宝を与えるための加行

19 清浄であるための加行

20 期限のための加行

〈3〉 功德

1 魔の力を打ち負かす功德

2 仏に顧慮され面識を持たれる功德

3 仏に現に見守られる功德

4 正等覚に近付いた功德

5 甚大な利益などの功德

6 場所を判別する功德

7 漏出のないあらゆる徳を完成する功德

8 [布教者である功德]

9 [打ち砕かれない功德]

10 [独特の善根を生ずる功德]

11 誓願を如実に実現する功德

12 広大な果を取得する功德

13 衆生の利益を行ずる功德

14 般若波羅蜜を得ず具足していないこととは逆に、具足を得る功德

〈4〉 障壁

1 刻苦して得ること

2 閃きがあまりに早いこと

3 身体的無作法3種

4 精神的無作法3種

5 正統でない仕方によってなされた読誦など

6 背反する動機を取得すること

7 因から退失すること

8 妙楽のものを享楽することから退失すること

9 最高乗から退失すること

10 目標から退失すること

- 11 因と果の関係から退失すること
- 12 無上なるものから退失すること
- 13 多種類の境界を妄想する閃きが生ずること
- 14 書写に執著すること
- 15 無に執著すること
- 16 書かれた文字を般若波羅蜜と執著すること
- 17 般若波羅蜜の文字の無に執著すること
- 18 国土などを思惟すること
- 19 利得と名誉と讃辭を享樂すること
- 20 非道によって方便の熟練を求めること
- 21 欲求しており怠慢であることによる退失
- 22 欲求する土地が異なることによる退失
- 23 利得と名誉と欲が強いことと、少欲であることによる不完全性
- 24 清貧生活の徳を有しており有していないことによる不完全性
- 25 善と悪法による不完全性
- 26 喜捨と吝嗇を行なうことによる不完全性
- 27 喜捨を行ない受理しないことによる不完全性
- 28 簡略な説明によって理解し広範な説明によって理解することによる不完全性
- 29 経典などの法に通達し通達していないことによる不完全性
- 30 六波羅蜜を具足し具足していないことによる不完全性
- 31 方便に熟練し方便に熟練していないことによる不完全性
- 32 陀羅尼を得、陀羅尼を得ていないことによる不完全性
- 33 書写を望み書写を望まないことによる不完全性
- 34 愛欲などと離れ、離れていないことによる不完全性
- 35 悪しき生まれへ行くことに背反すること
- 36 良い生まれへ行くことを喜悅すること
- 37 孤独と交際を歎喜することによる不完全性
- 38 従順であらんと欲することと機会を与えないことによる不完全性

- 39 財物をいささか望みそれを布施したがることによる不完全性
- 40 生命の危険のあるところへ行くことと行かないことによる不完全性
- 41 飢饉の起こる方角へ行くことと行かないことによる不完全性
- 42 盗賊などの理由によって行くことと行かないことによる不完全性
- 43 家庭に会いに行くことによる不完全性
- 44 魔が離脱を試みること
- 45 模造をもたらすこと
- 46 如実でない境界などを喜ばすこと
- 47? 閻浮提の大宝の例えによって偉大な力を示すこと
- <5.2.1> あらゆる事物についての智慧の加行の認識
 - 1 如来の出現についての認識
 - 2 世間が不滅であることについての認識
 - 3 衆生のあらゆる心の働きについての認識
 - 4&5 心の集中と逸脱についての認識
 - 6 心が無尽であるという形相についての認識
 - 7&8 貪欲を伴うものなどについての認識
 - 9 広大なる心についての認識
 - 10 巨大なる心についての認識
 - 11 無量なる心についての認識
 - 12 示し得ない心についての認識
 - 13 見えない心についての認識
 - 14 能動的な心などについての認識
 - 15 真如という形相としての認識
 - 16 正等覚者が真如を證得し、それを最高に正しく宣説し、考察すること
- <5.2.1.2> 実践道についての智慧の加行の認識
 - 1-3 空と無表象なるものと願望しないものについての認識
 - 4-11 生じたり滅したりしないことなどについての認識
 - 12 法性を取り払うことがないことについての認識
 - 13 形成し[ない]ことについての認識

14 非概念知についての認識

15 区分についての認識

16 特質がないものについての認識

〈5.2.1.3〉あらゆる形相についての智慧の加行の認識

1 自分の法に依って生活することについての認識

2-5 恭敬することなどについての認識

6 作られないものであることについての認識

7 遍在していることについての認識

8 見えない対象を示すことについての認識

9-12 空の形相として叙述なさり、知らせなさり、示しなさることについての認識

13&14 不可思議であり、寂静であることについての認識

15&16 世間と想念が止滅していることについての認識

〈5.2.2.2〉優秀性

1-4 不可思議などの苦諦の四刹那

5 一切の聖者を包摂しているという優秀性、集諦の第一刹那

6 智者によって受領されることという優秀性、集諦の第二刹那

7 独特であるという優秀性、集諦の第三刹那

8 神通が迅速であるという優秀性、集諦の第四刹那

9 欠けても満ちてもいないことという優秀性、滅諦の第一刹那

10 真摯に実践することという優秀性、滅諦の第二刹那

11 成就の優秀性、滅諦の第三刹那

12 対象の優秀性、滅諦の第四刹那

13 依り所の優秀性、道諦の第一刹那

14 不備がないという優秀性、道諦の第二刹那

15 支援の優秀性、道諦の第三刹那

16 味わわないことという優秀性、道諦の第四刹那

〈5.2.3〉作用

1 利益という作用

- 2 安楽という作用
- 3 守護という作用
- 4 帰依対象という作用
- 5 休息所という作用
- 6 最終的なよるべという作用
- 7 島という作用
- 8 引率者という作用
- 9 自然であるという作用
- 10 三乗によって出離という果を直證しないことという作用
- 11 依り所という作用

〈5.2.4〉 自性

- 1 煩悩から離脱した自性
- 2 その標識〔から離脱した〕自性
- 3 その表象から離脱した自性
- 4 内なる的と対症療法から離脱した自性
- 5 難行という自性
- 6 絶対的なものという自性
- 7 目標という自性
- 8 了得できないものという自性
- 9 執著しないという自性
- 10 対象という自性
- 11 一切の世間と不順であるという自性
- 12 無碍であるという自性
- 13 足場がないという自性
- 14 行くことがないという自性
- 15 生ずることがないという自性
- 16 真如を了得しないという自性

〈6.1〉 解脱へ導く段階についての一般的説明

〈6.2〉 解脱へ導く段階についての個別的説明

- 1 信念を本質とする解脱へ導く段階
- 2 精進を本質とする解脱へ導く段階
- 3 注意を本質とする解脱へ導く段階
- 4 三昧を本質とする解脱へ導く段階
- 5 般若を本質とする解脱へ導く段階
- 6,1 解脱へ導く段階、上級
- 6,2 解脱へ導く段階、中級
- 6,3 解脱へ導く段階、下級
- 〈7〉 洞察へ導く段階
 - a1 暖かみ、初級
 - a2 暖かみ、中級
 - a3 暖かみ、上級
 - b1 頂き、初級
 - b2 頂き、中級
 - b3 頂き、上級
 - c1 認可、初級
 - c2 認可、中級
 - c3 認可、上級
 - d1 最高法、初級
 - d2 最高法、中級
 - d3 最高法、上級
- 〈8.1〉 不退転の衆徒
 - 〈8.2.1.2〉 洞察へ導く段階における不退転の特質
 - 1 洞察へ導く段階に住する不退転の第1の標識
 - 2 洞察へ導く段階に住する不退転の第2の標識
 - 3 洞察へ導く段階に住する不退転の第3の標識
 - 4 洞察へ導く段階に住する不退転の第4の標識
 - 5 洞察へ導く段階に住する不退転の第5の標識
 - 6 洞察へ導く段階に住する不退転の第6の標識

- 7 洞察へ導く段階に住する不退転の第7の標識
- 8 洞察へ導く段階に住する不退転の第8の標識
- 9 洞察へ導く段階に住する不退転の第9の標識
- 10 洞察へ導く段階に住する不退転の第10の標識
- 11 洞察へ導く段階に住する不退転の第11の標識
- 12 洞察へ導く段階に住する不退転の第12の標識
- 13 洞察へ導く段階に住する不退転の第13の標識
- 14 洞察へ導く段階に住する不退転の第14の標識
- 15 洞察へ導く段階に住する不退転の第15の標識
- 16 洞察へ導く段階に住する不退転の第16の標識
- 17 頂きに属する、洞察へ導く段階に住する不退転の第17の標識
- 18 洞察へ導く段階に住する不退転の第18の標識
- 19 認可に属する、洞察へ導く段階に住する不退転の第19の標識
- 20 最高法に属する、洞察へ導く段階に住する不退転の第20の標識

〈8.2.2.2〉 見道における不退転の特質

- 1 苦諦に対する法についての認可
- 2 苦諦に対する法についての知識
- 3 苦諦に対する後続的な認可
- 4 苦諦に対する後続的な知識
- 5 集諦に対する法についての認可
- 6 集諦に対する法についての知識
- 7 集諦に対する後続的な認可
- 8 集諦に対する後続的な知識
- 9 滅諦に対する法についての認可
- 10 滅諦に対する法についての知識
- 11 滅諦に対する後続的な認可
- 12 滅諦に対する後続的な知識
- 13 道諦に対する法についての認可
- 14 道諦に対する法についての知識

15 道諦に対する後続的な認可

16 道諦に対する後続的な知識

〈8.2.3.1〉

A1 深遠な修道

A2 修道の深遠性

A3 修道の、肯定的誤謬と比定的誤謬の極端よりの解脱

B1 修道の定義

B2 洞察へ導く段階などの修道

B3 三種類の利益

〈8.2.3.2〉 修道の細分

1 強強の内なる敵

2 下下級の対症療法

3 中強の内なる敵

4 中下級の対症療法

5 弱強の内なる敵

6 上下級の対症療法

7 強中の内なる敵

8 下中級の対症療法

9 中中の内なる敵

10 中中級の対症療法

11 弱中の内なる敵

12 上中級の対症療法

13 強弱の内なる敵

14 下上級の対症療法

15 中弱の内なる敵

16 中上級の対症療法

17&18 内容的に含意されている弱弱の内なる敵に対する、上上級の対症療法

〈8.2.3.3〉 修道の細分についての論議 1

- 1 「無数である」などの説示
- 2 「無数である」などの説示に対する反論
- 3 反論を承認した上での答論
- 〈8.2.3.4〉 修道の細分についての論議 2
 - 1 表現を離れたものには減少も増加もあり得ないという反論
 - 2 答論
 - 3 菩提の特質
- 〈8.2.3.5〉 修道の細分についての論議 3
 - 1 心が接触し得ないという反論
 - 2 燈明の譬喩による答論
- 〈8.2.3.6〉 修道の対象としての8種の法性
 - 1 深遠な生起
 - 2 深遠な止滅
 - 3 深遠な真如
 - 4 深遠な認識対象
 - 5 深遠な認識
 - 6 深遠な行為
 - 7 深遠な不二
 - 8 深遠な方便の熟練
- 〈9〉 輪廻と涅槃の同一性
 - A 生存と寂滅との非識別
 - B 批判の連続
- 〈10〉 仏国土の無上なる浄化
- 〈11〉 方便の熟練の加行
 - 1 障害となる物事よりの超越
 - 2 安住せずに止住する方便の熟練
 - 3 誓願の勢力によって導き出された方便の熟練
 - 4 独特の方便の熟練
 - 5 愛著しない方便の熟練

- 6 了得しない方便の熟練
- 7 表象がない方便の熟練
- 8 願求がない方便の熟練
- 9 不退転の標識の方便の熟練
- 10 無量なる対象に対する方便の熟練

第 I 章对照表

PVP	T	K	放光	光譜	大品	二会
<1.2>	(Vol.88)	(Vol.18)				
1 17,22	227,5,8	51,3,2	2b26	149a10	218c17	7a22
2 18,4	228,1,2	51,3,3	2b29	149a11	218c19	7a27
3 18,16	228,1,8	---	---	---	---	---
4 18,20	228,2,2	---	---	---	---	---
<1.3>						
1 19,4	228,2,4	---	---	---	---	---
2 19,7	228,2,5	---	---	---	---	---
3 19,12	228,2,8	51,4,1	2c7	149a20	219a4	7b14
4 21,6	228,5,1	51,5,7	2c21	149b10	219a19	7c21
5 21,17	228,5,7	---	3a2	149b23	219b4	8a4
6 22,1	229,1,1	---	3a4	149b24	219b6	8a6
7 22,3	229,1,3	---	---	---	---	---
8 22,5	229,1,4	---	---	---	---	---
9 22,7	229,1,6	---	---	---	---	---
10 22,9	229,1,8	---	---	---	---	---
11 22,11	229,2,1	52,2,2	3a6	149c4	219b12	8a13
12 23,5	229,3,1	52,3,2	3a10	149c8	219b19	8b1
13 23,19	229,4,1	52,4,5	3a13	149c10	219b23	8b7
14 24,10	229,4,7	53,2,2	3a27	149c26	219c8	8c2
15 27,4	230,3,6	53,3,2	3b6	150a7	219c16	8c16
16 28,11	230,5,4	53,4,7	3b21	150a28	220a2	9a5
17 29,4	231,1,8	54,3,7	3c12	150c2	220b1	9b23
18 29,9	231,2,4	54,4,7	3c16	150c6	220b6	9b29
19 31,4	231,5,5	55,2,2	4a3	150c27	220b24	9c25

	PVP	T	K	放光	光譜	大品	二会
20	31,15	232,3,6	55,3,1	4a9	151a8	220c5	10a5
21	32,4	233,2,5	55,4,3	4a13	151a16	220c10	10a11
22	32,18	235,2,5	55,5,3	4a21	151a28	220c19	10a29
	<2.2.1>						
	37,14	236,5,8	57,4,2	4c17	152a15	221b24	11b25
	<2.2.2>						
1	43,14	240,2,1	60,2,1	5c12	153b3	222c8	13b23
2	44,20	240,4,8	60,3,8	5c27	153b23	223a4	14a2
3	46,10	241,2,1	60,5,5	6a6	153c12	223a14	14a14
4	47,8	241,3,7	61,2,2	6a13	153c24	223a25	14a29
	<2.2.3>						
1	49,11	242,5,1	62,2,4	6b4	154b4	223b29	14c23
2	51,10	243,4,1	63,1,2	6b20	154c1	223c20	15c8
3	60,4	247,2,2	65,2,6	7b15	156a6	225a25	18a6
	<2.4>						
1	60,4	247,2,2	65,2,6	7b15	156a6	225a25	18a6
2	60,11	247,2,5	65,3,1			225b8	
3	61,4	247,3,3	---			225b1	
(---	247,3,7	---			---)
4	61,13	247,4,1	65,4,3			225b15	
5	62,6	247,4,6	65,4,7			225b21	
6	62,14	247,5,3	65,5,5			225c13	
7	63,7	247,5,8	66,3,2			225c21	
8	64,7	248,1,8	---			---	
9	64,12	248,2,3	---			---	
10	65,9	248,3,2	---			---	
11	65,13	248,3,4	66,4,3			226a2	
12	66,4	248,3,8	---			226a8	

	PVP	T	K	放光	光讚	大品	二会
13	66,8	248,4,2	---			226b2	
14	66,15	248,4,6	66,4,7				
15	67,6	248,5,2	---				
16	67,13	248,5,6	---				
17	68,1	248,5,8	---				
18	68,4	249,1,2	---				
19	69,4	249,2,4	---				
20	69,10	249,2,7	---				
21	70,14	249,4,3	66,5,6				
22	71,8	249,5,5	---				
23	71,11	249,5,7	---				
24	71,15	250,1,1	67,1,8				
	<2.2.4>						
	73,1	250,2,4	68,3,2	8b24	157c17	226c14	20b18
	<2.2.5>						
	74,19	250,4,8	69,1,1	8c11	158a16	227a13	20c23
	<2.2.6>						
	76,4	251,1,7	69,3,2	8c23	158b7	227a26	21a19
	<2.2.7>						
	77,1	251,3,4	69,5,4	9a3	158b19	227b8	21b12
	<2.2.8>						
	83,7	253,3,8	71,3,1	9c4	159b23	228b1	22c18
	<2.2.9>						
0	98,6	257,5,7	75,3,7	11a23	162a26	230b22	28c26
1	99,6	258,2,1?	75,4,7	11b4	162b9	230c4	29a18
2	99,16	258,2,7	75,5,6	11b10	162b17	230c9	29a27
3	102,5	259,4,7	76,5,5	11c7	163a14	231a21	30a17
4	105,1	264,4,8	79,1,8	11c22	163a24	231b4	32a26

	PVP	T	K	放光	光譜	大品	二会
5	105,12	264,5,7	79,3,3	---	163b7	231b12	32b26
6	105,16	265,1,2	79,3,5	---	163b11	231b15	32c3
7	106,8	265,2,7	79,5,2	---	163b18	231b21	32c8
8	107,6	265,4,1	80,1,4	11a7	163b29	231b29	32c15
9	107,10	265,4,3	80,1,5	12a9	163c5	231c3	32c19
10	107,12	265,4,4	80,1,6	12a10	163c5	231c4	32c19
11	108,1	265,4,8	80,2,5	12a16	163c15	231c10	32c29
12	109,16	267,1,8	81,5,1	12a26	164a8	231c20	33c3
13	113,8	269,3,1	84,4,6	12a29	164a26	232a5	34b19
14	115,1	270,4,8	86,3,7	12b26	164c10	232b15	42b9
15	115,4	270,5,2	86,3,8	12b29	164c12	232b16	42b12
16	115,8	271,1,2	86,4,6	12c1	164c17	232b21	42b29
〈2.2.10〉							
	115,10	271,1,4	86,4,7	12c3	164c18	232b22	42c1
〈3.2.1〉							
1	119,11	272,5,3	88,5,5	13a22	165c21	233b3	43c29
2	119,19	272,5,8	89,1,6	13a27	166a9	233b14	44a15
3	120,5	273,1,5	89,1,7	13a28	166a11	233b14	44a19
4	121,5	273,4,6	89,4,4	13b21	166b21	233c15	44c4
5	123,6	274,3,7	90,5,1	13c17	166c22	234a15	45a19
6	123,14	274,4,5	90,5,6	13c24	167a2	234a23	45b2
7	126,22	276,3,1	92,4,5	14a27	168a26	234c14	46c20
〈3.2.2〉							
1	128,3	276,4,6	93,1,6	14b14	168b17	235a4	47a20
2	133,9	280,4,3	96,5,3	15a5	168c19	236a8	48b2
3	135,14	281,4,4	97,5,8	15a29	170a22	236b11	49a6
〈3.2.3〉							
1	136,14	282,2,2	98,4,2	15b14	170b28	236c6	49b3

	PVP	T	K	放光	光譜	大品	二会
2	137,19	282,4,6	99,2,1	15b28	170c26	236c20	49b26
3	138,18	283,1,4	99,3,4	15c19	171a25	237a7	49c15
<3.2.4>							
1	142,1	284,5,4	100,5,8	16a27	172a19	237c11	50c21
2	144,15	285,5,8	102,1,1	16b14	173a12	238a29	51b24
3	145,1	286,1,6	102,1,6	16b18	173a19	238b6	51c2
<3.3.1>							
1	145,21	286,2,7	102,2,7	16b24	173b1	238b21	52a5
2	146,21	287,5,3	102,5,2	16c10	173b15	238c19	52b9
3	149,14	287,5,6	---	---	---	---	---
4	150,3	288,1,8	---	---	---	---	---
5	150,17	288,3,2	103,4,5	17a9	174a10	239c16	53a1
<3.4>							
1	154,15	290,2,8	105,2,1	17b16	175a25	240a13	54a9
2	156,3	291,4,6	106,5,6	17c13	176a4	240c7	55a1
<4>							
	160,15	295,2,6	111,5,3	18b14	178a16	241c11	57b11
<4.1>							
1	160,18	295,3,1	111,5,6	18b16	178b16	241c14	57b14
2	161,1	295,3,5	112,1,1	18b19	178a24	241c19	57b18
3	161,4	295,3,8	112,1,5	18b20	178a28	241c21	57b22
4	161,9	295,5,6	112,3,3	18b21	178b4	241c28	57b23
5	161,16	296,1,6	112,4,2	18b25	178b12	242a5	58a9
6	162,7	296,3,4	113,3,8	18c4	178b28	242a26	58b25
7	163,8	297,1,2	114,1,6	18c12	179a15	242b15	59a6
8	163,10	297,1,3	114,1,7	18c13	179a18	242b17	59a8
9	163,12	297,1,5	114,1,8	18c15	179a21	242b19	59a9
10	163,17	297,2,5	114,2,8	18c18	179b4	242b25	59a19

	PVP	T	K	放光	光讚	大品	二会
11	164,1	297,2,7	114,3,1	---	---	---	---
12	164,3	297,2,8	114,3,2	---	179b6	242b26	59a21
13	164,6	297,3,3	114,3,4	18c20	179b17	242c1	59a23
<5>							
1	164,13	297,3,8	114,3,8	18c24	179b23	242c5	59a27
2	165,3	297,4,4	114,4,5	18c29	179c2	242c11	59b6
3	165,12	297,5,3	114,5,3	19a7	179c13	242c19	59b16
4	166,1	297,5,6	114,5,6	19a9	179c15	242c22	59b22
5	166,5	298,1,1	114,5,8	19a11	179c20	242c26	59b26
6	166,9	298,3,8	115,1,3	19a13	179c22	242c27	59b29
7	168,3	298,3,8	115,3,8	19a16	180a29	243a24	59c12
8	168,6	298,4,2	115,4,2	19a17	180b2	243a26	59c15
9	168,11	298,4,4	115,4,6	19a18	180b6	243a27	59c17
10	168,14	298,4,6	115,4,8	19a20	180b10	243b1	59c21
11	168,18	298,5,1	115,5,2	---	180b14	243b3	59c25
12	168,21	298,5,2	115,5,2	---	180b15	243b5	59c28
13	169,1	298,5,4	115,5,6	19a23	180b18	243b6	60a2
<6>							
1	169,4	298,5,5	115,5,7	19a24	180b21	243b11	60a8
2	172,6	299,5,7	116,5,8	19c2	181b13	244a20	61a13
3	172,23	300,3,1	117,2,8	19c17	181c9	244b7	61b17
<7.1>							
	175,3	301,2,3	118,1,8	20a16	182b15	244c19	62a9
<7.2.1>							
1	176,7	301,4,2	118,4,3	20a28	182c16	245a14	62c12
2	177,6	302,1,3	119,1,3	20b12	183a25	245b8	63a27
3	177,19	302,3,2	119,3,2	20b24	183b19	245b25	63c14
4	178,7	302,5,1	119,5,1	---	183b22	245c12	64b1

	PVP	T	K	放光	光讚	大品	二会
5	178,14	303,2,2	120,2,2	---	183b25	245c29	64c21
6	178,22	303,4,6	120,4,5	---	183b28	246a18	65b7
7	179,8						
8	179,12						
9	179,15	304,2,3	121,2,1	20b26	183c2	246b7	65c20
<7.2.2>							
1	180,1	304,3,4	121,3,3	---	183c16	246b11	66a12
2	180,18	304,5,2	121,5,7	21a2	184a2	246b21	66b1
3	181,13	305,1,7	122,3,1	21a6	184b4	246c25	67a12
4	181,18	305,2,3	122,3,5	---	---	---	---
5	183,1	305,4,8	122,5,5	21a9	184b25	246c28	67a19
6	183,18	306,1,5	123,2,2	---	184c27	147a20	67b25
7	184,5	306,2,4	123,2,8	---	185a10	247b1	67c13
8	184,20	306,4,8	123,5,8	21a17	185b4	247b20	68a6
9	185,10	306,5,6	1214,1,6	21a24	185b13	247b29	68a19
<7.2.3>							
1	185,20	307,1,7	124,2,6	21b2	185b21	247c13	68b13
2	187,1	307,4,8	124,5,4	21b8	185c4	247c23	68c3
3	187,21	308,1,5	125,1,8	21b23	186a6	248a9	68c22
4	188,8	308,2,8	125,3,3	21c6	186a24	248a24	69a10
5	189,1	308,4,2	125,4,2	21c12	186b9	248b4	69b2
6	189,10	308,5,2	125,5,2	21c14	186b21	248b11	69b19
7	189,21	309,1,5	126,1,3	21c19	186c4	248b21	69c7
8	190,5	309,2,7	126,2,4	21c26	186c15	248c1	69c24
9	191,1	310,1,4	126,5,8	22a12	187a24	248c25	70b19
10	192,12	311,2,1	128,1,6	22b4	188a3	249b6	71b16
11	194,3	312,5,1	129,3,3	22c7	188c23	250a2	72c1
12	195,10	313,3,1	130,1,1	23a3	189b2	250b3	73a15

	PVP	T	K	放光	光讀	大品	二会
13	198,11	314,4,2 (Vol.89)	131,1,1	23b15	190a18	251a8	74a12
14	203,22	2,3,2	134,5,2	24c26	193a18	253b19	77c8
15	212,8	6,4,1	139,5,6	26b12	195c17	256a6	81c8
16	214,6	7,2,7	140,4,8	27a14	196b8	256c6	82b21
<7.2.3.4>							
1	225,20	13,3,1	146,4,7	29c2	199a13	259c17	88c26
2	227,4	14,4,4	147,5,3	29c25	199b17	260a11	89c28
3	227,21	15,3,4	148,4,7	30a9	199c8	260b4	90b12
4	228,9	15,5,2	149,1,3	30a16	199c15	260b14	90b26
5	228,19	16,2,2	149,3,1	30a21	199c29	260b24	90c18
6	229,13	16,3,2	152,1,6	30a29	---	260c4	92b9
7	230,14	17,2,7	153,1,1	30b9	200a24	260c14	93a10
8	230,29	17,3,3	153,1,6	30b20	200b6	260c28	93b22
<7.2.4>							
1	231,11	17,5,6	153,4,5	30c17	200c4	261a18	94a3
2	233,8	20,3,4	156,1,7	31b3	201b7	262a3	96b17
3	233,15	20,5,2	156,3,2	31b14	201b23	262a24	96c18
4	234,21	21,3,6	157,1,3	31,c10	201c28	262c6	97b20
5	236,8	22,4,5	158,1,4	32a23	202b14	263b6	98b2
6	239,12	25,3,5	164,5,1	32c17	203b8	264b22	102c25
7	240,4	26,4,6	167,4,7	33a1	203c6	265a12	105b6
8	242,13	27,5,7	169,1,8	33b5	204a16	265c14	109c17
9	244,18	29,1,3	170,3,7	33c18	204c13	267a20	110c14
10	247,21	33,2,4	175,3,8	34b9	205c4	268a23	116a5
11	250,17	35,4,2	178,1,4	34c20	206a29	268c19	119c2
12	256,7	40,4,5	187,3,3	35c25	207c24	270b18	126b25
13	263,18						

	PVP	T	K	放光	光讚	大品	二会
14	264,14						
15	265,1						
16	265,23						
17	266,5						
18	266,14	49,5,6	194,2,2	37b2	209b18	272a29	130c5
End		52,2,7	197,4,3	38a13	210b5	273b3	133c20

第IV章对照表

	T (Vol.89)	K (Vol.18)	放光	大品	二会
<1.2.1>	126,1,7	289,3,5	68a27	311c17	202a13
<1.2.2>	126,5,5	290,1,7	68b24	312a25	202c4
<1.2.3.1>	127,5,3	291,1,6	68c29	312c19	203b14
<1.2.3.2>	128,1,3	291,2,4	69a7	312c29	203b27
<1.2.3.3>	128,3,3	291,3,7	69a17	313b6	204a12
<2.1>	128,4,3	291,4,8	69a26	313b6	204a12
<2.2>					
1	129,5,3	292,5,4	69b29	313c29	204c22
2	130,2,7	293,4,2	69c13	314b1	205a19
3	130,4,3	294,1,7	69c17	314b8	205b18
4	130,4,8	294,2,5	69c19	314b11	205b23
5	130,5,6	294,3,5	69c22	314b15	205b28
3'	131,1,3	294,4,3	69c25	314b17	205c4
4'	131,2,1	295,1,2	69c29	314b23	205c24
5'	131,2,6	295,2,4	70a3	314b29	206a16
6	131,3,4	295,3,5	70a7	314c5	206b7
7	131,4,5	295,4,7	70a16	314c19	206b21
8	132,1,3	296,1,3	70b1	315a8	206c28
9	132.2.1	296,2,1	70b6	315a16	207a10
10	132,3,2	296,3,2	70b15	315a27	207a22
11	132,4,6	296,4,5	70b24	315b7	207b7
12	132,5,6	296,5,7	70c3	315b19	207b24
13	133,1,6	297,1,6	70c13	315b28	207c6
14	133,4,6	297,5,1	71a2	316a8	208a25
15	134,1,7	298,3,2	71a9	316a16	208b26

	T	K	放光	大品	二会
16	134,2,7	298,4,2	71a16	316a25	208c14
17	134,4,3	299,1,5	71a22	316b4	209c7
18	135,2,3	299,5,8	71b10	316b28	211a10
19	135,2,5	300,1,6	71b14	316c5	211b5
20	135,3,2	300,2,3	71b16	316c8	211c6
<3>					
1	135,4,5	300,3,5	71b29	316c25	212a6
2	135,5,6	300,4,8	71c9	317a6	212a21
3	136,1,4	300,5,5	71c13	317a13	212b12
4	136,2,4	301,1,4	71c19	317a19	212b29
5	136,2,5	301,1,6	71c21	317a22	212c4
6	136,3,8	301,2,8	72a2	317b6	212c28
7	137,3,1	302,2,8	72b5	317c20	214b17
8	137,4,5	302,4,2	72b12	317c26	214c3
9		302,4,5?	72b16?	318a2?	214c9
10		302,4,7?	72b19?	318a5?	214c22?
11		302,4,8?	72b21?	318a8?	214c25?
12	138,1,7	303,1,2	72c4	318a16	215a19
13	138,2,1	303,1,5	72c7	318a19	215a23
14	138,3,2	303,2,8	72c15	318a29	215b17
<4>					
1	138,4,5	303,4,2	72c26	318b14	215c8
2	138,5,5	303,5,1	73a4	318b23	215c21
3	139,1,1	303,5,5	72a8	318b27	215c28
4	139,1,3	303,5,8	73a9	318c11?	216a1?
5	139,1,6	304,1,1	73a11	318c15?	216a3?
6	139,2,5	304,1,7	73a15	318c17	216a8
7	139,4,1	304,3,3	73b1	319a10	216b20

	T	K	放光	大品	二会
8	139,5,3	304,4,4	73b9	319a24	216c12
9	139,5,7	304,5,1	73b12	319a28	216c16
10	140,1,4	304,5,4	73b18	319b4	216c22
11	140,1,8	305,5,8	73b23	319b10	216c28
12	140,2,6	305,1,8	73c2	319b18	217a10
13	140,3,4	305,4,2	73c22	319c10	217b4
14	140,5,2	305,5,6	74a3	319c25	217b20
15	141,1,1	306,1,6	74a7	320a1	217c3
16	141,1,2	306,1,7	74a9	320a3	217c5
17	141,1,4	306,2,1	74a12	320a6	217c11
18	141,3,3	306,3,7	74a16	32a13	218a4
19	141,4,1	306,4,7	74a22	320a21	218a15
20	141,4,5	306,5,3	74a25	320a26	218a21
21	141,5,2	307,1,2	74b15	320b16	218b13
22	141,5,4	307,1,4	74b18	320b20	218b20
23	141,5,7	307,1,5	74b20	320b25	218b26
24	142,1,6	307,2,4	74b25	320c4	218c9
25	142,2,5	307,3,3	74b29	320c16	218c21
26	142,3,1	307,3,8	74c4	320c21	219a1
27	142,3,6	307,4,4	74c9	320c26	219a8
28	142,4,2	307,4,6	74c13	321a3	219a16
29	142,4,6	307,5,1	74c17	321a6	219a24
30	142,5,6	307,5,8	74c21	321a12	219b6
31	143,1,2	308,1,4	74c23	321a18	219b14
32	143,1,7	308,1,8	74c26	321a24	219b22
33	143,2,3	308,2,3	74c28	321a29	219b28
34	143,2,8	308,2,7	75a2	321b8	219c9
35	143,3,5	308,3,4	75a5	321b13	219c18

	T	K	放光	大品	二会
36	143,3,8	308,3,8	75a8	321b18	221a7
37	143,4,6	308,4,7	75a15	321c1	221a23
38	143,5,6	308,5,7	75a20	321c6	221b8
39	144,1,3	309,1,3	75a23	321c13	221b15
40	144,1,8	309,1,8	75a27	321c20	221b24
41	144,2,4	309,2,4	75a28	321c26	221c2
42	144,3,4	309,3,3	75b3	322a10	221c17
43	144,4,4	309,4,2	75b7	322a16	221c25
44	144,4,7	309,4,5	75b11	322a20	222a2
45	145,1,4	310,1,2	75b210	322b9	222a24
46	145,2,7	310,2,5	75c3	322b24	222c5
47?	145,5,4	310,5,5	75c16	323b17	225b5
<5.2.1>					
1	147,1,8	312,2,6	76b4	323b17	225b5
2	147,2,6	312,3,3	76b10	323b25	225b26
3	147,3,4	312,4,2	76b18	323c5	225c18
4,5	147,4,6	312,5,8	76b25	323c16	226c19
6	147,5,5	313,1,5	76b27	323c23	227a10
7,8	148,1,1	313,2,3	76c5	323c28	227a27
9	148,3,2	313,4,8	76c13	324a21	227c8
10	148,3,7	313,5,7	76c18	324a19	227c19
11	148,4,5	314,1,5	76c20	324b7	228a4
12	148,5,2	314,2,3	76c24	324b15	228a18
13	148,5,7	314,2,8	76c26	324b19	228a28
14	149,1,4	314,3,5	76c29	324b22	228b10
15	149,3,8	315,1,2	77a8	325a2	229b16
16	149,4,5	315,1,6	77a10	325a7	229b26

<5.2.1.2>

	T	K	放光	大品	二会
1-3	150,3,1	315,5,4	77b12	325b14	230a27
4-11	150,3,5	316,1,1	77b16	325b19	230b5
12	150,4,1	316,1,6	77b19	325b23	230b15
13	150,4,3	316,2,1	77b25	325b28	23024
14	150,5,3	316,2,6	77b26	325c5	230c26
15	150,5,6	316,3,1	77c3	325c11	231a6
16	151,1,7	316,4,2	77c11	325c19	231c7
<5.2.1.3>					
1	151,3,7	317,1,2	77c27	326a6	232b6
2-5	151,4,1	317,1,4	78a1	326a8	232b9
6	151,5,1	317,2,3	78a9	326a17	232b26
7	151,5,2	317,2,5	78a13	326a21	232c1
8	151,5,4	317,2,7	78a15	326a23	232c10
9-12	152,2,7	317,4,7	78b1	326b13	233c11
13&14	152,5,1	318,1,7	78b15	326c4	234b4
15&16	152.5,6	318,3,5	78b18	326c13	234c3
<5.2.2.2>					
1-4	153,1,2	318,4,1	78c3	327a4	235b11
5	154,3,2	320,1,1	79a14	328a6	237b7
6	155,2,3	321,1,2	79b2	328b13	238b19
7	155,2,7	321,1,5	79b18	328b18	238c27
8	155,3,6	321,2,4	79b26	328b27	239a10
9	155,4,3	321,3,2	79c2	328c6	239a21
10	155,5,1	321,3,8	79c8	328c13	239b3
11	156,1,6	321,5,4	79c23	329a1	239b26
12	157.2.4	323,2,1	80b3	329c7	240c18
13	157,5,2	323,4,5	80b18	330a1	241a21
14	158,2,3	324,1,6	80c3	330a20	241c2

	T	K	放光	大品	二会
15	158,5,3	324,4,5	80c22	330b9	241c28
16	160,3,1	326,5,4	81b16	331b9	244a9
<5.2.3>		(Vol.19)			
1	161,2,3	2,1,3	81c10	331c18	245b29
2	161,3,4	2,3,4	81c23	332a5	246a3
3	161,3,7	2,3,7	81c25	332a10	246a8
4	161,4,2	2,4,3	81c29	332a16	246a13
5	161,4,7	2,4,8	82a4	332a22	246a21
6	162,1,4	3,1,6	82a9	332b3	246a26
7	162,4,3	3,5,8	82a23	332b23	246b28
8	163,2,3	4,2,7	82b2	332c5	246c17
9	163,4,4	5,1,3	82b8	332c15	247b14
10	164,2,2	5,3,6	82b14	333a3	248a2
11	165,1,1	6,2,2	82c2	333b12	248c1
<5.2.4>					
1	165,4,4	6,4,7	---	333c26	249c21
2	165,4,7	6,5,2	---	---	---
3	165,4,8	6,5,3	---	---	---
4	165,5,2	6,5,5	82c20	334a3	249c27
5	166,1,1	7,1,2	---	---	250a13
6	166,2,6	7,4,1	---	---	250b1
7	166,3,1	7,4,4	---	---	250b5
8	166,3,7	7,5,2	82c25	334a8?	250b15
9	167,4,1	8,3,8	83a7	334a21	251a1
10	168,1,4	9,1,6	83a19	334b9	251b4
11	170,1,7	11,4,2	83b27	335a8	252a23
12	171,1,6	12,5,2	83c18	335b6	252c8
13	171,4,2	13,2,4	83c25	335b16	253a11

	T	K	放光	大品	二会
14	171,4,7	13,3,3	83c28	335b18	253a27
15	173,2,4	14,3,7	---	336a1	254a22
16	173,3,4	14,5,3	---	336a14	254b14
<6.1>	174,4,3	16,1,2	84c24	336c17	256b20
<6.2>					
1	174,4,6	16,1,4	85a1	336c19	256c4
2	174,5,2	16,1,7	85a2	336c24	256c7
3	175,1,2	16,2,8	85a4	337a1	256c11
4	175,1,4	16,3,1	85a6	337a4	256c15
5	175,3,7	16,5,2	85a17	337a17	257a10
6,1	175,4,4	16,5,7	85a23	337a23	257a23
6,2	175,5,8	17,2,6	85b2	337b5	257b20
6,3	176,1,8	17,3,6	85b11	337b11	257c3
<7>					
a1	177,3,2	18,4,7	85c15	338a4	258c18
a2	177,3,8	18,5,4	---	338a11	259a10
a3	177,4,2	18,5,7	85c18	338a12	259a17
b1	177,4,6	19,1,1	85c19	338a15	259b1
b2	178,1,7	19,3,2	85c23	338b2	259b11
b3	178,2,3	19,3,7	85c25	338b6	259b14
c1	178,5,3	20,1,7	---	338b28	259c24
c2	178,5,6	20,2,2	85c27	338c3	259c26
c3	179,1,6	20,3,1	85c29	338c9	260a10
d1	179,1,8	20,3,4	85c29	338c11	260a13
d2	179,2,3	20,3,7	---	338c14	260a15
d3	179,2,5	20,3,8	---	338c16	260a17
<8.1>	179,4,3	21,1,6	86a13	339a9	260b18
<8.2.1.2>					

	T	K	放光	大品	二会
1	179,5,2	21,1,5	86a21	339a17	260c6
2	180,2,2	21,4,4	86b1	339b2	261a24
3	180,2,6	21,4,8	86b7	339b10	261b6
4	180,3,1	21,5,2	86b9	339b13	261b12
5	180,3,8	22,5,8	86b12	339b21	261b20
6	180,4,7	22,1,8	86b16	339c2	261c3
7	180,5,7	22,2,8	86b21	339c10	261c10
8	181,1,2	22,3,3	86b23	339c13	261c13
9	181,1,5	22,3,5	---	339c16	261c15
10	181,1,6	22,3,7	86b26	339c19	261c16
11	181,2,1	22,4,2	86b27	339c23	261c20
12	181,2,4	22,5,5	86b29	339c26	261c25
13	181,3,1	22,5,2	86c4	340a3	262a6
14	181,3,7	22,5,7	86c9	340a10	262a17
15	181,4,2	23,1,2	86c10	340a13	262a20
16	181,4,5	23,1,4	86c13	340a17	262a23
17	181,5,1	23,1,8	86c17	340a23	262b3
18	182,1,2	23,3,1	86c26	340b5	262b22
19	182,4,1	24,1,3	87a19	340c3	263a4
20	183,3,4	24,5,5	87b24	341a19	263c14
〈8.2.2.2〉					
1	183,4,5	25,1,6	87b29	341a25	264a16
2	184,1,2	25,3,2	87c19	341b14	264b29
3	184,2,5	25,4,7	88a11	341c3	264c27
4	184,3,5	25,5,6	88a14	341c13	265a4
5	184,4,5	16,1,7	88a19	341c24	265a21
6	184,5,7	16,3,4	88b1	342a10	265b22
7	185,1,4	16,4,4	88b5	342a17	265c3

	T	K	放光	大品	二会
8	185,2,4	16,5,3	88b15	342b1	265c20
9	185,3,6	27,1,5	88b24	342b14	266b3
10	185,4,3	27,2,4	88c1	342b20	266b16
11	185,4,4	27,2,5	88c2	342b23	266b18
12	185,4,6	27,2,6	88c4	342b25	266b21
13	185,5,5	27,3,4	88c11	342c6	266c11
14	186,1,8	27,4,8	88c24	342c21	267a12
15	186,4,3	28,2,8	89a12	343a16	267b29
16	186,5,7	28,4,3	89a18	343a25	267c6
〈8.2.3.1〉					
A1	187,4,8	29,4,7	89c9	343c26	268c13
A2	187,5,8	29,5,6	89c14	344a1	269a2
A3	188,3,5	30,2,8	89c18	344a15	269b18
B1	189,1,1	30,5,2	89c28	344a26	269c14
B2	189,1,4	30,5,4	90a1	344b1	269c19
B3	189,1,7	30,5,7	90a5	344b6	269c27
〈8.2.3.2〉					
1	189,3,1	31,1,7	90a11	344b22	270a17
2	189,3,5	31,2,1	90a14	344b26	270a21
3	192,1,1	31,2,4	90a17	344c1	270a26
4	193,1,4	31,2,6	90a21	344c5	270b2
5	193,2,2	31,3,1	90a24	344c9	270b7
6	193,2,5	31,3,2	90a26	344c13	270b12
7	193,3,2	31,3,6	90b1	344c19	270b19
8	193,3,4	31,3,8	90b4	344c22	270b23
9	193,4,1	31,4,4	90b7	344c28	270c3
10	193,4,5	31,4,7	90b10	345a3	270c14
11	193,5,4	31,5,5	90b16	345a10	270c22

	T	K	放光	大品	二会
12	193,5,7	31,5,8	90b20	345a14	270c28
13	194,1,4	32,1,4	90b26	345a21	271a11
14	194,1,7	32,1,6	90c1	345a26	271a17
15	194,2,3	32,2,2	90c4	345b2	271a27
16	194,2,7	32,2,5	90c7	345b7	271b4
17,18	194,3,3	32,3,1	90c11	345b13	271b13
〈8.2.3.3〉					
1	194,3,7	32,3,3	90c15	345b16	271b21
2	194,4,5	32,3,8	90c20	345b24	271c1
3	194,5,4	32,4,5	90c26	345c4	271c14
〈8.2.3.4〉					
4	194,5,8	32,4,7	91a1	345c8	271c22
5	195,2,7	33,1,3	91a18	345c23	272a17
6	195,3,6	33,2,1	---	346a1	272b7
〈8.2.3.5〉					
1	196,1,2	33,4,3	91a24	346a13	272c25
2	196,1,8	33,4,7	91b1	346a19	273a7
〈8.2.3.6〉					
1	196,4,4	34,2,1	91b18	346b12	273b5
2	196,5,2	34,2,6	91b22	346b16	273b13
3	196,5,5	34,3,1	91b25	346b19	273b16
4	196,5,8	34,3,3	91b29	346b24	273b22
5	197,1,2	34,3,5	91c1	346b25	273b27
6	197,1,3	34,3,6	91c3	346b26	273b29
7	197,1,7	34,4,2	91c8	346c5	273c10
8	197,2,3	34,4,5	91c11	346c10	273c21
〈9〉					
A	197,3,7	34,5,7	91c24	347a1	274a27

	T	K	放光	大品	二会
B	197,4,3	35,1,3	92a7	347a8	274b15
<10>	198,3,8	35,5,3	92b5	347b24	275a8
<11>					
0	203,2,8	40,2,2	94b7	350a6	279b14
1	204,1,8	41,1,4	94c2	350b11	280c5
2	204,3,6	41,3,2	94c16	350b25	280c28
3	204,4,3	41,3,6	94c20	350c2	281a9
4	204,4,8	41,4,4	94c29	350c12	281a21
5	204,5,8	41,5,4	95a8	350c23	281b9
6	205,3,4	42,2,4	95a22	351a10	281c14
7	205,5,4	42,4,4	95b7	351a26	282a28
8	206,1,3	42,5,3	---	---	---
9	206,2,7	43,1,7	95b13	351b4	282b18
10	206,4,8	43,3,7	95c5	351b25	283a7
End	206,5,7	43,4,3	95c9	351c7	283a24

『現観莊嚴論』関係チベット文献

凡例

1. 著者名はアルファベット順に示されている。著者の属する派は、GL, KG, NM, SK によって表され、順にゲルク派、カギユ派、ニンマ派、サキャ派を示す。
2. 文献の前の A- は、『小註』に対する複註を中心とする『現観莊嚴論』全体の註釈であることを示す。B- は、『現観莊嚴論』の部分的な項目に対する註釈であることを示す。
3. 同一の文献の版の違いは、(a), (b)などで示されている。SB- (あるいはR- あるいはLMpj-) は Institute for Advanced Studies of World Religions (IASWR) 発行のマイクロフィッシュの番号を示す。I-Tib- は United States Library of Congress の番号を示す。IB- は The International Institute for Buddhist Studies 発行のカタログの番号を示す。

bKra shis stong thun, The 95th Abbot of Ganden GL

B-1. Pan chen thams cad mkhyen pa'i yum don yang sal sgron me
bzin don bdun cu zur du bkol ba'i legs bshad blo gsal dga'
ston

(a) R-1029, I-Tib-256, IB-0163

Blo bzang chos kyi rgyal mtshan, Panchen Lama I (1567?-1662) GL

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi snying po'i snying po gsal
bar legs par bshad pa'i rgya mtsho

(a) [Toh No.5942]

Blo bzang 'jigs med rig pa'i ral gri GL
B-1. Phar phyin mtha' dpyod mi pham zhal lung gi mchod brjod
'grel pa mkhas pa dga' byed
(a) SB-4368, Lmpj-014,640, I-Tib-2123, 81-902066.

Blo bzang tshe ring, rGya rong dGe bshes GL
A-1. Yum don gsal ba'i sgron me rnam kun mngon rdzogs kyi skabs
su mkho bo'i zur rgyan dpyid kyi me tog gsar pa'i 'phreng ba
(a) R-1034, I-Tib-262, IB-0213

Blo bzang tshul khriims, Cha har dGe bshes (18th cent.) GL
A-1. mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa mngos grub kun
'byung
(a) R-1893, I-Tib-830, 77-926206, IB-0217(pp.7-641).
B-1. gSer phreng gi dbu'i gsung 'ga' zhig gi sa bcad
(a) R-1893, I-Tib-830, 77-926206, IB-0217 (pp.667-689).
B-2. Sems bskyed kyi tshogs langs bya tshul phan bde'i 'byung
gnas
(a) R-1866, I-Tib-830, 77-926206, IB-0222 (pp.173-184).
B-3. sKyabs gsum gyi tshogs langs la bshad pa bya tshul
(a) R-1866, I-Tib-830, 77-926206, IB-0222 (pp.209-215).
B-4. sKyabs gsum gyi mtha' dpyod
(a) R-1866, I-Tib-830, 77-926206, IB-0222 (pp.217-244).
B-5. dBang rnon dad ba skye tshul gyi skabs kyi yig chung
(a) R-1866, I-Tib-830, 77-926206, IB-0222 (pp.275-327).

Bo dong pan chen Phyogs las rnam rgyal (1376-1451)

A-1. bsTan bcos mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa
(a) R-1526, I-Tib-549, 78-905620, IB-300.

R-1527, IB-0301(pp.1-225)

bSod nams grags pa, Paṅ chen (1478-1554)

GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rnam bshad snying po'i rgyan gyi dgongs 'grel tshig don rab gsal

(a) R-1027, I-Tib-253, IB-0460.

A-2. rNam bshad snying po rgyan gyi don rigs lam bzhin du gsal bar 'chad pa'i yum don yang gsal sgron me

(a) R-1024, I-Tib-252, IB-0466.

R-1026, IB-0467.

A-3. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rnam bshad snying po rgyan gyi don legs par bshad pa yum don gsal ba'i sgron me

(a) R-1023, I-Tib, 74-900776, IB-0468.

bsTan pa dar rgyas, Ser Smad Mkhas grub (1493-1568)

GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i mtha' dpyod legs par bshad pa padma dkar po'i 'phreng ba

(a) R-1330, I-Tib-530, 74-904326, IB-0507.

R-1331, IB-0508.

B-1. bSam gzugs kyi mtha' dpyod

(a) R-1391, I-Tib-707, 79-914166, IB-0505.

B-2. dGe 'dun nyi shu'i mtha' dpyod

(a) R-1392, I-Tib-708, 72-914167, IB-0509.

Bu ston Rin chen grub (1290-1364)

- A-1. Shes rab kyi pha rou tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan ces bya ba'i 'grel pa'i rgya cher
bshad pa lung gi snye ma
(a) R-1206, I-Tib-49, IB-0547. (= [Toh No.5173])
- B-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa grub pa'i rab tu byed pa
lta ba ngan sel
(a) R-1207, I-Tib-49, IB-0548 (pp.1-61). (= [Toh
No.5174])
- B-2. Lung gi snye ma'i skabs skabs su mkho ba'i zur 'debs mthong
lam stong thun
(a) R-1207, I-Tib-49, IB-0548 (pp.63-89). (= [Toh
No.5175])
- B-3. rGyas 'bring bsdus gsum gyi skabs brgyad don bdun cu'i
mtshams 'byed pa'i sher phyin gyi lde mig
(a) R-1207, I-Tib-49, IB-0548 (pp.91-133). (= [Toh
No.5176])
- B-4. Phar phyin gyi brgyud pa
(a) R-1204, I-Tib-49, IB-0545 (pp.18-19). (= [Toh
No.5170(34)])

dByangs can dga' ba'i blo gros, A kya Yongs 'dzin GL

- B-1. 'Phags pa brgyad stong pa'i 'grel chen rgyan snang las btus
pa'i nyer mkho mdo don lta ba'i mig 'byed
(a) R-699, I-Tib-836, 74-926906, IB-0692 (pp.574-698).
(= [Toh No.6578])
- B-2. skabs lnga pa'i gzhung don tshigs su bcad pa blo gsal mgul
rgyan
(a) R-699, I-Tib-836, 74-926906, IB-0692 (pp.716-735).
(= [Toh No.6580])

dGe 'dun grub, Dalai Lama I (1391-1474)

GL

B-1. rGyal po zla ba bzang po'i rnam 'phrul ta'i si tu chen po
rnam rgyal grags pa'i dri ba

(a) [Toh No.5538] (In SB-4034, Lmpj-013,964, I-Tib, 79-906947?)

B-2. rGyal po zla ba bzang po'i rnam 'phrul ta'i si tu chen po
rnam rgyal grags pa'i dri ba'i lan

(a) [Toh No.5539] (In SB-4034, Lmpj-013,964, I-Tib, 79-906947?)

dKon mchog 'jigs med dbang po, 'Jam dbyangs bzhad pa II(1728-91) GL

A-1. Phar phyin skabs brgyad pa'i mtha' dpyod mdor bsdu pa

(a) R-591, I-Tib-786, 70-923316, IB-0757 (pp. 645-723).

B-1. dNgos brgyad don bdun cu'i rnam bzhag bsdu pa

(a) R-591, I-Tib-786, 70-923316, IB-0757 (pp. 607-623).

B-2. mKhyen gsum gyi rnam pa brgya dang don gsum gyi rang bzhin
yang dag par brjod pa legs bshad padma dkar po'i khri shing

(a) R-591, I-Tib-786, 70-923316, IB-0757 (pp. 625-644).

B-3. Sa lam gyi rnam bzhag theg gsum mdzes rgyan

(a) R-592, I-Tib-786, 70-923316, IB-0758 (pp. 421-463).

dNgul chu Dharmabhadra (1772-1851)

GL

B-1. mNgon rtogs rgyan gyi bsdu don sher phyin lde mig

(a) [Toh No.6367] (In SB4102, Lmpj-014,029?)

dPal 'byor lhun grub, mKhon ston (fl. 1500)

GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel tik rnam
bshad snying po'i rgyan gyi tshig don rab gsal

(a) [Toh No.6816]

dPal sprul O rgyan 'jig med chos kyi dbang po (1808-) NM

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi spyi don

(a) R-398, I(Sik)-Tib-44, 72-914680, IB-0847 (pp.1-489).

A-2. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'bru 'grel

(a) R-398, I(Sik)-Tib-44, 72-914680, IB-0847 (pp.491-
659).

B-1. Sher phyin skabs dge 'dun nyi shu'i zur bkol

(a) R-398, I(Sik)-Tib-44, 72-914680, IB-0847 (pp.661-
664).

B-2. Sher phyin rgyan gyi spyi don bsgom rim nyung ngu gzhung
lugs legs bshad

(a) R-398, I(Sik)-Tib-44, 72-914680, IB-0847 (pp.695-
734).

Go rams pa bSod nams seng ge (1429-1489) SK

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i dka' ba'i
gnas rnam par bshad pa yum don rab gsal

(a) The Complete Works of the Great Masters of the Sa
skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.13 (pp.85-244).

A-2. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon rtogs rgyan gyi gzhung snga phyi'i 'brel dang dka'
gnas la dpyad pa sbas don zab mo'i gter gyi kha 'byed

(a) The Complete Works of the Great Masters of the Sa
skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.13 (pp.245-358).

- A-3. 'Grel pa don gsal gyi ngag don
 (a) The Complete Works of the Great Masters of the Sa
 skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.13 (pp.358-394).
- B-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
 mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtshon byed kyi chos rnams
 kyi yan lag rgyas par bshad pa sbas don rab gsal
 (a) The Complete Works of the Great Masters of the Sa
 skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.14 (pp.1-32).
 (b) R-1112, I-Tib-455, IB-0942.
- B-2. Zhugs gnas kyi rnam gzhag skyes bu mchog gi gsal byed
 (a) The Complete Works of the Great Masters of the Sa
 skya Sect of the Tibetan Buddhism, Vol.14 (pp.32-67).

Gung thang dKon mchog bstan pa'i sgron me (1762-1823) GL

- A-1. 'Grel pa don gsal gyi steng nas rgyas 'bring bsdus gsum
 mngon rtogs rgyan rtsa 'grel sogs mdo rgyan sbyar ba'i gzab
 bshad kyi zin bris sbas don gsal ba'i sgron me
 (a) R-718, I-Tib, 78-927955, IB-1020 (pp.335-681).
- A-2. Phar phyin skabs dang po'i mtha' dpyod kyi mchan 'grel rtsom
 'phro
 (a) R-719, I-Tib, 78-927955, IB-1021 (pp.3-221).
- A-3. sKabs bzhi pa'i bsdus don rgyal mkhan po grags pa rgyal
 mtshan pa la gnang ba
 (a) R-719, I-Tib, 78-927955, IB-1021 (pp.223-273).

g'Yag ston Sangs rgyas dpal (1350?-1414) SK

- A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
 mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa legs par
 bshad pa rin po che'i bang mdzod

(a) R-2060, SB-675, I-Tib-1111, 73-903969, IB-1030.
R-2061, SB-676, IB-1031.

- A-2. Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa shin tu rgyas pa
rin po che'i phreng ba blo gsal mgul rgyan
- A-3. Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi gsal byed rin chen sgron
me
- A-4. Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa bsdus pa rin chen
bsam 'phel
- A-5. Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi 'grel pa yid kyi mun sel
- A-6. mDo dang rtsa ba dang 'grel pa so sor sbyar ba'i gsal byed
nyi ma'i 'od zer

gZhan phan chos kyi snang ba, gZhan dga' (1871-1927) NM

- A-1. Phar phyin 'grel mchan gzhan phan snang ba
- (a) SB-3409, I(Bhu)-Tib-177, 78-906055, IB-3469.
- (b) SB-3595, Lmpj-013,620, I-Tib, 78-908076, IB-3465.

'Jam dbyangs Blo bzang bshes gnyen GL

- B-1 Sa lam gyi rnam gzhas skal bzang mig 'byed
- (a) SB-4062, Lmpj-013,989, I-Tib, 80-900349.

'Jam dbyangs bzhad pa Ngag dbang brtson 'grus (1648-1721) GL

- A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtha' dpyod shes
rab kyi pha rol tu phyin pa'i don kun gsal ba'i rin chen
sgron me
- (a) R-779, I-Tib-50, IB-1108.
R-780, IB-1109
R-781, IB-1110
R-782, IB-1111

R-783, IB-1112

R-784, IB-1113

- (b) R-1830, I-Tib, 72-906728, IB-1099
SB-679, IB-1100 (pp.3-537)

B-1. Phar phyin skabs brgyad pa'i mtha' dpyod bsam 'phel yid
bzhin nor bu'i phreng mdzes skal bzang mig 'byed

- (a) SB-679, I-Tib, 72-906728, IB-1100 (pp.539-773).

B-2. dNgos po brgyad don bdun cu'i rnam bzhag legs par bshad pa
mi pham bla ma'i zhal lung

- (a) SB-688, R-2164, 72-906728, IB-1107 (pp.113-175).

Klong rdol bla ma Ngag dbang blo bzang (1719-1794 or 1795) GL

B-1. Phar phyin las byung ba'i ming gi rnam grans

- (a) [Toh No.6539]

Kun dga' dpal, Nya dbon (14th cent.) SK

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas
pa'i rgyas 'grel bshad sbyar yid kyi mun sel

- (a) SB-4241, Lmpj-013,447, I-Tib-1857, 78-906105, IB-
3628.

SB-4242, Lmpj-013,448, IB-3629.

lCang skya Rol pa'i rdo rje (1717-1786) GL

B-1. Dag yig mkhas pa'i 'byung gnas zhes bya ba las phar phyin
skor

- (a) Dag yig mkhas pa'i 'byun gnas. SMANSTISIS SHESRIG
SPENDZOD SERIES Vol.59 (pp.2-51).

mDo sngags bstan pa'i nyi ma, Bod sprul (1907-59) NM

- A-1. Sher phyin mngon par rtogs pa'i rgyan gyi tshig don rnam par
bshad pa ma pham zhal lung
(a) R-813, R-1239, I-Tib-92, IB-1524.

Mi pham rgya mtsho, 'Jam mgon 'Ju (1846-1912) NM

- A-1. Sher phyin mngon rtogs rgyan gyi mchan 'grel punda ri do sal
(a) SB-3020, Lmpj-014,135, I(Sik)-Tib, 72-906838, IB-
3739 (pp.1-347).

mKhas grub bstan pa dar ba GL

- A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan rtsa 'grel gyi spyi
don rnam bshad snying po'i rgyan gyi snang ba
(a) [Toh Nos.6817, 6818]
- A-2. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas
pa'i mtha' dpyod legs par bshad pa padma dkar po'i 'phreng
ba
(a) [Toh No.6819]

mKhas grub dGe legs dpal bzang po (1385-1438) GL

- A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa don gsal ba'i rnam
bshad rtogs dka'i snang ba
(a) SB-4183, Lmpj-014,482, I-Tib-2125, 80-905392. (= [Toh
No.5461])
- B-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mthar thug pa'i lta ba thal
'gyur du 'grel tshul gnad don gsal ba'i zla zer
(a) SB-4183, Lmpj-014,482, I-Tib-2125, 80-905392. (= [Toh
No.5460])

B-2. Sa lam gyi rnam gzhag mkhas pa'i yid 'phrog

(a) SB-4191, Lmpj-014,490, I-Tib-2125, 80-905392. (= [Toh No.5495])

(b) R-302, I-Tib-626, 73-908487, IB-1613.

Ngag dbang bkra shis

GL

B-1. Zhugs pa dang gnas pa'i 'phags pa'i dge 'dun gyi rnam gzhag gi mtha' dpyod skal bzang 'jug ngogs

(a) SB-4368, Lmpj-014,640, I-Tib-2123, 81902066

Ngag dbang blo bzang rgya mtsho, Dalai Lama V (1617-1682)

GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi rtsa 'grel rnams gsal bar byed pa blo bzang dgongs rgyan gdong lnga'i dbang po'i sgra dbyangs

(a) [Toh No.5647]

Ngag dbang dpal ldan

A-1. Phar phyin spyi don gyi zur mchan yum don rab gsal sgron me

(a) Rje btsun bla ma 'dul ba 'dzin pa ngag dbang dpal ldan gyi gsung 'bum, Kha (pp.3-517).

Ngag dbang nyi ma, sGo mang dGe bshes (20th cent.)

GL

A-1. bsTan bcos mngon rtogs rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa legs bshad gser 'phreng gi sa bcad

A-2. bsTan bcos chen po mngon par rtogs pa'i rgyan gyi sa bcad

(a) SB-3336, Lmpj-013,357, I-Tib, 78-900966, IB-3846 (pp.1-349)

Padma dkar po, 'Brug chen IV (1527-929)

KG

A-1. mNgon par rtogs pa rgyan gyi 'grel pa rje btsun byams pa'i zhal lung

(a) SB-712, I-Tib, 73-902758, IB-1901 (pp.1-340).

B-1. Sher phyin lung la 'jug pa'i sgo

(a) SB-2047, I-Tib, 73-902758, IB-1900 (pp.403-479).

(b) R-1386, I-Tib-689, 73-902758, IB-1894.

Padma 'gyur med rgya mthso, sMin gling rGyal sras (1686-?) NM

A-1. mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i spyi don bdud rtsi'i nying khu

(a) R-1397, I-Tib-715, 74-914678, IB-1940.

Phur bu lcog Ngag dbang byams pa (1682-1762) GL

B-1. Yum shes rab kyi pha rol tu phyin pa brgyad stong pa'i don slob dpon seng bzang dang phyogs glang gnyis kyi 'chad tshul mdor bsdus sgron gsal

(a) R-2199, I-Tib, 74-900160, IB-1994 (pp.354-366).

(=[Toh No.6155])

rGyal tshab Dar ma rin chen (1364-1432) GL

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa don gsal ba'i rnam bshad snying po rgyan

(a) R-1290, I-Tib-237, IB-2134.

(b) Rgyal tshab dar ma rin chen gyi gsung 'bum, Kha.

(=[Toh No.5433])

B-1. mNgon par rtogs pa'i rim pa nyams su len tshul theg mchog sgo 'byed

(a) Rgyal tshab dar ma rin chen gyi gsung 'bum, Ca.

(=[Toh No. 5439])

B-2. mNgon par rtogs pa brgyad don bdun cu dang bcas pa'i 'grel
pa nyams su len tshul mdo tsam dang bcas pa

(a) Rgyal tshab dar ma rin chen gyi gsung 'bum, Ca.
(=[Toh No.5440])

B-3. mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi bsdus don rin po che'i phreng
ba

(a) Rgyal tshab dar ma rin chen gyi gsung 'bum, Ca.
(=[Toh No.5441])

Rong ston Shes bya kun rig (1367-1449)

SK

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan ces bya ba'i rnam bshad tshig don
rab tu gsal ba

(a) R-1839, I-Tib-934, 72-908271, IB-2193.

(b) [Jackson & Onoda 1988]

A-2. mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i dka' ba'i
gnas rnam par 'byed pa zab don gnad kyi zla 'od

(a) SB-4066, Lmpj-014,000, I-Tib, 80-900968.

B-1 gSung rab thams cad kyi snying po shes rab kyi pha rol tu
phyin pa nyams su lan pa'i man ngag lam nga gsal sgron

(a) SB-4096, Lmpj-014,023, I-Tib, 80-901206.

Se ra rJe btsun Chos kyi rgyal mtshan (1469-1546)

GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas
pa'i rnam bshad rnam pa gnyis kyi dka' ba'i gnad gsal bar
byed pa legs bshad skal bzang klu dbang gi rol mtsho

(a) SB-3623, Lmpj-013,645, I-Tib-1850, 78-909031, IB-
4137. (=R-1021, I-Tib-246, IB-2296)

SB-3624, Lmpj-013,646, IB-4138.
SB-3625, Lmpj-013,646.1, IB-4139.
SB-3626, Lmpj-013,646.2, IB-4140.
SB-3627, Lmpj-013,646.3, IB-4141.
SB-3628, Lmpj-013,646.4, IB-4142.
SB-3629, Lmpj-013,646.5, IB-4143.
SB-3630, Lmpj-013,646.6, IB-4144.
SB-3631, Lmpj-013,646.7, IB-4145.
SB-3632, Lmpj-013,646.8, IB-4146.

(=[Toh No.6814])

A-2. Mtha' dpyod legs bshad gser gyi phreng ba mkhas pa'i mgul
rgyan

(a) R-1359, I-Tib-633, 70-909266, IB-2304.
R-1360, IB-2305.

(=[Toh No.6815])

A-3 rJe btsun chos kyi rgyal mtshan dpal bzang po'i gsung ji lta
ba bzhin yi ger bkod pa skabs brgyad pa'i spyi don

(a) SB-4215, Lmpj-014,512, I-Tib-1814, 81-900489.

B-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi brjod bya dngos
brgyad don bdun cu nges par 'byed pa'i thabs dam pa

(a) R-1020, I-Tib-245, IB-2295. (=SB-4214, Lmpj-014,511,
I-Tib-1812, 81-900484. [Toh No.6827], [Tshulkrim Kelsang &
Onoda 1985])

B-2. mkhas pa'i mgul rgyan ces bya ba sa lam rnam gzhag

(a) R-1022, I-Tib-247, IB-2303. (=SB-4347, Lmpj-014,618,
I-Tib-1811, 81-900490. [Toh No.6826])

B-3. Bsam gzugs kyi mtha' gcod

(a) [Toh No.6823]

B-4. dGe 'dun nyi shu'i mtha' gcod

(a) [Toh No.6824]

- Shākya mchog ldan, gSer mdog Paṅ chen (1428-1507) SK
- A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i dka' ba'i gnas rnam par bshad nas rang gzhan gyi grub pa'i mtha' rnam par dbye ba lung rigs kyi rol mtsho
(a) SB-3034, Lmpj-014,182, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4230
SB-3035, Lmpj-014,183, IB-4231 (pp.1-469).
- A-2. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mdo dang mngon par rtogs pa'i rgyan gyi lus dang yan lag rgyas par bshad pa lung gi don rgya mtsho
(a) SB-3036, Lmpj-014,184, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4232 (pp.1-161).
- A-3. mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i spyi'i don nyer mkho bsdus pa lung chos rgya mtsho'i snying po
(a) SB-3036, Lmpj-014,184, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4232 (pp.163-561).
- A-4. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa dang bcas pa'i snga phyi'i 'brel rnam par btsal zhing dngos bstan gyi dka' ba'i gnas la legs par bshad pa'i dpun tshogs rnam par bkod pa bzhed tshul rgya mtsho'i rba rlabs kyi phreng ba
(a) SB-3044, Lmpj-014,192, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4240 (pp.157-587).
- A-5. mNgon par rtogs pa'i rgyan 'grel pa don gsal ba dang bcas pa'i rnam par bshad pa shing rta'i srol gnyis gcig tu bsdus pa'i lam po che

(a) SB-3045, LMpj-014,193, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4241 (pp.1-319).

(b) R-1376, I(Bhu)-Tib-2, 77-911690, IB-2426.

B-1. Byams chos lnga'i lam gyi rim pa gsal bar byed pa'i bstan bcos rin chen sgrom gyi sgo 'byed

(a) SB-3044, LMpj-014,192, I(Bhu)-Tib, 75-908629, IB-4240 (pp.39-155).

Shākya rgyal mtshan, lCang ra Slob dpon GL

A-1. bsTan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi rnam par bshad pa tshig don gsal ba'i nyin byed

(a) R-1401, I(Bhu)-Tib-6, 74-912760, IB-2427.

Sum pa mkhan po Ye shes dpal 'byor (1704-1788) GL

A-1. mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi dka' gnas kyi spyi don nyung bsdus blo gsar mgul rgyan

(a) SB-2112, LMpj-012,405, I-Tib, 75-904281, IB-4214 (pp.283-479).

B-1. dNgos po brgyad don bdun cu'i grangs 'dren dpag bsam myu gu

(a) SB-2112, LMpj-012,405, I-Tib, 75-904281, IB-4214 (pp.265-281).

B-2. dGe 'dun nyi shu'i spyi'i don mdor bsdus

(a) SB-2112, LMpj-012,405, I-Tib, 75-904281, IB-4214 (pp.481-507).

Thub bstan brtson 'grus phun tshogs

B-1. bsTan bcos chen po mngon rtogs rgyan gyi lus rnam bzhag gi 'grel pa 'jigs med chos kyi dbang po'i zhal lung

(a) SB-4112, LMpj-014,038, I-Tib-2035, 80-901671.

Tshe mchog gling Yongs 'dzin Ye shes rgyal mtshan (1713-1793) GL

B-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon par rtogs pa'i rgyan gyi bsdus don zib tu bkod pa sher
phyin mdzod brgya 'byed pa'i lde mig

(a) SB-1858, I-Tib, 75-900477, IB-2573 (pp.415-505).

(=[Toh No.5596])

B-2. Sher phyin stong phrag brgyad pa dang mngon rtogs rgyan
sbyar te byang chub lam gyi rim pa'i gnad rnams gsal bar
ston pa'i man ngag sher phyin gsal ba'i sgron me

(a) SB-1859, I-Tib, 75-900477, IB-2574 (pp.1-163).

(=[Toh No.5997])

Tsong kha pa Blo bzang grags pa (1357-1419) GL

A-1. Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i man ngag gi bstan bcos
mngon rtogs rgyan 'grel pa dang bcas pa'i rgya cher bshad pa
legs bshad gser phreng

(a) SB-3477, Lmpj-013,493, I-Tib, 78-905654, IB-4348.

SB-3478, Lmpj-013,494, IB-4349.

(=[Toh No.5412])

(b) SB-3206, Lmpj-014,179, I-Tib, 75-905462, IB-4374.

SB-3207, Lmpj-014,180, IB-4375.

SB-3208, Lmpj-014,181, IB-4376 (pp.1-264).

(c) [TTP No.6150: Vols.154-155]

(d) R-1418, I-Tib-748, 78-919214, IB-2607.

(e) SB-3459, Lmpj 013,475, I-Tib-1707, 78-903309, IB-
4377.

B-1. Zhugs pa dang gnas pa'i skyes bu chen po rnams kyi rnam par
bzhag pa blo gsal bgrod pa'i them skas

(a) SB-3478, Lmpj-013,494, I-Tib, 78-905654, IB-4349.

(=[Toh No.5413])

(b) SB-3208, Lmpj-014,181, I-Tib, 75-905462, IB-4376

(pp.265-355).

(c) [TTP No.6146: Vol.154]

B-2. Bsam gzugs zin bris

(a) SB-3478, Lmpj-013,494, I-Tib, 78-905654, IB-4349.

(=[Toh No.5417])

(b) SB-3208, Lmpj-014,181, I-Tib, 75-905462, IB-4376

(pp.543-564).

(c) [TTP No.6148: Vol.154]

B-3. dGe 'dun nyi shu bsdus pa bzhugs gnas skyes bu chen po'i
dka'

gnad

(a) SB-3478, Lmpj-013,494, I-Tib, 78-905654, IB-4349.

(=[Toh No.5420]).

(b) SB-3208, Lmpj-014,181, I-Tib, 75-905462, IB-4376

(pp.593-607).

(c) [TTP No.6147: Vol.154]

Ye shes rgya mtsho, Su nyid sMon ram pa

GL

A-1. gSer 'phreng tshig sdom don rgyan bslong thabs tshig gi shel

'khar dwangs byed nor bu

(a) SB-4049, Lmpj-013,977, I-Tib, 80-900208.

和文・欧文文献

赤松明彦

- 1984 「ダルマキールティの論理学」『講座・大乘仏教』9 春秋社、pp.183-215。

アビト、ルーベン (Habito, Ruben)

- 1976a 「<法身>の二種について」『印度学仏教学研究』25(1): 192-195。
1976b 「絶対者としての「仏」について」『宗教研究』50(3): 35-36。
1977a 「法身と智慧」『仏教学』3: 86-104。
1977b 「『大乘莊嚴經論』と『究竟一乘宝性論』」『印度学仏教学研究』26(1): 59-62。
1978 「仏身論の展開」『宗教研究』52(2): 1-21。
1987 「密教における法身観の背景—『宝性論』を手がかりとして」『印度学仏教学研究』36(1): 141-148。

天野宏英

- 1964 「ハリバドラの仏身論」『宗教研究』37: 27-57。
1965 「ハリバドラの二諦論」『印度学仏教学研究』13(2): 176-181。
1966 「因果論の一資料」『金倉博士古希記念印度学仏教学論集』平楽寺書店、pp.323-350。
1967 「因果論について—ハリバドラのダルマキールティ批判—」『印度学仏教学研究』15(2): 104-112。
1968 「現観莊嚴論釈の著作問題」『宗教研究』41(3): 128-129。
1969 「現観莊嚴論の著作目的について—ハリバドラの解釈方法—」『印度学仏教学研究』17(2): 59-69。
1975(1970) 「< Dharmakāya > の語義とその変遷(1)(2)」『三蔵集』1、大東出版社、pp.163-183。
1979 「現観莊嚴頌論釈の和訳研究(1)」『比治山女子短期大学紀要』13: 43-61。
1983a 「現観莊嚴論釈の梵文写本(1)」『比治山女子短期大学紀要』17: 1-15。
1983b 「後期の般若思想」『講座・大乘仏教』2 春秋社、pp.193-223。
1985 「現観莊嚴論釈の梵文写本(2)」『島根大学教育学部紀要』

- 19: 123-138。
- 1986 「現観莊嚴論積の梵文写本(3)」『島根大学教育学部紀要』20: 67-86。
- 1987 「現観莊嚴論積の梵文写本(4)」『島根大学教育学部紀要』21: 39-51。
- 1988a 「現観莊嚴論積の著作問題再考」『成田山仏教研究所紀要』11: 33-57。
- 1988b 「現観莊嚴論積の梵文写本(5)」『島根大学教育学部紀要』22(2): 9-25。
- 1989 「現観莊嚴論積の梵文写本(6)」『島根大学教育学部紀要』23(1): 1-7。

荒井裕明

- 1988a 「『現観莊嚴論』における種姓について」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』21: 9-15。
- 1988b 「Abhisamayālaṅkāra Ch.I k.39 について」『印度学仏教学研究』37(1): 108-110。

荒牧典俊

- 1974 『大乘仏典 8 十地経』中央公論社。

池田練太郎

- 1979 「lCang skya 宗義書における Vaibhāṣika 章について」『日本西蔵学会会報』25: 1-4。
- 1982 「チベットにおけるアビダルマ仏教の特色」『東洋学術研究』21(2): 128-142。

磯田熙文

- 1970 「Cittotpādaについて」『印度学仏教学研究』19(1): 71-76。
- 1972a 「Nirvedha-bhāgīyaについて」『印度学仏教学研究』20(2): 46-53。
- 1972b 「Pratipatti-ālabanaについて」『印度学仏教学研究』21(1): 382-388。
- 1975 「Ārya-Vimuktisena: Abhisamayālaṅkāra-Vṛtti (I)」『文化』39(1/2): 1-27。

- 1980 「Ārya-Vimuktisena: Abhisamayālaṅkāra-Vṛtti (II)」『文化』43(3/4): 1-12。
- 1981 「『Munimatālaṅkāra』について」『印度学仏教学研究』29(2): 93-99。
- 1982a 「AbhayākaraguptaのHaribhadra批判」『印度学仏教学研究』30(2): 30;-35。
- 1982b 「Ārya-Vimuktisena: Abhisamayālaṅkāra-Vṛtti (III)」『文化』45(3/4): 1-12。
- 1983 「『Munimatālaṅkāra』について(2)」『印度学仏教学研究』31(2): 116-121。
- 1984 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṅkāra』 (Text) (I)」『東北大学文学部研究年報』34: 251-320。
- 1985 「『Abhisamayālaṅkāra』の三身説と四身説」『印度学仏教学研究』34(1): 94-101。
- 1987 「Abhayākaragupta 『Munimatālaṅkāra』 (Text)(II)」『東北大学文学部研究年報』37: 138-176。
- 1988a 「Ratnākaraśānti と Abhayākaragupta」『成田山仏教研究所紀要』11: 67-80。
- 1988b 「法身の事業について」『日本仏教学会年報』53: 47-60。
- 1988c 「『Durbodhālokā』について」『印度学仏教学研究』37(1):100-107。

一郷正道

- 1982 「瑜伽行中観派」『講座・大乘仏教』7 春秋社、pp.175-215。
- 1985 『中観荘厳論の研究』文栄堂。

稲葉正就

- 1966 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出(上)」『仏教学セミナー』4: 15-33。
- 1967 「チベット中世初期における般若中観論書の訳出(下)」『仏教学セミナー』5: 13-25。

宇井伯寿

- 1952 「真理の宝環」『名古屋大学文学部研究論集』III 哲学1: 1-31。
- 1956 「荘厳論並びに中辺論の著者問題」『名古屋大学文学部研究論集』XV 哲学5: 1-47。

- 1958 『瑜伽論研究』岩波書店。
1959 『宝性論研究』岩波書店。
1961 『大乘莊嚴經論研究』岩波書店。

上山大峻

- 1977 「エセイデの仏教綱要書」『仏教学研究』32/33: 19-45。
1981 「エセイデの仏教綱要書」『仏教学研究』37: 54-84。

氏家覚勝

- 1969 「唯識説における ākāra の問題」『印度学仏教学研究』17(2): 234-238。
1977 「受用身の一特性」『密教文化』122: 43-60。

瓜生津隆真

- 1974 「宝行王正論」『大乘仏典14 龍樹論集』中央公論社、pp.231-316。

江島恵教

- 1971 「Kamalaśīlaの無自性性論証」『東方学』41: 101-113。
1974 「「離一多性」による無自性性論証」『宗教研究』48(1): 25-42。
1980 『中観思想の展開』春秋社。

エリアーデ、ミルチャ

- 1975a 『ヨーガ 1』立川武蔵訳、せりか書房。
1975b 『ヨーガ 2』立川武蔵訳、せりか書房。

小川一乗

- 1976 『空性思想の研究』文栄堂。

沖和史

- 1982 「有相唯識と無相唯識」『講座・大乘仏教』8 春秋社、pp.177-209。

荻原雲来

- 1938a 「現観莊嚴論について」『荻原雲来文集』pp.311-324。
1938b 「現観莊嚴論玄談」『荻原雲来文集』pp.325-379。

- 1938c 「現觀莊嚴論頌」『荻原雲來文集』pp.694-724。
1938d 「現觀莊嚴論に依準せる八千頌般若波羅蜜多經注解」『荻原雲來文集』pp.724-737。
1986(1979) 『漢訳対照梵和大辞典』講談社(鈴木学術財団)。

沖本克巳

- 1982 「サムイェーの宗論をめぐる諸問題」『東洋学術研究』21(2): 42-53。

小谷信千代

- 1984 『大乘莊嚴經論の研究』文栄堂書店。
1988 「チム・ジャンピーヤンの『俱舍論釈』(第六章賢聖品)の和訳(一)」『仏教学セミナー』48: 29-47。

越智淳仁

- 1988a 「Abhisamayālaṅkāra-kārikā の第1章第17偈」『成田山仏教研究所紀要』11: 143-159。
1988b 「密教の法身思想」『日本仏教学会年報』53: 95-110。

小野田俊蔵

- 1982 「チベットにおける論理学研究の問題」『東洋学術研究』21(2): 193-205。

梶山雄一

- 1966 「仏教哲学における命題解釈 - evaの文意制限機能 -」『金倉博士古希記念 印度学仏教学論集』平楽寺書店、pp.423-438。
1974a 『大乘仏典2 八千頌般若経I』中央公論社。
1974b 「廻諍論」『大乘仏典14 龍樹論集』中央公論社、pp.133-184。
1974c 「後期インド仏教の論理学」『講座 仏教思想』2 理想社、pp.243-310。
1979 「シャーンタラクシタの批判哲学」玉城康四郎(編)『仏教の比較思想論的研究』東京大学出版社、pp.395-426。
1982 「中観思想の歴史と文献」『講座・大乘仏教』7 春秋社、pp.1-83。
1983a 『仏教における存在と認識』紀伊国屋書店。
1983b 「般若思想の生成」『講座・大乘仏教』2 春秋社、pp.1-86。

梶山雄一・上山春平

1969 『仏教の思想3 空の論理』角川書店。

梶山雄一・丹治昭義

1975 『大乘仏典3 八千頌般若経II』中央公論社。

梶山雄一・御牧克巳

1986 「経量部 (Sautrāntika) 研究」昭和59・60年度科学研究費補助金 (一般研究B) 研究成果報告書。

梶芳光運

1944 『原始般若経の研究』山喜房仏書林。

片岡融悟

1958 「現観莊嚴論第三章の考察」『印度学仏教学研究』6(1): 128-129。

片野道雄

1981 「ツォンカパ造了義未了義論の試解(1)」『大谷大学研究年報』34: 41-87。

1986 「ツォンカパの解明するシャーンタラクシタの中観思想 - 『善説心髓』試解 - 」『仏教学セミナー』44: 17-28。

勝又俊教

1975 「瑜伽師地論における止観」関口真大 (編) 『止観の研究』岩波書店、pp.85-111。

桂紹隆

1984 「ディグナーガの認識論と論理学」『講座・大乘仏教』9 春秋社、pp.103-152。

金倉円照

1949 『印度中世精神史 上』岩波書店。

1965 『悟りへの道』平楽寺書店。

1973 「弥勒の法法性弁別論について」『印度哲学仏教学研究 [I]』春秋社、pp.123-174。

川越英信

- 1984 「rÑog Blo ldan śes rab と彼をめぐる人々」『印度学仏教学研究』32(2): 114-118。
1986 「Smṛtijñānakīrti をめぐる Khams の仏教活動について」『印度学仏教学研究』35(1): 179-183。

川崎信定

- 1981 「一切智 (sarvajña) の思想の展開」『勝又俊教博士古希記念論集 大乘仏教から密教へ』春秋社、pp.199-217。
1984 「一切智者の存在論証」『講座・大乘仏教』9 春秋社、pp.293-339。
1985 「諸法実相を基盤とした一切智・一切種智」『平川彰博士古希記念論集 仏教思想の諸問題』春秋社、pp.355-372。
1988 「バウイヤの『中観心論』にみられる『一切智』説(一)」『仏教学』24: 1-20。

川田熊太郎

- 1957 「現観莊嚴論における四聖諦と深縁起」『印度学仏教学研究』5(1): 196-199。

北川秀則

- 1965 『インド古典論理学の研究－陣那の体系－』鈴木学術財団。
1974 「中期大乘仏教の論理学」『講座仏教思想』2 理想社、pp.189-241。

小林守

- 1981 「Ratnākaraśānti の『アピサマヤ』注解書」『印度学仏教学研究』30(1): 132-133。
1986 「カマラシーラの離一多論証－『中観明』試訳(上)－」『東北印度学宗教学会論集』13: 19-37。
1987 「無自性性論証と所依不成 (āśrayāsiddha) の問題－カマラシーラの『中観明』を中心として－」『文化』50(3/4): 41-60。

三枝充恵

- 1971 『般若経の真理』春秋社。

三枝充恵・久我順

- 1954 「中論、梵漢対照語彙」宮本正尊（編）『大乘仏教の成立史的研究』三省堂（付録第二）。

三枝充恵・松本史郎・池田練太郎

- 1987 『インド仏教人名辞典』法蔵館。

西藏文典研究会

- 1979 『西藏文献による仏教思想研究』第1号 山喜房仏書林。
1981 『西藏文献による仏教思想研究』第2号 山喜房仏書林。

斎藤明

- 1981 「lCang skya 宗義書における 経量行中観自立派の章について」『日本西藏学会会報』27: 7-10。

佐伯旭雅

- 1881 『冠導阿毘達磨俱舍論』法蔵館。

榊亮三郎

- 1981(1962, 1916) 『翻訳名義大集』国書刊行会（鈴木学術財団、真言宗京都大学）。

佐久間秀範

- 1982 「五法と三身の結び付き－仏地経論を中心として－」『印度学仏教学研究』31(1): 124-125。
1986 「『現観莊嚴論』法身章をめぐって（I）－コラムパ『現観莊嚴論積』第八章－」山口瑞鳳（編）『チベットの仏教と社会』春秋社、pp.291-319。
1987 「<三身>と<五法>－両者の結合関係とその成立過程－」『高崎直道博士還暦記念論集・インド学仏教学論集』春秋社、pp.387-411。

桜部健

- 1969 『俱舍論の研究』法蔵館。
1975 『仏教語の研究』文栄堂。

桜部健・上山春平

1969 『仏教の思想2 存在の分析<アビダルマ>』角川書店。

佐々木現順

1958 『阿毘達磨思想研究』弘文堂。

佐藤密雄

1975 「清浄道論に於ける止観」関口真観(編)『止観の研究』岩波書店、
pp.113-138。

佐保田鶴治

1973 『ヨーガ根本教典』平河出版社。

声聞地研究

1984 「梵文声聞地」『大正大学総合仏教研究所年報』6: 1-30。

1986 「梵文声聞地」『大正大学総合仏教研究所年報』7: 33-69。

勝呂信静

1989 『初期唯識思想の研究』春秋社。

相馬一意

1986 「梵文和訳『菩薩地』(1)種姓の章、発心の章」『仏教学研究』
42: 1-26。

1987 「梵文和訳『菩薩地』(2)自利・利他の章」『仏教学研究』43:
20-43。

副島正光

1980 『般若経典の基礎的研究』春秋社。

高崎直道

1958 「Amuktajñā の語義について」『印度学仏教学研究』6(1): 186-
190。

1959 「転依 - Āśrayaparivṛtti と Āśrayaparāvṛtti - 」『日本仏教学会年
報』25: 89-110。

1966a 「GOTRABHŪ と GOTRABHŪMI」『金倉博士古希記念 印度学仏教学論集』

平楽寺書店、pp.313-336。

- 1966b 「ツォンカパのゴートラ論」『鈴木学術財団研究年報』3: 87-110。
1967a 「聖種āryavaṃsaと種姓gotra」『日本仏教学会年報』32: 1-21。
1967b 「GOTRABHŪMI覚え書－特に般若経の十地をめぐって－」『駒沢大学
仏教学部研究紀要』25: 1-27。
1973 「種姓に安住する菩薩－瑜伽行派の種姓論・序説－」『中村元博士
還暦記念論集 インド思想と仏教』春秋社、pp.207-222。
1974 『如来蔵思想の形成』春秋社。
1975a 『大乘仏典12 如来蔵系経典』中央公論社。
1975b 「法身の一元論－如来蔵思想の法観念－」『平川彰博士還暦記念論
集 仏教における法の研究』春秋社、pp.221-240。
1980 『楞伽経』大蔵出版社。
1982a 「如来蔵思想の歴史と文献」『講座・大乘仏教』6 春秋社、
pp.1-49。
1982b 「如来蔵とアーラヤ識」『講座・大乘仏教』6 春秋社、
pp.151-183。
1989 『宝性論』講談社。

高橋尚哉ほか

- 1981 「梵文声聞地」『大正大学総合仏教研究所年報』3: 1-44。
1982 「梵文声聞地」『大正大学総合仏教研究所年報』4: 1-27。

健代淵応

- 1973 『Abhisamayālaṃkāraśāstratīkā の研究』四天王寺支院清光院清水
寺。

竹村牧男

- 1982 「三身論の中の理智不二法身説について－本覚思想の源流を尋ね
て－」『田村芳郎博士還暦記念論集 仏教教理の研究』春秋社、
pp.217-235。

立川武蔵

- 1974 『西藏仏教宗義研究－トゥカン『一切宗義』サキヤ派の章－』東洋
文庫。
1986 『「空」の構造－『中論』の論理－』レグルス文庫 第三文明社。
1987 『西藏仏教宗義研究－トゥカン『一切宗義』カギユ派の章－』東洋

文庫。

1988 『ヨーガの哲学』講談社現代新書。

谷口富士夫

- 1986a 「ハリバドラ著『現観荘厳論』第IV章和訳・解説(1)」『SAMBHĀṢĀ』7: 43-54。
- 1986b 「ハリバドラにおける菩薩と種姓の関係－現観の認識主体と認識対象－」『日本西藏学会会報』31: 13-17。
- 1986c 「ハリバドラにおける発心」『東海仏教』31: 60-74。
- 1987 「『現観荘厳論』における否定対象」『印度学仏教学研究』35(2): 119-121。
- 1988a 「『現観荘厳論』における法身」『日本仏教学会年報』53: 61-74。
- 1988b 「現観の智慧と対象－『現観荘厳論』における一刹那の覚知－」『宗教研究』62(3): 41-59。
- 1989 「『現観荘厳論』における種姓の区別」『印度学仏教学研究』37(2): 167-171。
- 1990 「ハリバドラ著『小註』と『八千頌般若経』－ブトン著『阿含の穂』を手がかりとして－」『日本西藏学会会報』35(掲載予定)。

ツルチム・ケルサン

- 1978 「Tson kha pa の *Dran nes leg bsad sñin po* 『未了義・了義善説心髓』について－シノブシス－」『印度学仏教学研究』26(2): 68-71。

トゥッチ、ジュゼッペ

- 1984 『マンダラの理論と実践』ロルフ・ギーブル訳 平河出版社。

戸崎宏正

- 1974 「後期大乘仏教の認識論」『講座仏教思想』2 理想社、pp.145-186。
- 1984 「ダルマキールティの認識論」『講座・大乘仏教』9 春秋社、pp.153-182。

長尾雅人

- 1954 『西藏仏教研究』岩波書店。

- 1956 「チベット仏教に於ける真理観」宮本正尊（編）『仏教の根本真理』三省堂、pp.651-673。
- 1975/1976 「書評と紹介 健代淵応校訳『Abhisamayālamkāra-śāstraṭīkāの研究』『鈴木学術財団研究年報』12/13: 116-118。
- 1976 「中辺分別論」『大乘仏典15 世親論集』中央公論社、pp.215-409。
- 1978a(1941) 「三性説とその譬喩」『中観と唯識』岩波書店、pp.207-236（『東方学報』（京都）11(4)）。
- 1978b(1952) 「転換の論理」『中観と唯識』岩波書店、pp.237-265（『哲学研究』405）。
- 1978c(1971) 「仏身論をめぐるて」『中観と唯識』岩波書店、pp.266-292（『哲学研究』521）。
- 1982 『撰大乘論 和訳と注解 上』講談社。
- 1987 『撰大乘論 和訳と注解 下』講談社。

長沢実導

- 1978 『瑜伽行思想と密教の研究』大東出版会。

中村瑞隆

- 1961 『梵漢対照究竟一乗宝性論研究』山喜房仏書林。

西義雄

- 1953 『原始仏教に於ける般若の研究』大倉山文化科学研究所。

西尾京雄

- 1940 『仏地経論之研究』破塵閣書房。

西岡祖秀

- 1978 『西藏仏教宗義研究—トウカン『一切宗義』シチェ派の章—』東洋文庫。

野沢静澄

- 1953 「唯識三十頌の原典解釈」山口益・野沢静澄『世親唯識の原典解明』法蔵館、pp.133-408。

袴谷憲昭

- 1976a 「中観派に関するチベットの伝承」『三蔵』117、大東出版社。
- 1976b 「唯識の学系に関するチベット撰述文献」『駒沢大学仏教学部論集』7: 256-232。
- 1976c 「<三種転依>考」『仏教学』2: 46-76。
- 1976d 「<清浄法界>考」『南都仏教』37: 1-28。
- 1979 「<法印>覚え書」『駒沢大学仏教学部研究紀要』37: 60-81。
- 1982a 「瑜伽行派の文献」『講座・大乘仏教』8 春秋社、pp.43-76。
- 1982b 「チベットにおける唯識思想研究の問題」『東洋学術研究』21(2): 143-160。
- 1984 「<法身>覚書」『インド古典研究VI 神秘思想論集』:57-98。
- 1986 「チベットにおけるマイトレーヤの五法の軌跡」山口瑞鳳(編)『チベットの仏教と社会』春秋社、pp.235-268。

橋本光宝

- 1933a 「般若波羅蜜多經の要積なる蔵文明解(現観)莊嚴論の積(一)」『仏教学徒』4: 27-53。
- 1933b 「般若波羅蜜多經の要積なる蔵文明解(現観)莊嚴論の積」『聖語研究』1: 148-169。

羽田野伯猷

- 1950 「秘密集タントラにおけるチニャーナパーダ流について」『文化』5: 152-165。
- 1954a 「カーダム派史」『東北大学文学部研究年報』5: 1-105。
- 1954b 「チベット仏教学の問題」『文化』18(3): 268-285。
- 1956 「カムの仏教とそのカーダム派並びに衛蔵の仏教に与えた影響について」『文化』20(4): 1-23。
- 1958 「Tantric Buddhismにおける人間存在」『東北大学文学部研究年報』9: 1-79。
- 1965 「チベットにおける仏教観の形成について」『文化』29(2):1-31。
- 1966 「チベット大蔵経縁起[その一]-ナルタン大学問寺の先駆的事業をめぐりて-」『鈴木学術財団研究年報』3: 35-83。
- 1968 「チベットの仏教受容の条件と変容の原理の一側面」『日本文化研究所研究報告』4: 1-153。
- 1977 「書評と紹介 Hirofusa AMANO, A STUDY ON THE ABHISAMAYA-ALAMKĀRA-KĀRIKĀ-ŚĀSTRA-VṚITTI.」『鈴木学術財団研究年報』14: 58-60。

服部正明

- 1961 「ディグナーガの般若経解釈」『大阪府立大学紀要』9: 119-136。
1974 「中期大乘仏教の認識論」『講座仏教思想』2 理想社、
pp.103-143。

早島理

- 1982 「唯識の実践」『講座・大乘仏教』8 春秋社、pp.145-176。

早島鏡正

- 1956 「Abhisamaya (現観) について」『印度学仏教学研究』4(2):
546-549。

林屋友次郎

- 1938a 「仏教修行法に存する二大特徴の一としての無間等(現観)的修行
法」『仏教研究』2(2): 55-103。
1938b 「仏教修行法に存する二大特徴の一としての無間等(現観)的修行
法(承前)」『仏教研究』2(4): 70-121。

原田覚

- 1982a 「敦煌本 sGom rim dan po 考」『日本西藏学会会報』28: 4-8。
1982b 「チベット仏教の中観思想」『講座・大乘仏教』7 春秋社、
pp.283-314。

兵藤一夫

- 1984 「Bstan hgyur 所収の『二万五千頌般若』についての二・三の問題
—特に『現観莊嚴論』との関連において—」『日本西藏学会会報』
30: 7-12。
1987 「『現観莊嚴論』に見える順決択分—特に四種分別について」『印
度学仏教学研究』36(1): 93-100。

平川彰

- 1953 「説一切有部の認識論」『北大文学部紀要』2:
1969 『初期大乘仏教の研究』春秋社。
1974 『インド仏教史 上巻』春秋社。
1979 『インド仏教史 下巻』春秋社。

平松敏夫

1982 『西藏仏教宗義研究－トゥカン『一切宗義』ニンマ派の章－』東洋文庫。

福田洋一・石浜裕美子

1986 『西藏仏教宗義研究－トゥカン『一切宗義』モンゴルの章－』東洋文庫。

舟橋一哉

1952 『原始仏教思想の研究』法蔵館。

舟橋直哉

1985 『ネパール写本対照による大乘莊嚴經論の研究』国書刊行会。

本多恵

1978 『ヨーガ書註解－試訳と研究－』平楽寺書店。

松長有慶

1969 『密教の歴史』平楽寺書店。

松本史郎

1978 「Jñānagarbhaの二諦説」『仏教学』5: 109-137。

1980a 「Ratnākarasāntiの中観派批判（上）」『東洋学術研究』19(1): 148-174。

1980b 「Ratnākarasāntiの中観派批判（下）」『東洋学術研究』19(2): 152-180。

1980c 「仏教論理学派の二諦説（上）」『南都仏教』45: 101-118。

1981a 「チベットの仏教学について」『東洋学術研究』20(1): 137-155。

1981b 「lTa baḥi khyad parにおける中観理解について」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』13: 93-124。

1981c 「仏教論理学派の二諦説（中）」『南都仏教』46: 39-54。

1981d 「仏教論理学派の二諦説（下）」『南都仏教』47: 44-62。

1982a 「Madhyamakālokaの一乗思想－一乗思想の研究（I）－」『曹洞宗研究員研究生研究紀要』14: 1-47。

1982b 「チベットの中観思想－特に「離辺中観」説を中心にして－」『東

洋学術研究』21(2): 161-179。

- 1983 「後期中観派の空思想 - 「瑜伽行中観派」について -」『理想』610: 140-159。
- 1985 「仏教綱要書」山口瑞鳳(編)『講座敦煌6』大東出版社、pp.265-309。
- 1986a 「後期中観思想の解明に向けて - 郷正道氏『中観莊嚴論の研究』を中心に -」『東洋学術研究』25(2): 177-203。
- 1986b 「如来蔵思想は仏教にあらず」『印度学仏教学研究』35(1): 127-132。
- 1989 『縁起と空』大蔵出版。

真野龍海

- 1972 『現観莊嚴論の研究』山喜房仏書林。
- 1975 『梵文八千頌般若積索引 - 現観莊嚴論の研究(続) -』山喜房仏書林。

水野弘元

- 1961 「Abhisamaya(現観)について」『東海仏教』7: 50-58。
- 1968 『パーリ語辞典』春秋社。

壬生台舜

- 1967 「ラマ教の歴史」『講座仏教IV 中国の仏教』大蔵出版株式会社、pp.225-252。

御牧克巳

- 1972 「初期唯識諸論書に於けるSautrāntika説」『東方学』43: 77-92。
- 1978 「Blo gsal grub mtha' について」『密教学』15: 95-111。
- 1980 「antaraślokaについて」『印度学仏教学研究』28(2): 29-36。
- 1982a 「頓悟と漸悟」『講座・大乘仏教』7 春秋社、pp.217-249。
- 1982b 「チベットにおける宗義文献(学説綱要書)の問題」『東洋学術研究』21(2): 179-192。
- 1984 「刹那滅論証」『講座・大乘仏教』9 春秋社、pp.217-254。
- 1987 「チベット語仏典概観」長野泰彦・立川武蔵(編)『チベットの言語と文化』冬樹社、pp.277-314。
- 1988 「『ロサル宗義書』唯識派章 試訳(1)」『成田山仏教研究所紀要』11: 387-409。

宮坂宥勝

- 1969 「華嚴經十地品」『世界の思想Ⅱ-2 仏典』河出書房、pp.111-202。

宮下晴輝

- 1988 「現観辺智諦現観」『仏教学セミナー』47: 47-56。

森山清徹

- 1986 「Kamalaśīla と Haribhadra—一切智者の智の証明を巡って—」『印度学仏教学研究』35(1): 115-119。
1989a 「後期中観派の学系とダルマキールティの因果論」『仏教研究紀要』73: 1-47。
1989b 「Kamalaśīla と Haribhadra [2] - Haribhadra の引用する Bhāvanākrama I」『仏教論叢』33: 6-10。

山口瑞鳳

- 1967 「チベット仏教」『講座・東洋思想』5 東京大学出版会、pp.231-283。
1978 「吐蕃王国仏教史年代考」『成田山仏教研究所紀要』3: 1-52。
1980 「摩訶衍の禪」『講座敦煌』8 大東出版社、pp.379-407。
1982 「チベット仏教典籍解題 I」『成田山仏教研究所紀要』7: 1-37。
1982a 「チヨナンパの如来蔵説とその批判説」『田村芳郎博士還暦記念論集 仏教教理の研究』春秋社、pp.585-605。
1982b 「カダム派の典籍と教義」『東洋学術研究』21(2): 68-80。
1983 「チベット」玉城康四郎(編)『仏教史Ⅱ』山川出版社、pp.197-298。
1985 「『デンカルマ』八二四年成立説」『成田山仏教研究所』9: 1-61。
1988 『チベット 下』東京大学出版会。

山口益

- 1951 『世親の成業論』法蔵館。
1959 『般若思想史』法蔵館。
1966a(1935) 『中辺分別論釈疏』鈴木学術財団(破塵閣書房)。
1966b(1937) 『漢蔵対照弁中辺論』鈴木学術財団(破塵閣書房)。
1972 「弥勒造法性分別論の訳註」『山口益仏教学論集 上』春秋社、

pp.163-200。

山田龍城

1959a 『大乘仏教成立論序説』平楽寺書店。

1959b 『梵語仏典の諸文献－大乘仏教成立論序説 資料篇－』平楽寺書店。

横山紘一

1973 「唯識思想における認識作用の一考察－特に、顕現と行相とを中心にして－」『東方学』46: 103-119。

吉水千鶴子

1985 「Jñānapāda 流における「瑜伽行中観」説」『印度学仏教学研究』34(1): 86-88。

芳村修基

1974 『インド大乘仏教思想研究－カマラシーラ思想』百華苑。

吉元信行

1982 『アビダルマ思想』法蔵館。

Amano, H.

1975 A Study on the Abhisamaya-alamkāra-kārikā-śāstra-vṛtti.
Tokyo.

Anacker, S.

1984 Seven Works of Vasubandhu. Delhi.

Bendall, C.

1903 Subhāṣita-saṃgraha Part I. Le Muséon 22: 375-402.

1904a Subhāṣita-saṃgraha Part II. Le Muséon 23: 5-46.

1904b Subhāṣita-saṃgraha Part III. Le Muséon 23: 245-274.

Bhattacharya, K.

1978 The Dialectical Method of Nāgārjuna (Vigraha-vyāvartanī).
Delhi.

Bhattacharya, V.

1957 The Yogācārabhūmi of Acarya Asaṅga. Calcutta.

Boehtling, O. & Roth, R.

1855 Sanskrit-Wörterbuch. Petersburg.

Chandra Das, S.

1902 A Tibetan-English Dictionary with Sanskrit Synonyms. Calcutta.

1908 Pag Sam Jon Zang. Calcutta.

1970(1881, 1882) Contributions on the Religions and History of Tibet. New Delhi.

張怡孫 (Chang I-sun)

1985 『藏漢大辭典』民族出版、北京。

Chattopadhyaya

1981(1927) Atīśa and Tibet. Delhi(Calcutta).

Chatterjee, A. K.

1975 The Yogācāra Idealism. Delhi.

陳玉蛟 (Ch'en Yu-chiao)

1985 「宗喀巴現觀莊嚴論金鬘三寶積義」『華岡弘學學報』8: 425-444.

1987 「宗喀巴『現觀莊嚴論金鬘疏』「大乘廿僧」積義」『中華弘學學報』1: 181-228.

Chimpa, Lama & Chattopadhyaya, A.

1980(1970) Tāranātha's History of Buddhism in India.
Calcutta(Simla).

Conze, E.

1954 Abhisamayālaṅkāra. Serie Orientale Roma No.6, Rome.

1958 Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā. Bibliotheca Indica No.284,
Calcutta.

1960 The Prajñāpāramitā Literature. Indo-Iranian Monographs
Vol.6, Leiden.

1961 Abhisamayalankara. In Encyclopaedia of Buddhism Fasc.A-ACA,
Moscow, pp.114-116.

1967 Materials for a Dictionary of the Prajñāpāramitā Literature.
Tokyo.

1979(1975) The Large Sutra on Perfect Wisdom.
Delhi(California).

de La Vallee Poussin, L.

1896 Pañcakrama. Recueil du Travaux Fasc.16: 1-56.

1906 The Three Bodies of a Buddha (Trikaaya). Journal of the
Royal Asiatic Society: 943-977.

1913 Mūlamadhyamakakārikās de Nāgārjuna avec la Prasannapadā Com-
mentaire de Candrakīrti. Bibliotheca Buddhica IV, St.-
Petersbourg.

1931-1932 Notes et Bibliographie bouddhiques. Mélanges chinois
et bouddhiques 1: 377-424.

dGe bshes Chos kyi grags pa

1972(1957) 『藏文辞典』西藏仏教研究所(民族出版社、北京)。

Dutt, N.

1930 Aspects of Mahāyāna Buddhism. Calcutta Oriental Series No.23, London.

1934 Pañcavimsatisāhasrikā Prajñāpāramitā. Calcutta Oriental Series No.28, Calcutta.

Eckel, M.D.

1987 Jñānagarbha's Commentary on the Distinction between the Two Truths. Albany.

Edgerton, F.

1953 Buddhist Hybrid Sanskrit Dictionary. New Haven.

Eimer, H.

1978 Bodhipathapradīpa. Wiesbaden.

法尊 (Fa-tsun)

1936 『菩提道次第広論』新文豊出版。

1938 『現觀莊嚴論略釋』漢藏教理院。

Frauwallner, E.

1959 Dignāga, Sein Werk und seine Entwicklung. Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd- und Ostasiens 3: 83-164.

Galloway, B.

1981 Sudden Enlightenment in Indian Buddhism. Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-asiens 25: 205-211.

1985 Once again on the Indian Sudden-Enlightenment Doctrine. Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd-asiens 29: 207-210.

Gokhale, V.V.

1947 Fragments from the Abhidharmasamuccaya of Asaṅga. Journal of Bombay Branch of the Royal Asiatic Society N.S. 23: 13-38.

Gomes, L.O.

- 1977 The Bodhisattva as Wonder-worker. In Lewis Lancaster (ed.), Prajñāpāramitā and Related Systems, Berkley, pp.221-261.

Goshima, K.

- 1983 The Tibetan Text of the Second Bhāvanākrama. Kyoto.

Guenther, H.V.

- 1972 Buddhist Philosophy in Theory and Practice. Pelican Books, Berkeley.

- 1981(1959) The Jewel Ornament of Liberation by sGam po pa. London.

Har Dayar

- 1932 The Bodhisattva Doctrine in Buddhist Sanskrit Literature. London.

Haraprasad Shastri

- 1927 Advayavajrasaṅgraha. G.O.S. No.40, Baroda.

Hayashima, K.

- 1961 Abhisamaya. In Encyclopaedia of Buddhism Fasc. A-ACA, Moscow, pp.105-176.

Hayes, R.P.

- 1988 Dignaga on the Interpretation of Signs. Studies of Classical India No.9, Dordrecht.

Hikata, R.

- 1958 Suvikrāntavikrāmi-pariprocchā Prajñāpāramitāsūtra. Fukuoka.

Hirakawa, A. & others

- 1973 Index to the Abhidharmakośabhāṣya Part I. Tokyo.

Hopkins, J.

- 1973 Meditation on Emptiness. Ph.D. dissertation, University of Wisconsin.
- 1980 Compassion in Tibetan Buddhism. New York.
- Ichigo, M.
1985 Madhyamakālamkāra. Kyoto.
- Iida, S.
1980 Reason and Emptiness. Tokyo.
- Inagaki, H
1987 The Anantamukhanirhāra-Dhāraṇī Sūtra and Jñānagarbha's Commentary. Kyoto.
- Jackson, D.P. & Onoda, Sh.
1988 Rong-ston on the Prajñāpāramitā Philosophy of the Abhisamayālamkāra. Biblia Tibetica No.2, Kyoto.
- Jaini, P.S.
1959 Abhidharmadīpa. Tibetan Sanskrit Works Series No.4, Patna.
1979 Sāratamā. Tibetan Sanskrit Works Series No.28, Patna.
- Jha, G.
1986(1937) The Tattvasaṃgraha of Shāntarakṣita. (Gaekwad's Oriental Series No.80) Delhi(Baroda).
- Johnstone, E.H.
1950 The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantraśāstra. Patna.
1975(1928) The Saundarananda of Aśvaghosa. Delhi (Lahore).
- Johnstone, E.H. & Kunst, A.
1978 The Vighrahavyāvartanī of Nāgārjuna. In [Bhattacharya, K. 1978].
- Kajiyama, Y.
1973 Three Kinds of Affirmation and Two Kinds of Negation in Bud-

dhist Philosophy. Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens 17: 161-175.

Katsura, S.

1987 Reviews: Musashi Tachikawa, The Structure of the World in Udayana's Realism, A Study of the Lakṣaṇāvalī and the Kiraṇāvalī (Studies of Classical India 4). Indo-Iranian Journal 30(1): 37-45.

Kimura, T.

1971 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā(II-1). Memoirs of Taisho University The Departments of Buddhism and Literature 56: 1-36.

1972 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā(II-2). Memoirs of Taisho University The Departments of Buddhism and Literature 57: 1-22.

1973 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā(II-3). Memoirs of Taisho University The Departments of Buddhism and Literature 58: 1-33.

1975 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā(II-4). Memoirs of Taisho University The Departments of Buddhism and Literature 61: 1-14.

1978 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā(II-5). Memoirs of Taisho University The Departments of Buddhism and Literature 64: 1-12.

1986 Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā II · III. Tokyo.

Kochumuttom, T.A.

1982 A Buddhist Doctrine of Experience. Delhi.

Kuijip, L. W. J. van der

1983 Contributions to the Development of Tibetan Buddhist Epistemology. Wiesbaden.

Kunst, A.

1977 Some Aspects of the Ekayāna. in Lewis Lancaster(ed.)

Prajñāpāramitā and Related Systems, Berkley, pp.313-326.

Lamotte, E.

1944, 1949, 1970, 1976, 1980 Le Traité de la Grande Vertu de Sagess. Louvain.

Lethecoe, N.R.

1976 Some Notes on the Relationship between the Abhisamayālaṅkāra, the Revised Pañcaviṃśatisāhasrikā, and the Chinese Translations of the Unrevised Pañcaviṃśatisāhasrikā. Journal of the American Oriental Society 96(4): 499-511.

Levi, S.

1907 Mahāyānasūtrālaṅkāra. Paris.

1925 Vijñaptimātratāsiddhiprakaraṇadvayam. Paris.

Lokesh Chandra

1981(1963) Materials for a History of Tibetan Literature (Śata-Piṭaka Series Vols.28-30) Kyoto(New Delhi).

1982(1958) Tibetan-Sanskrit Dictionary. Kyoto(New Delhi)

Lopez, D.

1982 The Svātantrika-Mādhyamika School of Mahāyāna Buddhism. Ph.D. dissertation, University of Virginia.

Matilal, B.K.

1964 The Intentional Character of Lakṣaṇa and Samkara in Navya-Nyāya. Indo-Iranian Journal 8(2): 85-95.

Matsumoto, S.

1980 Sahopalambha-niyama. Journal of Soto Sect Research Fellows 12: 1-34.

Mimaki, K.

1982 Blo gsal grub mtha', Chapitre IX(Vaibhāṣika) et XI(Yogācāra)

édites, et Chapitre XII(Madhyamika) édite et traduit. Zinbun Kagaku Kenkyusho, Kyoto.

Miyasaka, Y.

1972 Pramāṇavārttika-kārikā (Sanskrit and Tibetan). Acta Indologica 2: 1-206.

Monier-Williams, M.

1899 A Sanskrit-English Dictionary. Oxford.

Murti, T.R.V.

1960 The Central Philosophy of Buddhism. London.

Nagao, G.N.

1958 Index to the Mahāyāna-sūtrālamkāra I. Tokyo.

1964 Madhyāntavibhāga-bhāṣya. Tokyo.

Nishio, K.

1940 The Buddhahūmi-sūtra and the Buddhahūmi-vyākhyāna. Nagoya.

Nozawa, J.

1955 The Dharmadharmatāvibhaṅga and the Dharmadharmatāvibhaṅgavṛtti, Tibetan Texts, Edited Editions. In the Studies in Indology and Buddhology, Presented in Honour of Professor Susumu Yamaguchi on the Occasion of his Sixtieth Birthday, Kyoto, pp.9-49.

Obermiller, E.

1931 The Sublime Science of the Great Vehicle to Salvation. Acta Orientalia Vol.9: 81-306.

1932 The Doctrine of Prajñāpāramitā as exposed in the Abhisamayālamkāra of Maitreya. Acta Orientalia Vol.11: 1-333.

1933,1936 Analysis of the Abhisamayālamkāra. London.

1960(1937) Prajñā-pāramitā-ratna-guṇa-saṃcaya-gāthā. (Bibliotheca Buddhica Vol.29) The Hague(Leningrad).

1964(1931,1932) History of Buddhism (Chos-hbyung) by Bu-ston.
Tokyo(Heidelberg).

Onoda, Sh.

1983 Rje btsun pa'i Don bdun cu— An Introduction to the Abhisamayālamkāra— . Sutudia Asiatica No.6, Nagoya.

Pensa, C.

1967 L'Abhisamayālamkāravṛtti di Ārya-Vimuktisena. Serie Orientale Roma No.37, Rome.

Pradhan, P.

1950 Abhidharmasamuccaya. Viśva-Bharati Studies No.12, Santiniketan.

1975(1967) Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu. Tibetan Sanskrit Works Series No.8, Patna.

Ramasankaratripathi

1977 Abhisamayālamkāravṛtṭiḥ Sphutārthā. Sarnath.

Ryth Davids, T.W. & Stede, W.

1921 The Pali Text Society's Pali-English Dictionary. London.

Roerich, G.N.

1974(1949) The Bule Annals. Delhi(Caucutta).

Ruegg, D.S.

1963 The Jo nan pas. Journal of the American Oriental Society 83: 73-91

1966 The Life of Bu ston rin po che. Serie Orientale Roma No.34, Rome.

1968 On the Dge lugs pa Theory of the Tathāgatagarbha. In the Pratidānam, the Hague, pp.500-509.

1968/1969 Ārya and Bhadanta Vimuktisena on the Gotra-theory of the Prajñāpāramitā. Wiener Zeitschrift für des Kunde Süss- und Ostaniens 12/13: 303-317.

- 1969 La Theorie du Tathāgatagarbha et du Gotra. Paris.
- 1971 Le Dharmadhātu stava de Nāgārjuna. In the Etudes Tibetaines Dediees a la Memoire de Marcelle Lalou, Paris, pp.500-509.
- 1973 Le Traite du Tathāgatagarbha de Bu ston rin chen grub. Paris.
- 1977 The gotra, Ekayāna and tathāgatagarbha theories of the Pra-jñāpāramitā according to Dharmamitra and Abhayākaragupta. In Lewis Lancaster(ed.), Prajñā-pāramitā and Related Systems, Berkley, pp.283-312.
- 1981 The Literature of the Madhyamaka School of Philosophy in India. A History of Indian Literature Vol.7. Wiesbaden.

Sakuma, H

- 1987? The Classification of Commentaries on the Dharmakāya Chapter of the Abhisamayālaṅkāra. In the Proceedings of the XXXII ICANAS, Hamburg.

Schmithausen, L.

- 1969 Der Nirvāṇa-Abschnitt in der Viniścayasamgrahaṇī der Yogācārabhūmiḥ. Wien.
- 1971 Philologische Bemerkungen zun Ratnagotravibhāga. Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens 15: 123-177.
- 1983 The Darśanamārga Section of the Abhidharmasamuccaya and its Interpretation by Tibetan Commentators. In the Contributions on Tibetan and Buddhist Religion and Philosophy Vol.2, Wien, pp.259-274.

Shukla, K.

- 1973 Śrāvakabhūmi of Ācārya Asaṅga. Tibetan Sanskrit Works Series No.14, Patna.

Sopa, Geshe lHundup & Hopkins, J.

- 1976 Practice and Theory of Tibetan Buddhism. New York.

Sparham, G.

- 1987 Background Material for the First of the Seventy Topics in

Maitreya-natha's Abhisamayālamkāra. Journal of the International Association of Buddhist Studies 10(2): 139-158.

Stcherbatsky, Th. & Obermiller, E.

1929 Abhisamayālamkāra-prajñā-pāramitā-upadeśa-śāstra.
Bibliotheca Buddhica No.23, Leningrad.

Steinkellner, E.

1974 On the Interpretation of the Svabhāvahetuḥ. Wiener Zeitschrift für die Kunde Südasiens 18: 117-129.

Suzuki, D.

1957(1930) Studies in the Laṅkāvatāra Sūtra. London.

Tachikawa, M.

1981 The Structure of the World in Udayana's Realism. Studies of Classical India No.4, Dordrecht.

Taita, N.

1976 Abhidharmasamuccaya-bhāṣya. Tibetan Sanskrit Works Series No.17, Patna.

Takasaki, J.

1966a A Study on the Ratnagotravibhāga (Uttaratantra). Serie Orientale Roma No.33, Rome.

1966b Dharmatā, Dharmadhātu, Dharmakāya and Buddhadhātu. Journal of Indian and Buddhist Studies Vol.14(2): 78-94.

Taniguchi, F.

1990? Quotations from the First Bhāvanākrama of Kamalaśīla found in Some Indian Text. In the Proceedings of the V International Seminar on Tibetan Studies, Narita (unpublished).

Thurman, R.A.F.

1984 Tsong Khapa's Speech of Gold in the Essence of True Eloquence. Princeton.

Tillemans, T.J.F.

- 1984 Two Tibetan Texts on the "Neither One nor Many" Argument for Sunyata. Journal of Indian Philosophy 12: 357-388.

Tshulkrim Kelsang & Onoda, Sh.

- 1985 Textbook of Se-ra Monastery for the Primary Course of Studies. Kyoto.

Tucci, G.

- 1932a The Abhisamayālamkārikā of Haribhadra. Gaekwad's Oriental Series No.62, Baroda.
- 1932b Two Hymns of the Catuh-stava of Nāgārjuna. The Journal of Royal Asiatic Society: 309-325.
- 1958 Minor Buddhist Texts Part II. Serie Orientale Roma No.9(2), Rome.
- 1971 Minor Buddhist Texts Part III. Serie Orientale Roma No.43, Rome.
- 1980 The Religions of Tibet. Geoffrey Samuel (trans.), New Delhi.

Vaidya, P.L.

- 1960 Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā. Buddhist Sanskrit Texts No.4, Baroda.

Vetter, T.

- 1966 Dharmakīrti's Pramānaviniścayaḥ, 1. Kapilel: Pratyakṣam. Wien.

Vostrikov, A.I.

- 1970 Tibetan Historical Literature. Harish Chandra Gupta (trans.), Calcutta.

Wayman, A.

- 1978 Calming the Mind and Discerning the Real. New York.

Willis, J.D.

1982 On Knowing Reality. Delhi.

Wogihara, U.

1930 Bodhisattvabhūmi. Tokyo.

1932-1936 Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā by Yaśomitra.
Tokyo.

1973(1932) Abhisamayālamkāralokā Prajñāpāramitāvyākhyā. Tokyo.

Yamaguchi, S.

1966(1934) Madhyāntavibhāgaṭīkā. Tokyo(Nagoya).

1974 Index to the Prasannapadā Madhyamaka-vṛtti(Part One). Kyoto.

Yaschke, H.A.

1881 A Tibetan-English Dictionary. London.

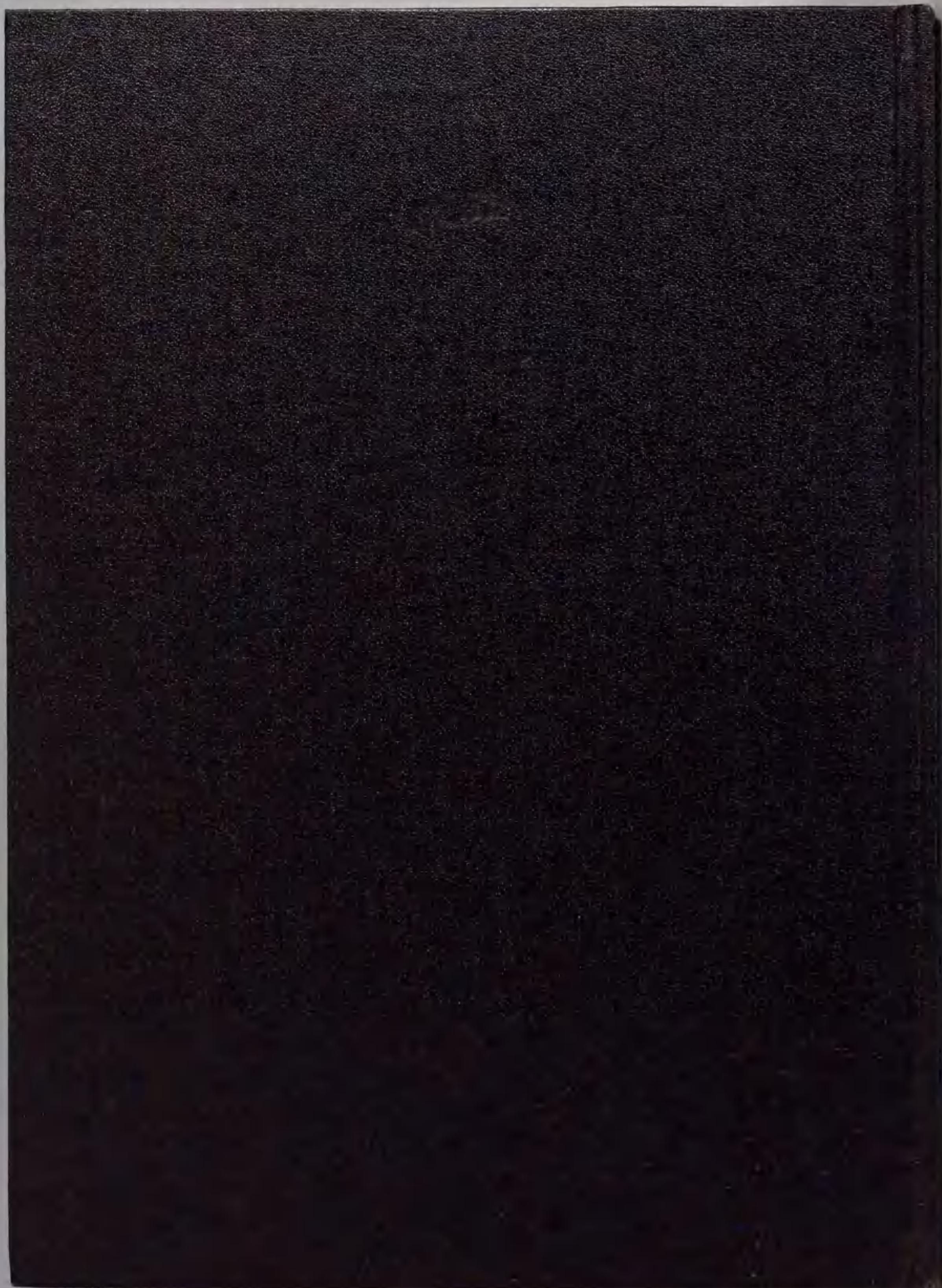
略号表

- Am: 天野宏英 (編)、Abhisamayālaṅkāravṛtti (『現觀莊嚴論註』) by Haribhadra. =[天野 1986]
- AAV: Abhisamayālaṅkāravṛtti (『現觀莊嚴論註』) by Ārya Vimuktisena. =[Pensa 1967]
- AAV(T): mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa (『現觀莊嚴論註』) by Ārya Vimuktisena. =[TTP No.5185: Vol.88]
- AK: Abhidharmakośa (『阿毘達磨俱舍論』) by Vasubandhu. =[Pradhan 1975]
- AS: Abhidharmasamuccaya (『阿毘達磨集論』) by Asanga. =[Pradhan 1950]
- ASBh: Abhidharmasamuccayabhāṣya (『阿毘達磨雜集論』). =[Taita 1976]
- ASP: Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā (『八千頌般若經』). =[Wogihara 1973]
- BBh: Bodhisattvabhūmi (『菩薩地』). =[Wogihara 1930]
- BCA: Bodhicaryāvatāra (『入菩提行論』). by Santideva. =[Vaidya 1960]
- BhK(1): The first Bhāvanākrama (『修習次第』初篇) by Kamalasila. =[Tucci 1958]
- D: Derge edition of mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa (『現觀莊嚴論註』) by Haribhadra. =[Toh No.3793]
- DA: rTogs par dka' ba'i snang ba (Duravabodhālokā 『難解箇所の光明』) by Dharmakīrtisrī. =[TTP No.731: Vols.18-19]
- HYP: Hathayogapradīpikā by Svātmarāma.
- K: Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa (『二万五千頌般若經』). =[TTP No.731: Vols.18-19]
- KK: Grags pa'i cha (Kīrtikalā 『名譽の部分』) by Ratnakīrti. =[TTP No.5197: Vol.91]
- LN: Lung gi snye ma (『阿含の穗』) by Bu ston Rin chen grub. =[Toh No.5173]
- MA: Madhyamakālaṅkāra (『中觀莊嚴論』) by Sāntaraksita. =[Ichigo 1985]
- MAP: Madhyamakālaṅkārapañjikā (『中觀莊嚴論難語積』) by Kamalasila. =[Ichigo 1985]

- MAv: Madhyamakāvatāra (『入中論』) by Candrakīrti. =[de La Vallee Poussin 1907-1912]
- MAV: Madhyāntavibhāga (『中辺分別論』). =[Nagao 1964]
- MAVBh: Madhyāntavibhāgabhāṣya (『中辺分別論積』) by Vasubandhu. =[Nagao 1964]
- MAVt: Madhyāntavibhāgaṭīka (『中辺分別論積疏』) by Sthiramati. =[Yamaguchi 1966]
- MK: Madhyamakakārikā (『中論頌』) by Nāgārjuna. =[de La Vallee Poussin 1913]
- MarK: gNad kyi zla ba'i od (Marmakaumudī 『要所の月光』). =[TTP No.5202: Vol.92]
- MSA: Mahāyānasūtrālamkāra (『大乘莊嚴經論』). =[Levi 1907]
- MSABh: Mahāyānasūtrālamkārabhāṣya (『大乘莊嚴經論積』) by Vasubandhu. =[Levi 1907]
- NNG: rNam bshad snying po'i rgyan (『善説・心髓の莊嚴』) by Dar ma rin chen. =[Toh No.5433]
- P: Peking edition of mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi 'grel pa (『現觀莊嚴論註』) by Haribhadra. =[TTP No.5191: Vol.90]
- PP: Tshig rab tu gsal ba (Prasphuṭapadā 『語句の解明』) by Dharmamitra. =[TTP No.5194: Vol.91]
- PPA Shes rab sgron ma'i phreng ba (Prajñāpradīpāvalī 『般若の燈明の環』) by Buddhaśrījñāna. =[TTP No.5198: Vol.91]
- PrasP: Prasannapadā (『明らかな言葉』) by Candrakīrti. =[de La Vallee Poussin 1907]
- PV: Pramānavārttika (『知識論評積』) by Dharmakīrti. =[Miyasaka 1972]
- PVi: Pramānaviniścaya (『知識論決定』) by Dharmakīrti. =[Vetter 1966]
- PVP: Pañcavimsatisāhasrikā Prajñāpāramitā (『二万五千頌般若經』). =[Dutt 1934]
- Ra: Rāmasankaratripāthī (ed.), Abhisamayālamkāravṛttiḥ Sphuṭārthā (『現觀莊嚴論註』) by Haribhadra. =[Rāmasankaratripāthī 1977]
- RGV: Ratnagotravibhāga Uttaratantra (『究竟一乘寶性論』). =[Johnstone 1950]
- RSP: bCom ldan 'das yon tan rin po che sdud pa'i tshigs su bcaḍ

- pa'i dka' 'grel (Ratnagunasamcayagāthāpañjikā 『宝徳蔵頌細疏』) by Haribhadra. =[TTP No.5190: Vol.90]
- SBh: Śrāvakabhūmi (『声聞地』). =[Shukla 1973]
- SK: The Complete Works of the Great Masters of the Sa skya Sect of the Tibetan Buddhism. Toyo Bunko, Tokyo.
- SN: mNgon par rtogs pa'i rgyan gyi snang ba (『現觀莊嚴論の光明』) by Haribhadra. =[TTP No.5189: Vol.90]
- SPhr: gSer gyi phreng ba (『黄金の鬘』) by Tsong kha pa. =[Toh No.5412]
- T: Tengyur edition of Shes rab kyi pha rol tu phyin pa stong phrag nyi shu lnga pa (『二万五千頌般若經』). =[TTP No.5188: Vols.88-90]
- Toh: A Complete Catalogue of the Tibetan Buddhist Canons and A Catalogue of the Tohoku University Collection of Tibetan Works on Buddhism. Tohoku University, Sendai.
- TTP: The Tibetan Tripitaka Peking Edition Catalogue. Suzuki Research Foundation, Tokyo.
- Tu: Giuseppe Tucci (ed.), Abhisamayālaṅkāralokā (『現觀莊嚴論の光明』) by Haribhadra. =[Tucci 1932]
- VMS(T): Triṃśikā Vijñaptimātratāsiddhi (『唯識三十論』) by Sthiramati. =[Levi 1925]
- VMS(V): Viṃśatikā Vijñaptimātratāsiddhi (『唯識二十論』) by Vasubandhu. =[Levi 1925]
- VV: Vigrahavyāvartanī (『廻諍論』) by Nāgārjuna. =[Johnstone & Kunst 1978]
- Wo: Unrai Wogihara (ed.), Abhisamayālaṅkāralokā (『現觀莊嚴論の光明』) by Haribhadra. =[Wogihara 1973]
- YBh: Yogacarabhūmi (『瑜伽師地論』). =[V. Bhattacharya: 1957]
- YS: Yogasūtra by Patañjali.
- YSBh: Yogasūtrabhāṣya by Vyāsa.
- 俱舍: 『阿毘達磨俱舍論』 = [佐伯 1881]
- 光讚: 『光讚般若波羅蜜經』 = [大正 No.222: Vol.8]
- 集論: 『阿毘達磨集論』 = [大正 No.1605: Vol.31]
- 雜集論: 『阿毘達磨雜集論』 = [大正 No.1606: Vol.31]
- 大正: 『大正新修大藏經』
- 大品: 『摩訶般若波羅蜜經』 = [大正 No.223: Vol.8]

二会：『大般若波羅蜜多經・第二会』 = [大正 No.220: Vol.7]
放光：『放光般若波羅蜜經』 = [大正 No.221: Vol.8]



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19

